ひとなみの幸せ

ひとなみの幸を

まえがき

私には千代子という四番目の娘がおります。千代子は生れた時「この子は体の大きな立派な娘さんになりますよ」と産婆さんにほめられました。その千代子は三三才になりますが、体は一人前に発育しているものの、自分の姓名を書けるだけで、そのほかの読み書きは一切できません。それは後天性の精神薄弱者だからです。一体何が原因で、そのようなことになったのか私どもにはわかりません。思いあたることといえば、妻と子供たちは終戦直前私より一足さきに、蒙古政府の首都張家口市から着のみ着のままの姿で内地へ引揚げてきたのですが、当時千代子は生後四か月の乳呑子でした。小さい子供たち何人かを連れての引揚げでしたので、いろいろ苦労がありました。その時の無理がたたったのか郷里に着くなり風邪をひき高熱が数日間続いたことがあったそうです。それが原因で精神薄弱者になったと思うしかなく、ほかの子供たちには、いずれも異常はありません。千代子が小さいときは他の子供たちと比べて多少知恵が遅れているのではないかぐらいにしか思っておりませんでした。しかし、成長するにしたがって異常であることがわかりました。

私は千代子の将来と不治の疾患に対する不安がつのるばかりで、毎日暗い気持で過しており

ました。こわいものには触れたくないという気持が強かったのです。千代子の世話は一切妻にやらせて、私自身は、その問題からなるだけ逃避することばかり考えておりました。しかし、千代子は一日一日と成長し可愛くなり、私にまとわりつくようになりました。

私は、その姿を見ているうちに「この子には何も責任はないのだ！　この子のため、このような不幸な子供たちのために自分でできることならなんでもしてやろう」という気持に変ってきました。これまでの逃げ腰の態度が恥ずかしくなりました。そのように気持が変ってからは、今までめいって暗かった気持も明るくなってきました。役所の仕事の合間に娘が世話になっている施設の父兄会長として会員相互間の連絡をはかったり、施設の充実をはかる資金作りのため、有名人のところにご寄附を願いに訪ねていったり、また慈善音楽会を開催するため方々奔走したりいたしました。当初は、この世界のことは門外漢だったので、子供たち可愛さのため夢中で飛び廻りました。今考えてみても冷汗がでるようなぶしつけなこともいたしました。初対面の方々がほとんどでしたが、どの方たちも私の話に耳を傾けて大変理解のある態度を示してくださいました。未知の方々からもご協力と激励をいただきました。その時ご好意いただきました方々に対する感謝の気持を書き記しておけば将来なにかの参考になるのではないかと思いそのときの事情をできる限り関係雑誌に登載させてもらっておりました。そのことに対しても皆様から大変ありがたい激励のお言葉を頂戴し感激いたしたのであります。そして、もっともっと努力を続けたいと

思っておりました。

今回先輩友人たちから、これまでの拙稿を整理して出版したならば私と同じような悩みをもっておられる方々の良い参考にもなり、また、社会一般の理解を得ることにもなるとの強いおすすめがありました。私としましては拙文でもあり、十分わが意を表わすことにも欠けていますのでためらいがあったのですが、おすすめにしたがうことによって、いささかでも世に参考資料を提供することになれば望外の喜びであり、また、多少なりとも益金をあげることができれば施設に寄贈することができるのではないかという気持にもなり、福祉関係を中心に、その他のものも若干付加して本書を自費出版することにいたしました。もし、この拙稿が同じ子を持つご父兄の今後に、あるいは関係の各位に少しでもご参考になるところがありますれば、また世の人々のこの子らへの一層のご理解ご協力をいただく一助ともなりますればと考えておる次第でございます。

本書は、このたび執筆したものの外はいずれも月刊誌社会福祉法人全日本精神薄弱者育成会発行の「手をつなぐ親たち」、社会福祉法人全国福祉協議会発行の「月刊福祉」、法曹会発行の「法曹」、宗教法人世界救世教発行の「地上天国」、同旬刊紙、「栄光」、全国裁判所書記官協議会発行の季刊誌「会報」などに掲載されたものに補筆訂正のうえ転載したことを申し添えます。

本書刊行にあたり岸盛一氏から題字の揮毫とご懇篤なるご教示を賜りましたことは、私にとっ

てこのうえない光栄に存じます。また森下多喜雄、佐古敬助両君には有益なるご助言とご協力もいただきご好意に感謝いたします。なお、本書発行にご尽力くだされた星野精版印刷株式会社々長星野正一郎氏に対して心からお礼を申し上げます。

昭和五一年一〇月

武沢静雄

目次

第一部

ひとり子の父から、みんなの父への歩み……一
娘、千代子との別れ(三)　父兄会創設へ(一〇)　鹿児島育成園(一三)　あした来るか(一五)
いただきます(一八)　おじさんの嘘つき(二一)　顧問お願いのこと(二四)　慈善公演のこと
(二七)　役人では、赤字になるわよ(二八)　渡辺はま子先生ご来園(五三)
犬は知っている……五九
背番号3……六七
ひとなみの幸を……七五
この世に生をうけた私たちも人間です(七七)　お母さんが悪いのよ勘忍して(八一)　施設
指導員は精神薄弱者の親でもある(八二)　この子らに光を(八五)

精神薄弱者の真の幸せのため……八七
彼の生いたちと罪となる事実(九〇)　七〇三号法廷(九一)　彼に対する判決(九三)　精薄者の社会復帰について(九四)　施設内に授産施設を(九四)　精薄者に生きるよろこびを(九七)
請願書(一〇〇)
こころ……一〇三
大慈の人ライシャワー大使……一二
ライシャワー大使と鹿島育成園の子どもたち(一二三)
慈善音楽会についてのご協力……一七三
一　慈善音楽会資金造成に対する協力……一七五
(1)　ふるさと・山下春江・石田博英・渡辺はま子……一七五
(2)　東海林太郎・渡辺はま子・㈱長島観光開発……一八五
二　慈善音楽会に対する協力……一八九
(1)　日本相撲協会・水谷八重子・森繁久弥・日本歌手協会・喜劇人協会……一八九

(2) 読売巨人軍……一九三
三　慈善音楽会の挨拶―長谷川堅二・石田博英・山下春江・関屋五十二……一九六
光の家建設の夢……二〇三
心身障害者に対する諸制度の案内……二二五

第二部

上司と下僚……二三七
一　三宅正太郎先生の思い出……二三九
東京地裁所長時代(二三九)　札幌控訴院長時代(二三五)　大審院部長時代(二三七)　長崎控訴院長時代(二三九)　司法次官時代(二四〇)　大審院部長時代(二四二)　弁護士時代(二四五)　裁判と三味線(二四七)　先生と新聞記者(二四八)　行先を教えたのは君か(二五〇)　飲み屋の精算書(二五一)　三宅さんを偲ぶ会における横田正俊氏の談話(二五三)　同小林直人氏の談話(二五四)

二　金田耕作先生の思い出……二五八
水に祈る……二六一
中国娘の語学教師（二六三）　黄土の家の人々（二六四）　無装備と収賄（二六八）　没法子（仕方ない）と露店食（二六九）　日本帝国敗れたり（二七〇）
犬のまごころ……二七五
国母皇后陛下……二九九
老優の覚悟……三〇七

ひとりの子の父から
みんなの父への歩み

ひとりの子の父から、みんなの父への歩み

◎ 娘、千代子との別れ

私の四女、千代子の発育状態がどうもおかしいと思いながら暮しておりましたが、精神薄弱者と判明したのは、中学一年生のときでした。蒙古政府の首都張家口市から終戦の直前に妻と子供達は着たきりの姿で引き上げた。時に、生後四カ月の乳児であった千代子、千里の道を頑張りはしたものの、その疲れもあってか、郷里福島に着くなり風邪をひき、四日間、四〇度という高熱に襲われた。

千代子と愛犬メリー

それ以来の千代子の発育ぶりは異状で、口もきけず、歩行もできないまま五

歳を迎えました。その当時の海外からの引揚者の生活は一段と貧しく、経済的に極めて苦しい立場におかれていて、名医に千代子を、などとうてい叶えられるものではなかった。もちろん特効薬などもあろうはずがなかった。ただただ故事にならって、ヒョットしたら……と起り得ない奇蹟の訪れを心に祈るのみが親として精一杯でした。

九歳になって、やっと歩き始めたので、特殊学級のお世話になることになった。しかし、いくら学校に通わせても、読み書きを覚えることは困難事で、本人よりも私達の方が心に焦りを感じた。妻は、今日のいわゆる教育ママぶりよろしく、ほとんどつきっきりの状態であれこれと教え込もうと努めたのでしたが、千代子の頭脳は全くといっていいほどに反応を示さなかったのです。

私達親としては、せめてひら仮名の読み書き位はできてくれるようにと日夜教えたのです。この親の無理に千代子は三〇分もすると、もう投げ出すのです。そのうち泣き落しにかかることも覚え、それがまた私達の怒りを呼ぶのでした。

そんな生活の続いていたある年、私が東京へ転勤になり、そこで初めて千代子を専門医に診断してもらい、その診断の結果が「精神薄弱者」だったのです。つまり知能指数四〇ということでした。これは大脳の発達が三～四歳位のところでストップしているということなのだそうです。

こんな千代子でしたが、幸いにも近くに、東京都立青鳥養護学校という、精神薄弱者専門の学校があって、そこに入学が許可されたのでした。入学は許されたものの、ここでもやはり、依然として読み書きの能力は不十分で、やっとのことで姓名だけが書けるようになったのです。しかし、口はかなり達者になって、快活な日々を送り、母親の家事の手伝いも積極的にするようになりました。そして、学校が楽しくなったのか、進んで登校するようにもなり、これは私達にとっても喜ばしいことでした。

そして一応、曲りなりにも同校高等科を卒業ということになったのですが、卒業生のうち就職できる者のグループと在宅組といって就職困難者のグループの二つに区別されていて、千代子は後者に属しておりました。

ちょうどそのころ茨城県鹿島育成園が開園され、援護施設であるから、そこに千代子を入所させるように、と担任教師がすすめられたことを妻から聞かされ、私は一寸意外な心境に襲れた。他人の子供を、なぜ別居させるのか、余計な指図をするな！と、だが、いざそういう判定がくだされたとなると、千代子にとって何が真の幸かと考えてみる気になりました。

私は、千代子の学校関係のことは一切妻にまかせきりで、学校には一回も行かなかったので、このときになって、あらためて自分の無責任を反省し、娘の将来を種々考えたが、親子が別離して生活しなければならないことはたえられぬ気持ちが一杯で、妻にあたりちらしたりなどす

るばかりで、なかなか心が落着かず、決断しかねていました。
別離が果して娘の真の幸せなのだろうか、別離という不自然な親子関係こそ不幸だとすら考えるようになりました。
妻は、親が丈夫なうちは同居も結構だが、将来が心配ではないか、援護施設の世話になれば安心ではないかと、私を説得しました。
私は、かたくなな心にとらわれていて、妻の説得にも素直に耳をかさず、しまいには、お前にまかせるから、よいようにしなさいとつっぱねる有様でした。それでも一方、心の動揺はおさえきれず、娘の不幸を思う心情と、親としての責任感とが私をさいなむのでした。
妻は、方々の施設を見学し、精神薄弱者相談所や福祉事務所をかけめぐり、その結果施設への入所の決定書を持ち帰り、安心した様子でした。とはいえ、やはり妻も一六年間一緒に生活して育くみ、面倒を見て来た娘との別離への悲しみに心のなかで泣いているのは明らかで、何んといって慰めてやればよいのか、妻につらくあたった自分の思慮のたりなかったことの反省でいっぱいでした。
そんなある日、突然、福祉事務所から鹿島育成園への入所日の決定通知書が送られてきた。
妻は、すでにきっぱりと決心していたのだろうか、あるいは心と裏腹なのか、いずれにしろ、待ち兼ねてでもいたかのように、千代子の夜具の用意にとりかかり、夜なべまでするのでした。

日用品の買い求めなどに日々追いまくられている妻、けなげでもあり、また、あわれでもありました。

とうとう明日は千代子の出発という前夜、兄弟、一族が集ってささやかながら送別の宴を開きました。

千代子は

「私は何処へ行くのよ？　何をしに行くのよ？」

と、しきりにくりかえしていました。

私達は千代子が納得するような説明をしてやることはできず

「お母さんと一緒に汽車に乗るんだよ」

と一時をごまかすほかなく、明日は朝が早いからとなだめすかして、無理やりに千代子を就寝させたのです。

妻は、夜おそくまで、明日の娘との旅立ちのため、寿し弁当や、ゆで玉子などを用意し、バッグを整理し、もたせてやる衣類などをえらんでいました。その妻の姿は、まことに美しく尊いものでした。そしてこんな時の女親の決断力、冷静さを改めて見直し、あわせて妻いたればこそ、と安心もし感謝もしたのです。口にこそ出さない、心中おそらく泣いているだろう妻を思うと、私もその夜はまんじりともせず、娘との別離にこだわっていたことを心から反省し

「小慈大慈を妨げる」という言葉を心の中でくりかえし、また、あれこれと考えて一夜を明かしてしまいました。

とうとう出発の朝がやって来た。

私は一同を集めて、見送りの言葉を相談しようとした。兄弟達は、電車の停留所まで送っていくということでしたが、私は別れのときを考えると、とてもその気になれなかった。

遂に別れのときがやって来た。私は玄関で千代子の手を握り

「行っていらっしゃい」

と、別れの挨拶としては、まことに不似合いな言葉しか口にでなかった。

千代子は、大の仲よしでもある我が家の愛犬メリーと先になり後になりしながら、階段を降りて行った。

千代子の足音がだんだん遠のいて行く、私は、自分の部屋に戻って階下の見える北側の窓際にたたずんだ。下に目をやった。千代子は、もう私の立っている窓を見上げて、何べんも何べんも手を振り、ふり返りながら消えて行った。

〃元気で暮してくれよ、千代子……〃

静まり返えった部屋の中で一人になった私、急に胸がジーンと熱くなって、身のおきどころがなくなり、布団を頭からかぶってじっとしている……すでに決心していたはずなのに、涙は

止めどなく流れて枕をぬらす。夜通し心の中でくりかえした「小慈大慈を妨げる」を何べんも自分の心にいいきかすのみでした。

千代子を見送って帰って来た子供達が

「母さんと千代ちゃんが乗った電車が発車するとき、メリーは夢中になって吠えて騒いだの」

と、また、そのときのメリーが、首輪の革紐が切れんばかりの力で引っぱり、電車の方に走ろうとしたとも話してくれた。

メリーは、千代子と大の仲良であっただけに、心に別れを感じて気を乱し、吠えてその感情を表わしたのであろう。私は思わずメリーの頭に手をやっていた。首をたれ、目をうるませているメリー、それがいかにも淋しい表情に見えた。

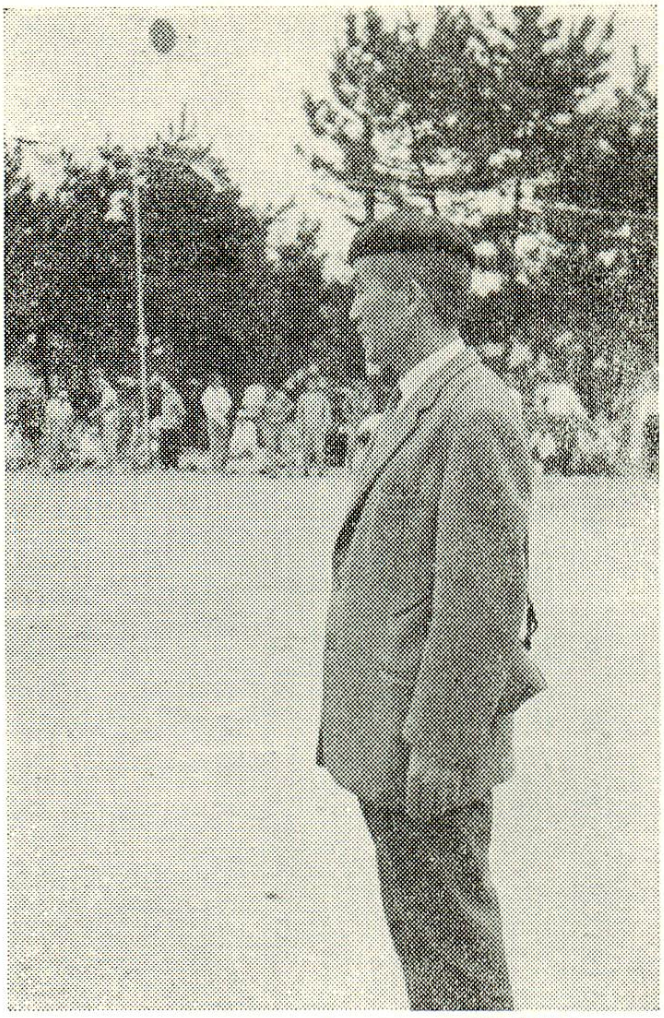
それは昭和三七年三月八日霜柱の立つ寒い朝のこと、私にとって生涯忘れ得ぬ日となったのです。

千代子を鹿島育成園に送り届けた妻は、その日のうちに帰宅した。そして千代子との別れのときの心境を訴えた。その切なさは、もし私が同道していても同じことであったろうと、この思い、この切なさ、この悲しみを抑えて、男の私にできかねた大役をよくぞ果してくれたと、妻に心から深々と感謝せずにはいられなかった。

この日から、千代子との、いつまた共に暮せるかも知れぬ別れの生活が始ったのです。

◎　父兄会創設へ

千代子の母校、東京都立青鳥養護学校の小宮山校長から、面会したいから来校願えれば、との連絡を受けて校長室を訪ねた。案内された応接間で待っていると二人の人が入って来られた。その一人が小宮山校長であろうことはすぐにわかったが、他の一人の方は、紹介されて鹿島育成園の藤原保園長と知ったのです。



子供たちの運動会に見入る藤原園長

私達は、互いに初対面でした。そしてこの両先生の私への要望は、鹿島育成園の父兄会設立の発起人になるようにとのこ

とだったのです。つまり、同園にお世話になっている者三十四名の父兄間の親睦をはかり、かつ同園に対する協力体制を整えることを考えて欲しい、という趣旨でした。

この趣旨に、私は勿論何んの異存もありませんでしたが、今迄の私を振りかえり見るとき、決して千代子のために父親として学校に協力していたとはいえず、我が身を恥じる気持と、それにも増して、そのような大役を果し得る自信もなかったので、他に適当な方をと小宮山校長に申しあげたのでしたが

「あなたに是非ともお引き受け願いたい。そのために藤原園長は、鹿島から、わざわざ上京されたのです」

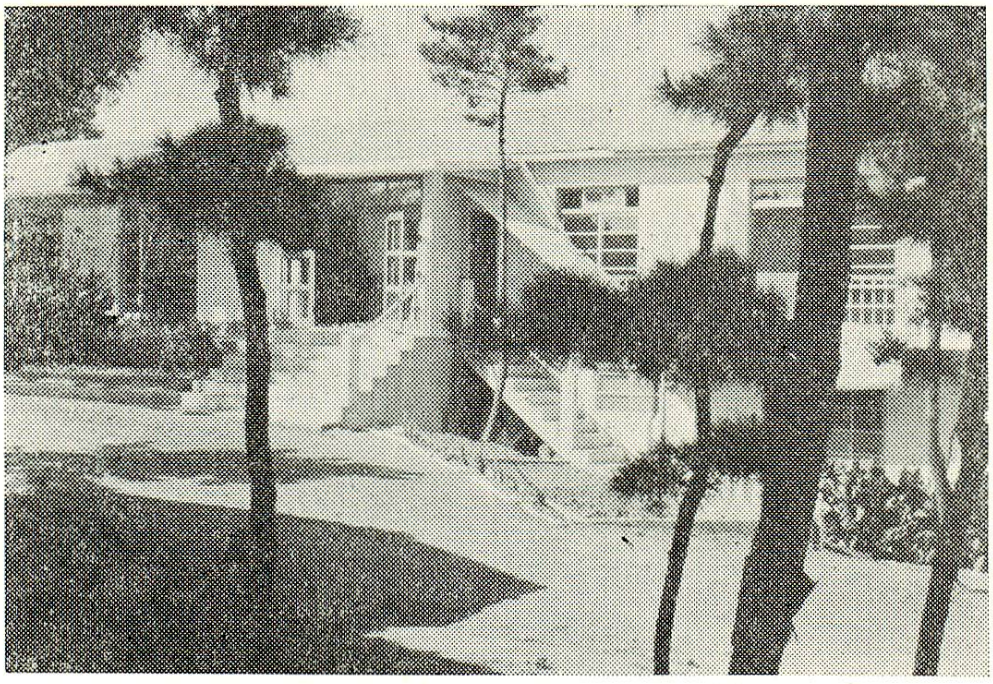
との小宮山校長の言葉と、両先生の熱意溢れる説得に、果して自分にやれるかと不安をいだきながらお引き受けすることになったのです。

父兄会設立の発起人を引き受けはしたものの、さて父兄会なるもの、一体何をどうすればよいのかと思案し、目標すら立てかねていたある日、藤原園長から一通の封書が届きました。その内容は

一、父兄全員が鹿島育成園に集合すること、

一、父兄と子供達とで潮干狩りを行なう、

一、潮干狩終了後、父兄会設立準備会を持つこと、



鹿島育成園成人寮

という企画を立てたから、全父兄に連絡をとって、集合させてもらいたいとのことでした。

時に私は未だ何んらの資格もない立場であったので、父兄会設立準備の世話人ということで、園長の企画の趣旨と潮干狩りの日時等を東京、茨城、宮城などの各父兄に案内状を送って連絡した。

暦によると潮干狩の予定された昭和三十七年六月十七日は、大潮の日で格好の潮干狩ができる幸運に恵まれた日に当っていた。

この鹿島育成園に収容されているのは、十八歳以上のちえ遅れの三十四名、その父兄は、農業の方、商業の方、公務員、会社員、未亡人、あるいは生活保護法の扶助を受けている方と、実にさまざまでありました。その全部の父兄の快い賛同を得て、全員の出席をと心に願って連絡したのでした。

◎　鹿島育成園

鹿島育成園は、社会福祉法人全日本精神薄弱者育成会の直接経営によるもので、茨城県鹿島町平井にある精神薄弱者福祉センターを経営する藤原保先生を園長として、同氏に委托された援護施設です。

私がここを初めて訪れたのは、潮干狩の前日でした。

同園は敷地約十五万坪の白砂青松の中にあり、他にも数棟の施設が立ち並んでいて、しかも鹿島総合病院の地つづきなのです。

千代子の入っている施設は新築の建物で、周囲にはひまわりなどいろいろの草花が咲き誇っており、庭内も、ちり一つなく箒の跡も鮮やかな、清潔感の溢れたところで、おそるおそる訪ねた私の心も和らげ、大きな安心感を与えてくれました。

藤原園長と千葉茂代指導員が出迎えて、遠路の旅をとねぎらってくださり、各指導員の方々にも紹介していただいたりした後、翌日の潮干狩の打合せを始めました。

私は、この建物内に入ったときから、廊下の片隅で、じっと私を注視している子供達の一群に気づいておりました。この子らは、ちえ遅れのうえに、手足の自由がきかず、言語も満足でないのです。突然の訪問者である私に対する視線が何を意味するのか、これを理解するまでには

かなりの時間が必要でした。

かの一群に気をとられている私のところに、三か月前に入園した千代子が馳け寄って来て

「潮干狩に来たんだね」

と久し振りの対面に喜びの握手をしたり、抱きついたりして有頂天になっておりました。

このとき、先程来、私を凝視していた一群の子供達が、私達の方にのっそりのっそりと歩きだし近寄って来るのです。誠に失礼ないいかただが、これには私は不気味としか表現のしようがない光景でした。ところがどうでしょう、この子供達は私に向って

「こんにちわ」

といい、ぴょこんと頭を下げてくれたのです。私はこのことばの中に、人間同志の対等感を呼び起され、嬉しいやら、今迄の私の気持の恥しさやらで、すぐには返答もできずオオム返しに

「こんにちわ」

と答えて、彼らの手を握ったのです。そうこうしているうちに、子供達の私を取りまく数が増えて来て、いつの間にやら私と千代子は、その輪の中にあったのです。

そんな中で、千代子も

「私のお父さんよ」

と得意になっておりました。

私が輪を作っている一人一人に握手をしてやると、私の体にさわったり、手を握り返えしたりするようになりました。

初めてこの人たちの言葉を聞く私に、やっとわかる程度の言語障害を持っている人が多かった。「こんにちは」というのが精一杯のようにさえ思えるほどでした。

手足の不自由なもの、ぜんそくでせき込むもの、そのうえにちえ遅れだというから二重苦、三重苦の不幸な子供たちでした。

彼らに対する私の知識は浅薄で、大部分の子供が千代子と同程度かと想像していただけに、その現実を見て、あまりにも痛々しげに思え、胸を締めつけられたのでした。

この子供らが私に声をかけてくれ、私との触れ合いを求めてくれていることに気づいて、私は先程この子供を気味悪く思ったことが、誠に申し分けなく、詫びる気持で一杯でした。

この子らとのこの出会いが、その後の私の道しるべになったのです。

◎　あした来るか

時間が経つにつれて、子供たちも私に心を許してくれたのか

「あちた（あした）わた（わたし）のおとさん（お父さん）来るか」

と、親が来るかという意味の質問が次から次へと子供たちの口から出たが、私はしばらくは、

なんと答えてよいかわかりませんでした。
彼らは、あすの潮干狩に自分の肉親が必ず来てくれることを私に確めようとしているのです。そしてそれは、肉親の愛を心から強く求めていることをあらわしていたのです。
彼らに「あした来るか」と再三問いつめられて
「潮干狩だものお父さんもお母さんも、きっと来るよ」
と答えざるをえなかった。
今宵のこの子らに、あるいは嘘をつく結果になるかもと考えながらも、そう答えるほかなかったのです。
彼らは、やっと安心したのか、私をとりまいた輪を解いて自分の部屋に戻って行った。その後姿を見送りつつ、彼らの今後にどんな境遇が待ちかまえているのだろう、この責任なき不運な宿命と因縁を自からの手で払いのけて進むことはむずかしいのではなかろうか。永き尊き生涯を、この施設の片隅で世間のお荷物として過すことになるのではあるまいかと考えたとき、なんともやり切れない気持で胸が一杯でした。
藤原園長の園内を参観させるとの声で我にかえり、園内の説明の一つ一つに真剣に聞き入ったのです。
一部屋四人制で、六畳の畳の部屋の左右に一段高くふとんを敷くようになっていて、つまり

ベッド式に作られており、その下には抽斗が備え付けられていて、日用品やその他の衣類などを入れるのだそうです。

部屋の中央には、茶テーブルがあって、壁に人形や絵を飾り、非常に気持の良い清潔感あふれる部屋でした。

一日の生活が終る消灯時間は、午後八時だそうです。今日もその時がやって来ました。でも子供たちは明日の湖干狩の方に気が走っているのでしょう、ましてや三か月ぶりに肉親とこの施設での初の対面ができるという興奮でか、なかなか寝付かれないようすでした。

千代子のことが気になり、娘の部屋をそっとのぞいてみると、三か月ぶりに母と一つふとんに体を寄せ合って、寝物語にふけっているのでした。その光景が、ああ、夫婦そろって来てやってよかった、金銭に替え難い大きな何ものかを得たように思われて、私を心から安らがせてくれました。

消灯後の園内はシーンと静まりかえっていて、時折、当直指導員の巡視する足音が聞え、懐中電灯のにぶい光がゆらぎます。園外の、松のこずえの間をすべり抜けているのだろう風の音と鹿島灘の波のさわぎが、園内を一そう静かに思わせるのです。

床についた私も、今日初めて体験したこの子らの実態に、予期せぬ神経の高ぶりを覚え、寝返りを繰り返すのでした。そして一〇時を告げる時計の音さえ耳ざわりに思えた。

そのとき急に園内が騒がしくなった。それは、あすのために最終列車でやって来た父兄たちが到着したのです。そしてそれを知った子供達の喜びがさらに園内の騒がしさを大きくした。

彼らの何人かが、私の部屋にやって来て

「お母さんが来たよ」、「お父さんが来たよ」と報告するのです。その声はかん高くはずんでいた。

しばらく賑わった園内が再び静まった。私は、子供らが、肉親の肌に抱かれて、一夜の幸せを味っていることを確めることができ、また先程の約束が早くも一部に果しえたこともあって、今度は、私も安心して消灯した。気のせいか、先程と同じ風の音が波のさわぎが、共にドラマチックに交響曲を奏でるかのように聞えて、私を静かに深い眠りへと誘ってくれた。

子供達は夜の明けるのを待ちきれないのか、薄暗いうちから、一人起き二人起きして洗面所に集り、水道の蛇口をひねりザァー、ザァー、ガチャン、ガチャンと音をたて始めた。これが次第に園内に広がった。定められた起床時間前ということもあってか、その子らの身のおきどころのなさそうな姿、その気持を察し得るが故に、私は苦笑を禁じ得なかった。

ときに、やっと東の空に赤い光が強まり始めていて、それは、あたかも、今日一日の、この子らのための、一点の曇りなき晴天を約束してくれているかのようであった。

◎　いただきます

彼らの起床時間は午前六時と定められている。
日課の始まりは清掃で、これは園の周囲を掃く者、部屋を掃く者、床を磨く者などとその分担が決められており、教科訓練の第一歩でもあるのだそうです。
そのあと、スピーカーから流れる音楽に合せてのラジオ体操、これもちえ遅れの彼らに、一糸乱れぬ動作でやれとは、もともと無理な注文です。しかし、それでも彼らは汗ばむほどに、一生懸命手足を動かし、精一杯の努力をしていることが、不自由なその一挙手一投足に窺えるのです。
我々父兄もこれに加って、我が子とともに朝の陽の光を一杯に浴びるのは、まことにすがすがしく楽しいものでした。
その後での朝食、ここでも当番制になっていて、それぞれがそれぞれの分担を、機敏にとはいえないまでも、真剣に果しているのです。そして全員がその食膳に着いたとき、当番の一人の女の子が、大きな声で「合掌」というと、みんなそれに続いて
「いただきます」
と唱和して箸を取った。
食前のこのような挨拶は私達も充分過ぎるほどに知り、なさねばと思いつつも、なかなか実行し難いのに、彼らは全員が、いともことなげに実行しているのです。

食事の前に合掌する子供たち

この子らに、あらためて「食」への感謝の念を教えられました。

食事の進み具合も、障害の度合により異なるのですが、先に終えた子らも、行儀よくその場に待っていて、全員の終えたのを見届けて、再び合掌し、声を合せて

「ごちそうさまでした」

と唱和してから席を立つのです。これが習慣であると聞いて、この短期間によくぞここまで、と感謝しました。

食べ残したもの、食器類の整理も当番の者がきちんと後片付をしている。これも三か月の訓練が実を結んだのだそうです。一歩一歩と、先生方の真摯な努力によって、この子らは共同生活の営みを体得しているのです。

この子らの中に千代子も入っていることが、

私には、まことに嬉しく思えました。これまでへの指導訓練のかげには、各指導員の強い忍耐と奉仕心と日夜の努力がと思うとき、心から感謝の念が湧いてきたことは、一人私のみではなかったでしょう。

私は、子供たちの食べ物に対する感謝の態度を見て、きっと、ここの指導員の方の中に、信仰の厚い方がいられるのではないかと考えていたが、指導員とのひと言ふた言の会話の中で、すぐにその方がわかりました。それは、千葉茂代指導員でした。千葉指導員は天理教に三か年余奉仕し、かつ奈良県吉野市の社会福祉施設に勤務しているうちに鹿島育成園をすすめられ、ご主人とともに喜んで当施設に来られたのだそうです。

また、藤原保園長自身も屋敷内に天理教の教会を建立して、不幸な子らのために、「一にも二にも、すべての人に幸いあれ」と朝夕の礼拝を欠かされない信心深い方であるとのことでした。

朝食が終って、いよいよ子供たちの楽しみの潮干狩りに出発する時間がきた。身仕度のできた者から順次中庭に集合が始まりました。このとき、私は何故かこの子らの中に何かが起りそうな気配を感じていたのです。

◎　おじさんの嘘つき

三十四名中八名の父兄がついに姿を見せなかった。私は昨夜、子供たちにお父さんやお母さ

んがきっと来るよと、なかば確約めいたことをいっていた手前、しまったと思った。
その瞬間である
「おじさんの嘘つき……」
と一人の子が私に近づいてなじり、胸をたたいて泣き出したのです。それはすぐに親の来ていない他の子らへも波及して、下を向いて涙しているのでした。一人の子が泣き出だすと次々と泣き出してしまった。
私は、前夜、「楽しい潮干狩だからきっと来る」といいきっていた手前、この抗議を素直に受けて
「おじさんが嘘をいって、ごめんね」
と彼らの肩に手をかけると、彼らは私の体にぎゅうと抱きついて来て身をふるわさせていた。その涙のぬくもりが体に伝わってくるように思われて、思わず私も強く彼を抱き寄せた。それがかえって刺激することになったのか、私の胸に顔をふせて激しく泣きじゃくった。
私はこのとき、この子らもまた私の子だ、命の限りこの子らの、いや育成園全員の子らの父にと決心したのでした。
そして私は大きな声で
「よし、きょうはおじさんが、みんなのお父さんになろう、さあ、おじさんと海に行こう」

潮干狩を楽しむ子供たち

と歩き出そうとした。

ところがA子さんは

「私は、心臓が悪くて歩けないから、おじさん、おんぶして」

といい出し、私の肩に手をかけ、おんぶをねだった。またB子さんは

「私は足が悪いから、おじさん手をひいて」

と私の体にまつわり、手を伸した。

A子さんの体はずっしりとして重かった。

何んとか、なだめすかして、途中、休むなどしてやっとのことで海にたどりついた。

私の体は汗でぐっしょりとぬれ、足はふらふらになっていた。

海辺では、もう先着組の親子たちが、楽しげにハマグリ拾いをしていた。私と遅れた八名の子供たちも、この楽しい貝拾いに仲間入りして、

キャー、キャーといって砂を手で足で堀り、あるいは波にたわむれた。この姿は私にとってせめてもの慰めでありました。

みんなが拾ったハマグリは、平井漁業協同組合のご好意で全部無償でいただきました。子供たちは、凱旋将軍のように意気揚々と、バケツをかついで引きあげたのです。

ところで、この日のもう一つの重要な目的は、父兄会設立だったので、藤原園長から、この旨の説明と、それを軸として、父兄の親睦と施設への協力と、そして

「ゆりかごから墓場まで」

を目標にしてこの子らを守って欲しいとの要請がありました。

この提案に父兄全員が、直ちに賛同し、またたく間に父兄会設立が実現しました。

父兄会は、藤原園長によって、『鹿島育成園恵松会』と名付けられました。ついで、会長選出となり、互選の結果、図らずも私がその任を受けることになってしまったのです。

◎ 顧問お願いのこと

この特殊な父兄会を、心を一つにして前進させることは、大変な重荷になりそうで、私にはこの大任を果せる自信は全くといっていい程なかった。しかし、何か良い方策を至急に立てる

必要のあることを感じていた。

そこで、とりあえず心身障害者に理解ある有識者にご指導を受けるのが先決だと考えた。その第一段階として、国会議員の方に父兄会の顧問をお願いしようと考えたのです。でも、なかなか適当な方が思い浮ばず、思いあぐねて、それならば同郷の福島県選出の方にと思い、山下春江先生にお願いしようと決めたのです。

とはいえ、山下議員とお会いしたこともなければ、どこにお住いかも知りませんでした。しかし、決心した以上、早い方がよいと思って、早速山下先生のご住所を電話帳をめくって調べ、門を叩いたのです。何んの縁もゆかりもない私に、お会いしていただけるはずもなかろうと考え、快しとはしなかったが、苦しまぎれに最高裁判所職員の名刺を出して、先生にお会いしたい旨をお願いしたところ、応接間に招じ入れられました。

しばらくすると、巨体をゆするようにして先生が入って来られました。

私は、初対面と突然の訪問の厚かましさを詫びる挨拶をしたあと、私が精神薄弱児の父であること、最高裁判所の職員であると同時に、鹿島育成園恵松会という精神薄弱者の父兄会の会長であること、このような会の運営が私には極めてむずかしく思え、ぜひとも先生にご指導を仰ぎたくて、できればこの会の顧問になっていただきたいことを一気に申し上げたのです。

先生は、なかなか反応を示されませんでした。私は思いました。一面識もない裁判所の一職

員が、早朝から押しかけて来て、しかも身勝手なことをしゃべりまくっている、くらいにお考えだろうと。また、もともと私は玄関払いになっていたとしても仕方ないこと、話を聞いていただいただけでも幸せと思わねばとも考えていたときでした。先生は

「あなたのような強い心臓の人を見たことがない。それだけ熱心に考えているのなら、その役目を引き受けましょう」

とおっしゃってくださったのでした。私は、一瞬私の耳を疑った。国会議員が、私の願いを叶えてくださった。

先生は、一変した軽快な口調で、なお続けられて

「精神薄弱者福祉法を、議員提出したのは私たちよ、昭和三五年にね」

と、この一言に私は肩の荷が降り、今までの重圧感がふっ飛んだような解放感を覚えました。

今度は、先生にイニシアチブをとられて

「あなた、今、日本国中に精神薄弱者がどの位いるか知っていますか」

と聞かれましたが、私はそういう知識は全く持ち合せていなかったのです。それでいて、一施設の父兄会とはいえ、その会長と名乗ったことが恥しく思えてきました。しかし、先生のお話はまだ続きます。日本は現在、一日のうちに三〇人に一人の割合いで精神薄弱者が生れていて、その数も三〇〇万人にも達しているということ、そして

「精薄者を生んだお母さんは、ご亭主から『俺の血筋にはこんな者はいなかった。お前と結婚して失敗した。』といわれる。亭主の身勝手な言葉に母親は夜半になって一人夜具をかぶって泣いている。そのお母さんが三〇〇万人もいるということは、可愛想で聞くにたえない」

と語られたのです。さらに

「この悩み多い人たちを救うためには、親が一致団結して力を併せて、国家を動かすしか方策はないでしょう」

と促されるように話された言葉には、非常に熱がこもっていました。

私は、またとない良い先生にめぐり会ったわけです。

このことが、後の私の、また父兄会の活動の原動力になったことはいうまでもありません。

◎　慈善公演のこと

鹿島育成園の開園当時は、予算的な恩恵も少なかった。その財政が、赤い羽根や寄付金にたよっている現状では、施設の建物ができても、諸設備は、まことに不完全なものであった。すべてが、指導員の奉仕的労力によって賄われている状態といってよいほどであった。

たとえば、子供たちの浴場は、洗たく場と兼用であり、冬は入浴、洗たく時に寒い風が吹き

抜けるのです。また、電力についても、ちょっと使い過ぎると自動的に停電してしまいます。

このような状況であったから、指導員は教育・訓練をする前に、すでにかなりの重労働が強いられていて、心身ともに疲れ果てるばかりだったのです。

我々（父兄会）が、寄付するといっても、公務員・商業・農業を営むものや、母一人子一人の不幸な方などもあり、必ずしも経済的に恵まれた者ばかりではなく、また、加えて、父兄が地理的に散在していることもあって、まとまった金額にすることは、とうてい望むべくもなかった。

私は父兄会長として、資金がなければ何んの活動もできないことを悟り、また、それを他に依存するとしても、思うにまかせないことを考えると、これは、どうしても自分たちの手で何んとか打開しなければならないと決意したのです。

その一方法として、慈善公演をやれば何んとかなるのではなかろうかと単純に考え、実行に移したのです。

◎　役人では、赤字になるわよ

私は、慈善公演を行なう決心をしたものの、どういうふうにすればよいのか全く見当もつか

なかった。あれこれと考えるのみで、無為な日々を送っているときに、ヒョンなことから歌手渡辺はま子先生を想い出した。

太平洋戦争が終った当時、私は敗戦国民として天津の収容所に収容され、中国政府の監視下にあった。当時、やはり敗戦国民として、北京市におられた渡辺はま子先生が、私たちの収容所に再三慰問にこられて、数々の歌を聞かせてくださったことを思い出したのです。

そして、私は慈善公演を行なう計画についてご相談してみようと思い、昭和三七年一〇月初旬、先生が所属されている銀座の山崎音楽事務所を訪ねることにしました。

しかし、行ってはみたものの、どこにその事務所があるのか容易に見つけることもできず、路上を行ったり来たりしていました。なかばあきらめて、もう帰ろうかと思っていたとき、新橋の方から歩いて来る一人の女性が、どこか見覚えがあるように思え、もしやという気もあって、私はその女性にそれとなく近寄ったのですが、すぐには言葉をかけるわけにもゆかず、その後から歩いて行ったのです。すると、その女性が振り返えり、立ち止って

「私にご用なの」

と、そのお顔、お声、やっぱり渡辺はま子先生でした。

「先生にお願いがあって、事務所を探していたんです」

と申しあげると、先生は

「路上ではおかしいから事務所へいらっしゃい」
と私を事務所へ案内してくださり、マネージャーらしい人を呼んで、その人に
「この方の話を聞いておいてください」
といい残して階上にあがって行かれました。
私は、中之森とおっしゃるマネージャーに、慈善公演の計画、その目的、動機などについて概略説明したうえ、渡辺先生にお力添えいただけないものかと相談に伺った旨を話しました。
そのうち、先生も更衣されたらしく私たちの所に降りて来られ、マネージャーの手際よい私の来意の説明を聞かれた後
「役人が、チャリティーショーをやるの、危ないわね、赤字になって失敗するのが積の山よ」
と、私にしてみればまことに情ない返答でした。
これは、渡辺先生の、私に危い橋を渡らせまいとのむしろ有難い忠告であって、先生のご説明にも十分納得できるものがあったのですが、私は、なお執拗なまでに、鹿島育成園の窮状を訴え、その解決に必要な資金造りを、そのためにこの計画をと、お話したのです。これには先生もよほど困惑されたご様子でした。そして、マネージャーに
「私の来年のスケジュールを見てちょうだい」
と、「来年」という言葉に一瞬私は耳を疑った。だがまさしく先生の来年の予定を調べていた

だいたのであります。昭和三八年一月一五日（成人の日）は、先生のご予定がないことがわかりました。先生は

「三ケ月の準備じゃあ無理じゃない、マネージャーどう？」

とご相談されました。

私は、不安な気持と先生が真剣に考えてくださっている喜びに、ただ呆然としているだけでした。すると先生は

「武沢さん、楽団も決っていないんでしょう、司会者ももちろん決ってないわよね」

と聞かれたのですが、私は正直いって、チャリティーショウをするのに、このような手順があろうなどとは思ってもみなかったのです。そこまでも先生にご迷惑おかけしてはと思って、いとも気軽に

「司会ぐらいは私がやります」

と答えたのです。

「とんでもない、素人のあなたが司会をやったら、ぶったおれてしまいますよ……無理な話よ」

と、どうも雲行きはあやしくなって来た。私は、

「では、どうしても駄目ですか」

といってはみたが、急に気落ちしてしょんぼりとしてしまった。

私は、この計画が途中でざ折することの哀れさを感じた。その私の態度が、余程深刻に見えたのか、先生は

「武沢さん、本当にやるつもり？」

と重ねて念を押されました。

私も、初心を貫きたい、とお話しすると

「じゃあ、おやりなさい。楽団と司会者は私が引き受けましょう、マネージャー一月一五日は武沢さんのためにあけておいてちょうだい」

と、そして楽団と司会者は先生が探してくださることに決まった。またとないありがたい温情に、私は張りつめていた気持が急にゆるみ、一、二度深呼吸をして生気を取り戻した。

マネージャーの中之森さんから、公演について種々のアドバイスを受けて、二階の渡辺先生の部屋へ上って行くと

「終りましたか、疲れたでしょう」

と紅茶を運んでくださって

「体に気をつけて頑張ってね、なんでも相談にいらっしゃい」

と、いたわりの言葉をかけてくださった。

私は泣き出したいような感情にかられていて、お礼の言葉をいうのがやっとでした。

私は、事務所を辞してからの帰り道、その足どりも軽く、全身に勇気がもりもりと湧いて来るのを覚えました。

渡辺先生に、かくもご親切にしていただいた以上、是が非でも成功させなければならないとあらためて心に誓いました。

私は、早速劇場探しを始めた。予定の一月一五日は成人の日、どこのホールも空いているはずがなかった。だが、幸いにも一つ、イイノホールが空いていた。〝天の助〟にも思えた。そのイイノホールも直ちに予約をしないと、他からの申込があれば受け付けをしてしまうことになりますが、とのことである。そして、ことの仔細を話すと、入場人員等の関係から二回公演にしないと採算がとれないとの助言を得ました。だが、渡辺先生などにご相談する余裕もなかったので、私の独断で二回公演ということを決めてしまった。

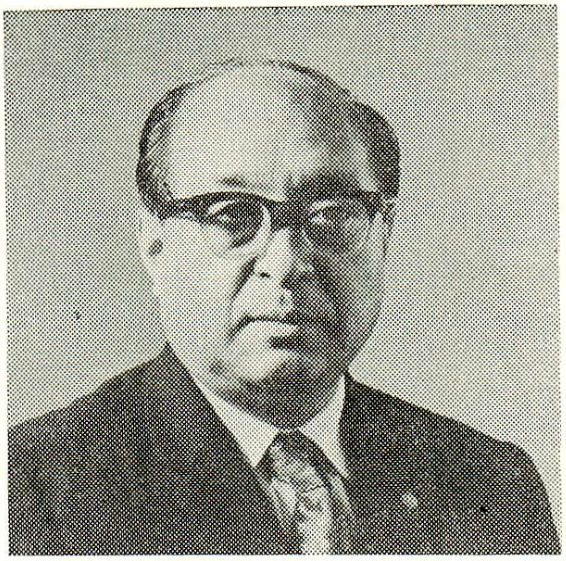
早速、渡辺先生の事務所へ伺って、当日は二回公演になったことを報告し、無断で決めてしまったことのお詫びを申し上げると、快く私の我ままをお許しくださって

「あなたの都合のいいようにしますから、とにかく、あなたは体を大切にしてやってください」

と寛大なお取計いをいただいたのです。

それがまた、私の勇気をふるいたたせた。

一回の公演時間が二時間、そのプログラムを埋めるのは容易でないことがわかり、渡辺はま



ふるさとの柳屋社長

子先生以外の出演者に頭を痛めていた。そのとき、たまたま渋谷の道玄坂上にある「ふるさと」という合掌造りの料理店の側を通ったのです。そのふるさとの中から聞えて来る津軽三味線の音色にひかれて門をくぐりました。

その店は日本民謡を売り物としているらしく、多くの有名芸能人が出演していた。

私は、この中のだれかに、是非とも一月一五日の慈善公演に出演してもらいたいと考え、くさむら支配人に会ってその交渉をしました。

支配人も

「そういう意義深い事業には、社長もわかってくれるだろう」

と、柳屋社長への紹介の労をとってくださった。

そして柳屋社長は

「最高裁判所の職員が、なんでそんな苦労をして

いるのか」
と尋ねられた。
私にも、ちえ遅れの娘がいて、その娘をあずけている施設の援助資金を造り出したいのだと卒直に話しました。
「そういう意義ある公演ならば、当日は無料出演させましょう」
と快く承知してくださったのです。
このような方々のご厚情の輪は、さらに拡がった。
私のこの計画を最高裁判所のコーラスグループの若い職員が聞きつけて自分たちもできるだけのことを協力するといってくれたのです。幸いこのグループの指導者が、ＮＨＫのコーロオクターブの辻正行氏であったことから、私を同氏に引き合せてくれました。結果は、ＮＨＫのコーロオクターブの皆様にも出演をお願いすることになったのです。
さらに、作曲家佐々木すぐる先生宅へ伺ったところ、青い鳥合唱団も出演に加ってくださることになりました。
また、大久保混声合唱団も総動員して参加してくれることになりました。さらには、国際劇場の野口一郎氏（太鼓の名手）の出演が、といった具合に皆様のご協力が次々と決っていったのです。このようにして、プログラム編成の一応の見とおしがつきました。

そこで私はさらに、当時の国鉄スワローズの金田選手（現ロッテ監督）のお宅を訪ねて、ご協力いただけないものかと、お伺いすると金田選手もサイン入り色紙をくださるというご返事でした。金田選手から読売巨人軍の長島選手（現監督）のお宅を教えていただき、早速何んの前ぶれもなく、しかも日曜日の早朝、世田谷の長島選手をお訪ねしました。さいわい長島選手は在宅されていて、全くの初対面の私にも、嫌な顔もせずに面接してくださいました。

私は、慈善公演のことをお話して、同選手のサインボールをいただきたいこと、そのボールを公演の終りに、客席に投げ込みたいことを説明したのです。さらにできればサイン色紙もご寄贈願えればともお願いしました。このあつかましいお願いに長島選手は快く

「ボールは何個位必要ですか」

と承諾の意を示していただいたので、少々欲張りかと思いましたが、三〇個位いただければ有難いんですがと答えると、これも快諾してくださいました。そして

「裁判所に勤務するかたわら、そういうことをやるんじゃあ大変でしょう、僕も是非手伝わせていただきますが、僕だけでいいんですか」

と思いもよらぬご厚情をよせていただいたのです。私は、少し無茶かと思いながらも、いい出せないでいたもう一つの願いを

「できましたら王選手にも、お願いしたいのですが……」

とあつかましくいったのです。
「じゃあ、僕から伝えておきますから、王君の所へ行ってみてください」
と、王選手のご住所まで親切に教えてくださいました。
私はまた、次の日曜日、新宿にある王選手宅へ伺った。その日はあいにくと王選手は不在でした。しかし、ご両親に来意を告げると
お母さんは
「うちの伜は、いつも皆様にお世話になっています。今後ともよろしくご後援をお願いいたします。貞治に話しておきますから、お暇のときに会ってください」
と大変にご丁寧な言葉をいただき、恐縮してしまいました。
このようにして、その数日後、王選手のご協力も得られることになったのです。面会場所は、新宿のある喫茶店の片隅、そこで私は、長島選手にもお願いしたこと、そして是非ともサインボールと色紙をとお願いしたのです。すると
「承知しました。公演に間に合せますから、もうプログラムに刷り込んでいただいて結構です」
と快諾していただきました。
そのときの嬉しさは、これまた筆舌を越えるほどで、日本晴れにも似た心でした。うきうきとして、その帰り途、私の足はおそらく地に着いていなかっただろうと思います。

まさか、日本プロ野球界の代表選手たる両氏から、かくも沢山の貴重な贈り物をいただけようとは、我ながらびっくりしてしまいました。私は子供のように有頂天になってしまいました。この心境は皆様にもお察しいただけることでしょう。

王選手に喫茶店でお願いしていましたときに、私達の隣りのテーブルで、私達の話をそれとなく聞いているのではないかと思われる老外人がおりました。

王選手の快諾を得て帰ろうと席を立ったとき、その老外人は私のそばに歩み寄って来ました。黒の法衣をまとった、見るからにクリスチャンの神父とわかる貴品ある白髪の老神士が突然、日本語で

「私は、ゼノというものです。あなたは何をしょうとしているのですか」

と質問された。

〝私は、ゼノ……〟といわれて、私は一瞬、かの有名な「蟻の街」の発起者、ゼノ神父だろうかと疑ったのですが、まさしくそのゼノ神父でした。

「私は、裁判所職員ですが、心身障害者のために慈善公演をしょうと考えているのです」

と、そして

「そのことで、今、王選手にご協力をお願いしていたのです」

と説明した。しかし、神父には〝心身障害者〟という言葉がよく理解できないご様子でした。

そこで私は、ハンディギャップを持った子供達のために、と付け加え計画の概略を話したのです。すると

「それは、非常によいことです。私にも手伝わせてください。当日は、ぜひともイイノホールに行きます」

とさっさと自分で決めてしまわれました。

ゼノ神父は、日本における活動状況を報じた新聞の切り抜きのスクラップブックを出して説明してくださいましたが、そのお顔は実にいきいきとし、その一語一句には情熱と誠意がこめられていました。そして、一月一五日の約束は必ず守るといい残して、新宿の街の中へと去って行かれた。

私は、〝これで準備よし〟と消防署へ公演の届出をし、ついで麹町税務署に公演の免税申請に行きました。係員は

「公務員の慈善公演は、骨折り損になって赤字になるのが精々ですから、慎重に進めることですね」

と税務署らしくない忠告をしてくれました。しかし、「私はもう後に引くつもりはありません」と、ぎりぎりの心境を述べましたところ、それではと

「免税の手続をとってください」

と申請書の記載方法、認定の範囲などを教えてくれました。

その後、この計画は予想外に順調に進んで、入場券ができ上って来た。入場券は税務署の検印を受けなければなりません。この一三〇〇枚の検印作業は自分で行なうという、大変労力のいる作業です。このことを知った裁判所の若い職員が三名手伝ってくれ、一枚一枚押印していると、その不慣れな作業を見かねた税務署員が押印機械を貸してくださり、そのご好意で一〇分たらずで完了しました。

一枚三〇〇円の入場券を一三〇〇枚売り捌くには、あまりにも日時が少なすぎた。素人の私達にはかなりむずかしいと思われた。

そこで私は、在京の父兄に集合してもらって、入場券を各人に割り当てることにした。まず、各自の消化可能枚数の見とおしを聞いたところ、我々は生れて初めての試みであるので、とても全部売る自信はない、とほとんどの父兄が答えるのです。また、この入場券を売り歩くことによって、自分の身内に精神薄弱者がいるということが露呈するということで、二の足を踏み消極的になっている父兄もあった。

私はこうした父兄の勇気を鼓舞するために

「皆さんは、自分の子供が精神薄弱だということをかくすことによって、、かえって肩身を狭くして、自分を卑下しているのと違いますか」

と大変な暴言を吐いてしまった。一瞬、シーンーと静まり返えって、しばらく誰からも何の答えもなかった。しかし、ここで私までが静かになっては何の進展もなく、父兄の勇気をふるいたたせることもできないと思い、さらに

「私は、娘千代子が精薄者だからこの公演をと、出演者の皆さんに依頼し、皆さんからそれじゃ無料出演しましょうという協力を得ることができたのです。私は、かくさなかったことがよかったと信じています。そしてこの入場券が完成したわけです」

と説明したのです。するとある母親が

「とにかくやってみます。三〇枚割り当ててください。いまさらかくしだてしても無駄ですよね」

と勇気ある発言をしてくれました。これが口火となって、希望枚数を申し出てくれる父兄が続出しました。

我々は、いつかは知れてしまうであろう身内のことを、自分から進んで公にして、少しでも心の荷を軽くすることによって、各人の運命を変えることができるのである。運命を変えるためにも、この入場券を売り捌くのだ、これぞ一石二鳥だ、との私の考えを押しつけたような結果になった。父兄会長としてはある意味では〝非情〟だったかも知れない。

この公演によって、精神薄弱者に対する世の中の人々の理解度を知るチャンスでもあると考

えて、私はこれを押しとおした。

父兄達は、厳冬の中、風雪に耐えながら入場券の売り捌きに東西奔走した。いまだかってこのような経験をしたことのない者にとって、これは、精神的、肉体的にもかなり過酷であったにちがいない。

これも、神から与えられた試練だと慰め励す私も、実は心苦しかったのです。

一枚が売れることによって勇気が与えられた。売れるんだ、やればできるんだ、と心に繰り返し叫んで歩いた。おそらく他の人も同じだったのだろう、父兄の中からも追加申込みをして来る方が多くなった。この状況には私も嬉しくて小躍りし、この喜びは世の人々のために働く者のみが味うことのできるものだと思いました。

私達は、この入場券の売り捌きを通じて、数多くの方々から、予想以上に温かいご芳情を賜り、道は険しくも誠をもって接すれば、言葉はつたなくても人の心を動かすことができると知ったのです。それは私達にとって、もう一つの大きな収穫でした。

ことに、山下春江先生には、大変な量の入場券をお世話していただきまして、私達父兄一同感激のきわみでありました。

裁判所においても、若い職員が入場券の売り捌きに大変な協力をしてくれましたし、また多数の裁判官がご理解ある志をくださって、また、その奥様が同窓生や友人にまでご紹介してく

ださるなど、周囲の方々の温いご協力で、私の割当分はもちろん、会全体の約九〇パーセントの入場券を売ることに成功したのです。

これは、私達にとっては全く思いの外で、奇蹟といっても過言ではありませんでした。

このように多くの方から寄せられたご好意は、私達父兄にとって生涯忘れえないものとなり、胸の奥深くにまで刻み込まれて、それから先への私達の一里塚となったのです。

公演当日、招待した鹿島育成園の子供達をイイノホールまで送る交通機関についても苦慮しておりましたが、ご相談先の鹿島参宮鉄道会社のご好意によって、五〇人乗り大型バス一台を無料貸与の上、しかも送迎の係員までつけてくださることになりました。足の問題も一挙に解決し、大変助りました。このようにして、やっと公演当日にこぎつけたのです。

その日の私は、何か大変な手違いをしていないだろうか、いや、よくここまでやってこられた、この一日を大成功に終らせたいなどのまことに複雑な心境で、開演時間が待ち遠しかったのです。

鹿島育成園の子供達が、無事会場に送られて来て、指定された招待席に案内されました。このときの場内の割れるような拍手での歓迎が、子供達への皆様の温い気持を如実に現わしていて私も目頭が熱くなってあふれでる涙をおさえることができませんでした。

子供達のある者は得意気に、ある者はお客さんと握手して挨拶を交すなど、とにかく彼らに

とっては、招待されて会場の方々からの大歓迎を受けて入場するなどということは、おそらく生れて初めてだったでしょう。それだけに、その嬉しそうな表情は美しくもあり、けなげでもありました。

そして、もう開演という間際になって、ゼノ神父が

「ボス！ボス！」

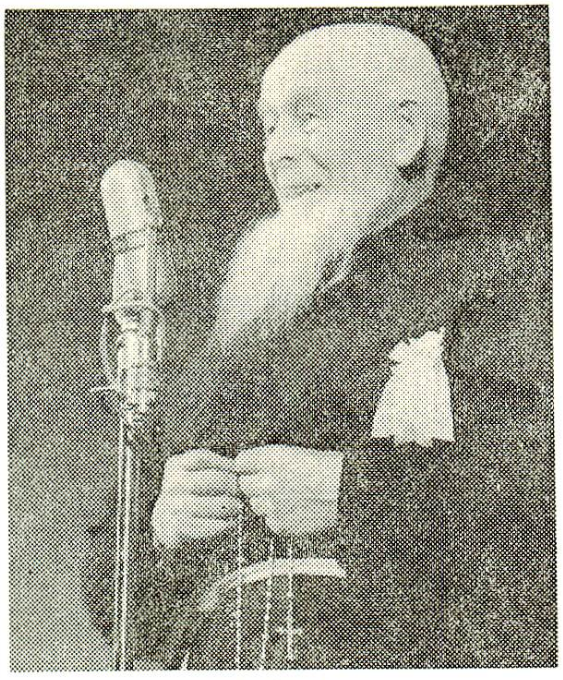
と連呼しながら受付けにかけ込むや

「ボス（どうやら私のことらしい）、電車の中にきょうのお土産を忘れて来た」

と、新橋駅で下車された際、そのお土産品を網棚に置き忘れたといわれるのです。私は、早速、電話で新橋駅長に、ことの詳細と急を要する旨を告げた。するとどうでしょう、まさに天の助けともいうべきでしょうか、それともゼノ神父の心が神に通じたためでしょうか、それらしい品物を預っているという。さらに、すぐに駅員に届けさせるとの、これまたありがたいご高配を賜りました。私達が安堵の胸をなでおろしたとき、ゼノ神父もまた、日本人はやはり正直で親切だと大喜びしてくださいました。そして、〝きょうは本当に嬉しい日である。神の恵みです〟と語られて挨拶のため舞台に立たれた。そして

「今日のチャリティーショーに沢山のお客様ありがとう。不幸な人々のために今後ともよろしくお願いします」

山下春江氏



ゼノ神父

と、なれない日本語で精一杯に訴えてくださったのです。それがまた人々の胸を強く打ったのでしょうか、満場に大拍手が起ったのです。

ゼノ神父にも、きっと忘れえぬ会となったことでしょう。

公演は、山下春江先生のお礼の言葉で開幕された。佐々木すぐる先生の指揮される〝青い鳥合唱団〟、大久保混声合唱団、NHKコーロ・オクターブ、渋谷ふるさと社の民謡、と番組は滞りなく進んで、最後に渡辺はま子先生が舞台にあがられて、お得意の歌をご披露してくださいました。その後「本日は、寒い中をご来場くださいましてまことにありがとうございました。世の中の不幸な人のため、よろしくご理解とご協力を賜りたいと存じます」と挨拶されたのです。

精神薄弱者育成資金造成

『歌と民謡の集い』慈善特別公演

とき　昭和38年1月15日（火）午後1時30分

ところ　イイノ・ホール

千代田区内幸町2の22（N.H.K.うら）

主催　社会福祉法人全日本精神薄弱者育成会

後援　朝日新聞厚生文化事業団
　　N.H.K.厚生文化事業団

協賛　鹿島育成園恵松会

プ ロ グ ラ ム

第 一 部

司 会……長 良 英 介

1. あ い さ つ……山 下 春 江

2. あいさつ（みんなで幸はせを）……アリの街のゼノ神父

3. 合　　唱……青い鳥児童合唱団

(イ) 荒 城 の 月……土井晚翠作詩　滝 廉太郎作曲

(ロ) お山の杉の子……吉田テフ子作詩　佐々木すぐる作曲

(ハ) サンタマリア……佐々木すぐる作詩　佐々木すぐる作曲

(ニ) フニクリフニクラ……松坂直美作詩　デンツァ作曲

指 揮　佐々木すぐる
伴 奏　伊 東 京 子

4. 合　　唱……大久保混声合唱団

(イ) 混声合唱のための組曲　動物園……宮沢章二作詩　福井文彦作曲
もぐら　チンパンジー　カンガルー　だちょう

(ロ) 木　挽　唄……日向民謡　小倉　朗編曲

(ハ) 島原の子守歌……寺崎良平編曲

指 揮　辻　正 行（N.H.K. 東京放送合唱団）
伴 奏　小 川 怜 子

5. 合　　唱……N.H.K.コーロ.オクターヴォ

日本歌曲合唱集

(イ) 箱 根 の 山……滝 廉太郎作曲　石丸　寛編曲

(ロ) 城ヶ島の雨……北原白秋作詩　平井康三郎作曲

(ハ) 待ちぼうけ……北原白秋作詩　山田耕作作曲

(ニ) 赤 と ん ぼ……三木露風作詩　山田耕作作曲

(ホ) 浜 辺 の 歌……林　古溪作詩　成田為三作曲

Soprano……朋安和子・上野みゆき
Alto……須藤幸枝・舟田賀津子
Tenor……古後信二・内田元也
Bass……中島　司・野村高一

第 二 部

1. 民 謡 と 踊……ふるさと社中

(イ) 津軽小原節	唄 キングレコード専属	三浦節子
(ロ) 津軽よされ	〃 〃	渡部綾子
(ハ) 新 庄 節	東芝レコード専属	赤石常勝
(ニ) 越中小原節	コロンビヤレコード専属	佐藤寿昭
(ホ) 津軽ばやし	三味線	小山 貢
(ヘ) 津軽じょんがら	尺八	蟹瀬祐三
(ト) 大漁唄い込み	踊	村上勇一
		中川光子
		長谷川千恵子

2. 歌 謡 曲……ビクターレコード専属 渡辺はま子

(イ) 桑港のチャイナタウン　(ロ) 蘇州夜曲
(ハ) 松島音頭　(ニ) ブンガワンソロ
(ホ) おゝモンテンルパの夜は更けて　(ヘ) 支那の夜
(ト) 夜 来 香

伴 奏　浅沼睦明と楽団ボンボン

3. サインボール投げ込み

長島・金田
王・北川　選手提供

渡辺はま子先生の最後の曲が終ったとき、司会者長良英介氏が
「鹿島育成園恵松会々長の武沢さん、舞台に上ってください」
とアナウンスされたのです。
私はあまりにも突然で、もちろん熟知しているはずのプログラムにもないハプニングなので、言われるとおり舞台に上りはしたものの、びっくりしてしまってうろたえていました、長良氏はかたわらにあった、まことに豪華な花束を手渡してくださったのです。私は心に落着け落着けといい聞かせたのですが、その動揺ぶりは恥しいくらいで、なかなかおさまりませんでした。
さらに長良氏のすすめで、渡辺先生の方に歩を運んだとき、これまた突如として、浅沼睦明氏指揮による楽団ボンボン（コロンビア専属）のファンファーレが響きわたった。そして強烈なスポットライトが、渡辺先生と私を舞台上で浮き彫りにした。私はますます上気してしまって、膝頭がガタガタとふるえ、お客様の顔もぼーとして判別できないくらいでした。
そんな中で、渡辺先生は
「これは私のささやかな気持ですが、何かのお役に立ててください」
と金一封と記されたのし袋を私に渡されて、力強い握手をしてくださいました。それは、心のこもった、私達にとって何よりもずっしりと重みある贈り物でした。
思えば、渡辺先生は、ご自身の出演は無料奉仕にしてくださり、司会者から楽団の世話まで、

そしてその経費までも負担してくださったのです。そのうえに、この日の贈り物とあって、私はただただ感謝に堪えない気持で一杯でした。

それに続いて、イイノホールからも金一封を支配人から贈られて、重々の皆様方のご芳情に涙せんばかりでした。

渡辺はま子先生と筆者

ついで司会者から、読売巨人軍長島、王両選手からの祝電披露があり、いよいよ公演もフィナーレを迎えて、長島、王、北川、金田選手からいただいたサインボールが客席に投げ込まれることになりました。それを知らされた会場は、にぎやかな音楽にもつられてか、一段と騒然となった。そして投げ込みの終った後も、しばらくその余韻は残っていた。

〝子供達の何人かもボールを持っている、しっかりと抱きしめるようにしている子もいる。それを見せにやって来ようとしている子もいる〟。

みんなほんとうに嬉しそうだ。今日のこの子らの明るい笑顔は、永遠に私の胸から消えることはない。

よかった、よかった、ほんとうにみなさんご協力ありがとう、心から深く感謝します。

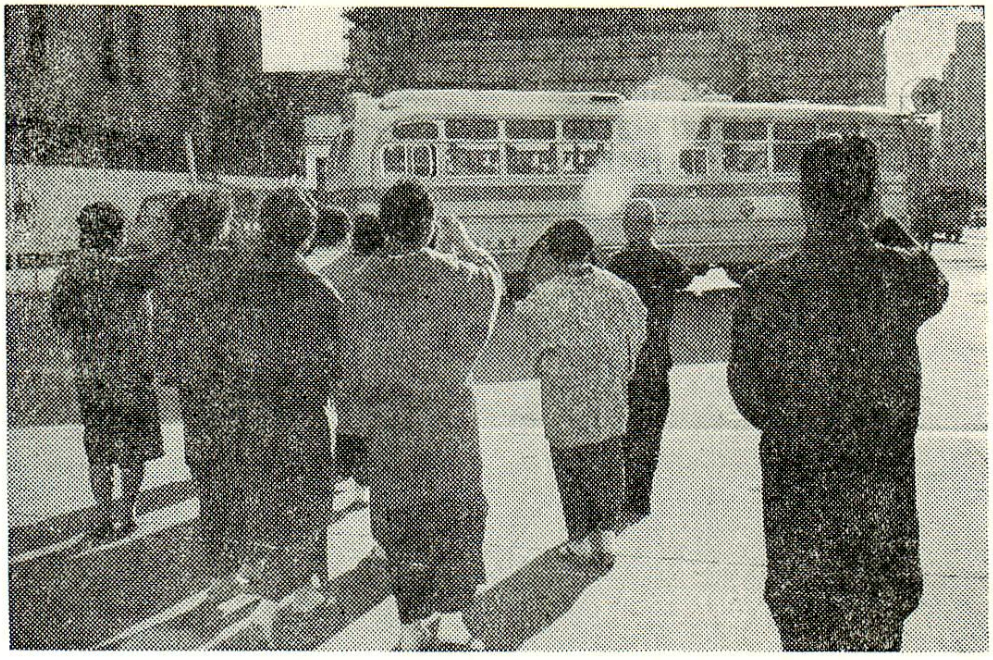
公演は終り、山下先生、渡辺先生、ゼノ神父、明治製果、イイノホール各位から沢山のお土産をいただいた子供達は、指導員や父兄に手をとられて退場した。

彼らは、つかの間であったかも知れないが、肉親とともに、きょう一日を楽しく過してくれたことだろう。しかし、それも終った今、もうすぐ、また親と離れ、兄弟と別れてのあの施設での生活に戻らなければならないのだ。

いまはまだ、誰も止めることができないこのバスは、やるせなくじっと立ちすくんで見送る父、母を残して、遠く鹿島へと消えて行った。

この光景は、私にはたえられなく、いいようのない淋しさがこみあげて来た。そして、また、〈この子らをどうすれば永遠に救うことができるのだろうか〉と考えさせられるのでした。

最後に、この慈善公演をご援助くださった全日本精神薄弱者育成会、朝日新聞厚生文化事業団、ＮＨＫ厚生文化事業団各位に厚くお礼申しあげます。



鹿島へ帰る子供たちのバスを見送る父兄たち

読売巨人軍の長島、王、北川各選手、国鉄球団の金田選手ならびに佐田山、八波むと志、三木のり平、宮城まり子の皆様から沢山のサイン色紙をいただきましたお陰で、寒い中おいでいただいた皆様に、これを抽せんでおあげすることができました。大変ありがとうございました。深く感謝の意を表します。おかげをもちまして、公演に対する税務署の審査も一回でパスして日本精神薄弱者育成会からいただく慈善公演の助成金も望外の金額となり、鹿島育成園に録音機、時計、寮内の拡声装置一式、電気洗濯機、石油ストーブを設置することができ当初の目的を達成することができました。

とくにこの慈善公演に際しまして株式会社ソニーの井深社長のご好意で録音機三台とテープをいただき、録音テープによる親と子の声の対

面もできるようになりましたことを、感謝の意をこめて付言します。

◎　渡辺はま子先生ご来園

慈善公演の後、いく日かたって渡辺先生からお招きを受けて先生の事務所へ参りました。先生は、鹿島育成園成人寮の実情、各父兄の家庭の内情などにいたるご質問をされましたので、私のわずかな知識を申しあげますと

「実は、先日の公演の際、最前列にいた鹿島成人寮の皆さんが、私の歌をじっと聞いてくれている姿を見て、胸が一ぱいになりました。お恥しいことだけど、トチってしまったの。だから武沢さん、鹿島へ慰問に行きましょう」

とおっしゃってくださったのです。しかし、このときは、私は大変申し訳ないのですがお忙しい先生のことだ、すぐには実現しないのではないかと軽くうけとっていたのでした。ところが、四月下旬になって中之森マネージャーから

「渡辺先生が、五月六日に鹿島へ行かれるそうですから準備してください」

との電話をいただきました。

私は、まさかと考えておりましただけに、それが現実となって少々あわてざるをえませんでした。約束ごとを守られる先生のお心に感激して、ますます渡辺先生のファンになっていった

のです。

とにかく早速先生のところに伺ってと思いお宅へお邪魔して謝意を表し、そのあとスケジュールを打ち合せていただきました。先生は、成人寮のみならず、鹿島に収容されている全員二五〇名、一人一人にお土産を持参する計画であるとのことで、再び驚き、敬服しました。

私は、胸をはずませ、早速鹿島の藤原保先生に連絡しました。

当日、私は渡辺先生、舞踊家西崎緑江先生、伴奏者松浦先生をお連れして鹿島育成園に行き、小憩の後、藤原先生のお取計いで、実に見事に装飾された講堂に案内されました。そこには、藤原先生が新しく購入されたピアノがおかれていて、歓迎の横断幕が張ってありました。

藤原先生のご案内で渡辺先生が、客席の通路から舞台に向われると、先生を見つけた子供達は、大きな拍手で迎え、競って握手を求めた。子供達が先生を包囲するようにとりまいて、容易に先生は舞台に上ることもできず、子供達の興奮はいよいよ最高潮に達したのです。

やっと舞台に立たれた先生は、子供達に、まず〝赤トンボの歌を大きな口をあけて歌いましょう〟と指導され、全員が歌詞も間違えず、会場が割れんばかりの声で歌った。

それから一時間、たっぷりと先生たちのお得意の歌と踊りを披露していただきました。

子供達は、先生にお礼のしるしにと手造りの花束を贈りました。

先生からは、子供達に温情あふれる激励のお言葉をいただきましたが、子供達は、その一こ

と一ことをうなずきながら聞いていた。その姿はまことに素朴で、いかにも幸せという感じが、それぞれの顔ににじみ出ていた。

先生は、藤原先生の、〝折角の機会ですから、病院の長期療養者や、その他の入院患者、職員をも慰問してください〟との申出を快くお受けになって、再び上演してくださったうえに、患者の方々に

「気を落さず療養を続けて、元気になってください」

と勇気づけのお言葉をかけられたのです。そして成人寮に赴き、施設内を参観された。先生の目は異様に輝いていた。食堂に一歩入られたとき、待ちかまえていた子供達から、早速ハンカチやノートにサインをねだられ、汗を拭く暇もないほどでした。

最後に子供達が真心をこめて作った敷物の贈呈を受けられて、この日の全日程を終ったのです。

帰路、霞が浦にさしかかったとき、赤い大きな太陽が西に傾き、湖面にやさしく長い光をゆらがせていて、それはあたかも今日の一日を象徴するかのように素晴しい景観でした。

この慰問公演には、森永製菓、東横百貨店のご協力を得て、一そう花を添えていただきました。深く感謝の意を表します。

渡辺先生は、その後も五月一八日、ニッポン放送の、『花の歌謡一代―渡辺はま子の巻』で、

「世の中も平和になり、人々も幸福になったと考えていましたところ、精神薄弱者といわれる不幸な人達のあることを知り、慰問にまいりました。これら不幸な人達が全国で三〇〇万人もおられ、この人達のためのベットがごくわずかであることを知りました。私のような者でよろしかったら、どこへでも慰問にまいります」と放送されました。この録音テープは、ニッポン放送から私達父兄会に贈られてきました。

最近ようやく精神薄弱者に対する世間の理解が高まり、温かいご配慮をいただけるようになり、救護施策が考えられるようになったことは、父兄の一人としてまことに嬉しく思っております。

同じ悩みを持つ人々が、個々に思い悩むのではなく、お互いに協力し、熱意をもって、真心こめて行動するならば幸せの訪れる日もそう遠くないものと信じます。

私達以上に悩み苦しんでいらっしゃる方々も、世の中には沢山おられることでしょう。しかし、ひとりその悩みの中にとじこもることなく、与えられた試練を何んとしてでも乗り越えようと力を合せるならば、道は自ら開けるのではないでしょうか。

不幸な子を持つ親として、生命のある限り、最善の努力をして心に安らぎの堅い城を築いておかなければならぬと考えます。

さらに、園長藤原保先生のご配慮のお陰で秩父宮妃殿下、高松宮両殿下から度々のお心くば

りをいただいております。ことに今般竣工を見た児童寮の開設記念の昭和三八年七月八日には高松宮両殿下の台臨を仰ぎ、広大な地域にわたる各施設をご覧のうえ、作業中の子供に慰めと激励のお言葉を賜りました。

私達の子らが入寮している成人寮にも、記念植樹をしていただき、かつ父兄との記念写真にも、お心やすく応じてくださり、一同しばし感激にひたったのであります。

高松宮妃殿下の記念植樹

犬は知っている

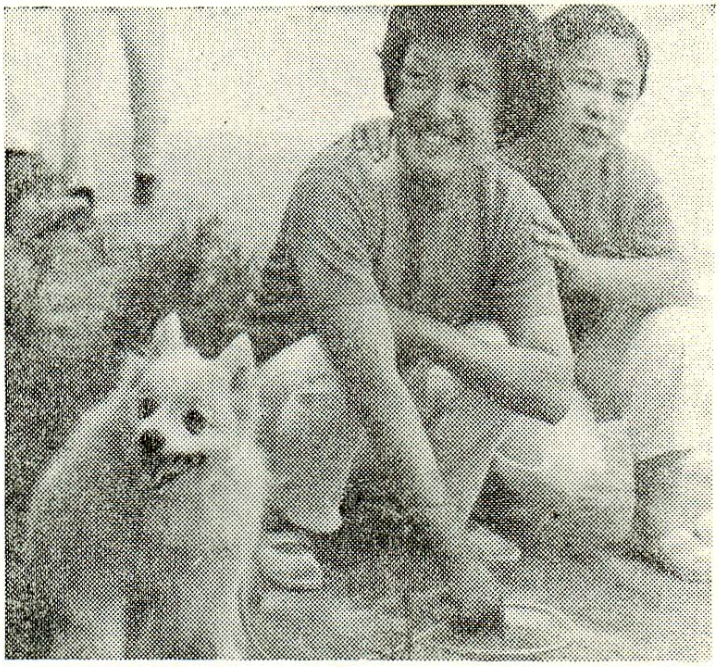
犬は知っている

娘の千代子が精神薄弱者の専門学校東京都立の青鳥養護学校に入学して、三年後のちょうど十五才のとき、生後四十日のスピッツ犬を飼うことにしました。

子供たちは喜んで相談のうえ、この犬に「メリー」という名をつけ、メリーはたちまち我が家での人気者となった。中でも千代子の喜びよう、かわいがりようは大変なもので、いじらしいほどであった。

メリーも千代子になついで、千代子の学校への行き帰りには必ず玄関まで送り迎えすることがメリーの日課となった。

千代子が帰宅する頃ともなると、その様子が落ち着かなくなり、家の中をあっち、こっちと気ぜわしく歩き廻って、いかにも千代子が帰るのを待っているようなしぐさでした。


鹿島育成園に行ったときのメリー（中央千代子）

階段を誰かが上ってくる気配を感ずると、それが千代子かどうかを確かめようと足を止め、耳をぴんと立て、千代子の足音だと知ると玄関へかけ足で行って立ちどまったまま前の足にぐっと力を入れて入口の方を見つめ今にも飛びつくような姿勢をとっていました。

千代子は家に帰えると、ドアーを開けて、まず「メリー」と呼びかけるのが習慣になっていたので、メリーは、その声のかかるのを待っているようでした。

千代子の「メリー」と呼ぶ声をきいた途端、千代子めがけてとびつき、それを受けて千代子はメリーを抱きあげ、ほほずりをしながら互に何事かを語っているようであった。それは千代子にもメリーにも一日のうちで、最高の幸福を味っている瞬間のように見えました。

千代子が帰宅してからのメリーの態度はがらりと変り、「私の好きな人が帰ったんだ」「私の天下だ」といわぬばかりにはしゃぎ廻る毎日でした。

千代子は高等部の卒業式を迎え、福祉事務所の計らいで、茨城県鹿島町の鹿島育成園成人寮へ入寮することになりました。

日本全国の精神薄弱者は三〇〇万人といわれ、一方、収容施設に入っている人は二万人余りしかないという現状からしてみると、千代子の入寮は、まことに奇跡的幸運であった。しかし、いざ千代子を施設に入れることが決まると、彼女を納得させるのに私たちは随分とつらい思いでした。千代子とメリーの別れの日が明日となって、私たち家族は千代子のためにささやかな送別の宴を設けました。

メリーは、この夜の雰囲気からただならぬものを感じたのであろうか、ふだんのときと違って千代子のそばをひとときとして離れようとはしなかった。

それは

「私の恋人を誰にも渡すものか」

と懸命に頑張っているようにも見え、時折の千代子の愛撫に、さも嬉しそうに鼻をならした。ほかの子供たちが「メリー」と呼んでも、ただ、その声の方に顔を向けるだけで、千代子の側を離れようとはしませんでした。

「メリーは千代子と別れるということを知っているのかしら」

と、長女が言ったが、それは確かに犬のすぐれた感覚で「別れ」を知ったのでしょう。その夜

メリーは千代子の床の中で眠った。

千代子との別れの朝が来た。一六才まで育てた千代子との別離が始まる日でした。

それ以後、千代子と別れ別れになったメリーは、毎日の生活がいかにも淋しそうで元気がなかった。ひたすら千代子を追い、子供たちの会話に「千代子」という言葉が出ると、びくっと顔をあげ、目を輝やかす日が続いていました。

そんなメリーの様子を見かねた子供たちは、メリーを鹿島育成園へ連れて行って千代子に会わせたら、と提案しました。

千代子も、きっとメリーと同じように淋しがっているに違いないと思い、私はこの提案に賛成し、メリーを自動車に乗せて鹿島育成園成人寮に行くことを決めて、妻といっしょにメリーをつれて片道百十粁の道を車を走らせた。三時間かかって、私たちは無事に千代子がいる鹿島育成園に到着しました。

その鹿島育成園で不思議なことが起ったのです。自動車のドアーを開けた途端、メリーは車からとび出し、寮の玄関に向って一目散に走り出したのです。メリーは、この寮に一度も来たことがないから、ここに千代子がいるということは知らないはずでした。それがどうしてわかったのだろうか、臭覚だろうか。いや、おそらくメリーの鋭い感覚だったのでしょう。

私たちが千代子のところに行ってみると、メリーは、千代子に抱きかかえられており、千代

子は目に涙を浮べ「メリー、メリー」と呼びながら頬ずりをしていました。メリーもさも嬉しそうに千代子の顔を盛んに舌でなめまわしている光景に、やはりメリーを連れて来て

「よかった」

と思いました。

メリーは、千代子に抱かれ愛撫されるときが非常に嬉しいことに違いない。

千代子も、またメリーを抱いているとき、その瞬間だけはあらゆることから解放されて、幸せにひたれる時であったかも知れない。

メリーは、千代子が精神薄弱者であるということは知るよしもないし、本能的に自分をかわいがってくれる千代子に愛情を示しているのである。

その愛情こそ悲しい運命の子、千代子にとっては最大の救いのように思いました。

しかし、普通の人は犬のような無垢な気持で精神薄弱者に接し得ない感情がある。

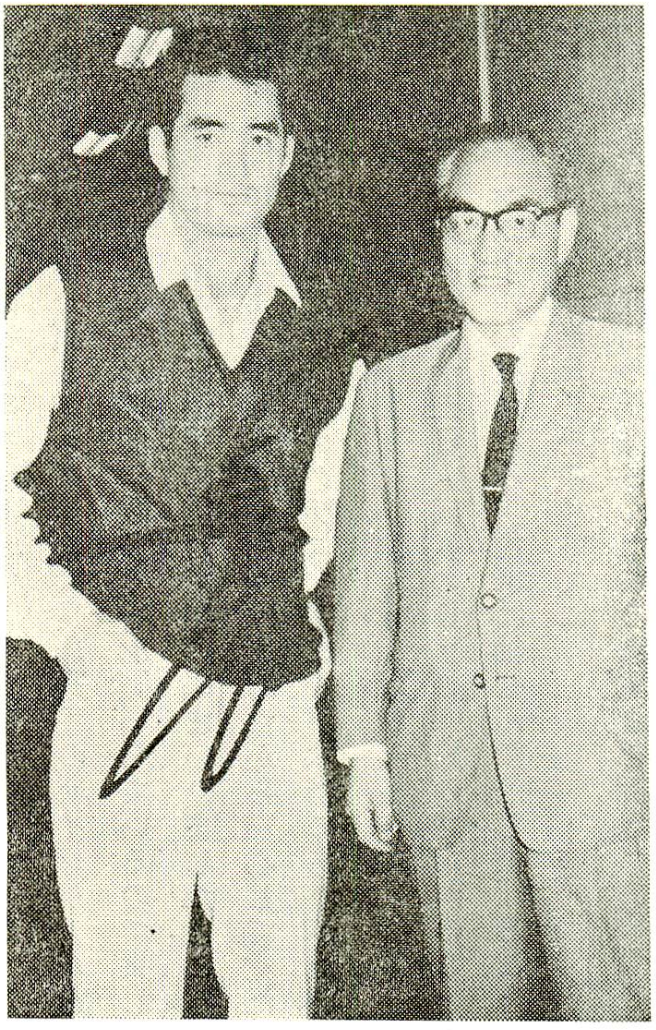
世の人々は、精神薄弱者が人並みの社会生活を営む能力に欠けていることはわかっているが精神薄弱者に対して、愛情よりも同情の気持の方が強いようである。

しかし、私たちの住む社会は、精神薄弱者や身体障害者を含めての人間の共同体である社会であるからには、私たちは共同体の構成員である彼等に同情の心をよせるだけで、いかにして彼等に人並みの幸せを与えることができるかということに無関心であってよいだろうか。高価

な犬や猫に、ペットとしての費用と愛情を惜しまない人達のうち、人間としての彼等のことを考えてくれる人は果してどの位いるだろうか。そういうと人は云うかも知れない。彼等を救うのは政府の責任であると。確かに！　しかし、薄幸な子の親としての私達はそんなことを考えたこともあったが、なんでもかんでも政府の責任だと居直るようなエゴイズムと同じに視られることは堪えられない。政府をうごかす国民全体のしんしな理解と努力が先決問題だと考えている今日この頃である。

背番号
3

背番号3



長島選手と筆者（39年4月）

背番号3とは、もちろん巨人軍の偉大なる打者長島選手のことであります。私たち父兄会が主になって昭和三八年一月一五日にイイノ、ホールで慈善公演を挙行するに際し、私は三七年一〇月に長島選手のサインボール五〇ケと、色紙の御寄附

をお願いするために長島選手宅にお伺いしました。

後日また、慈善公演のプログラムに長島選手のサインボールを投げ込むことの印刷をする都合もあって、非常に短い期間に数多くをお願いしているので果して間に合うかどうかが心配になって御多忙である長島選手に重ねて懇願にまいりましたところ、長島選手からは

「絶対に間に合うようにします、引受けましたから安心してください」

とのお言葉をいただき、プログラムも完成し、本当にありがたいことと感謝の心が一杯でした。

この慈善公演は一月十五日（成人の日）の寒風のさなかのことで、入場下さった皆様に長島選手のサインボールを投げこみ、色紙は抽せんで差し上げることになっておりました。

長島選手は、公演当日会場の私あてに

「御盛会を祝し、鹿島の子供さんたちの御健康を祈る」

と祝電もくだされたのです。司会者からその祝電を御披露され万来の拍手を舞台の隅で聴いておりました。私は同選手の温かい心情に落涙しました。かかる有名選手がこれほどまでに心温まるご芳情をお寄せくださることに心から感謝の気持ちで一杯でした。

巨人軍を背負って伝統三十年の優勝を闘いとり、最高の名誉である首位打者賞も自らの力で勝ち取った方が、私たちのこのような催し物にも関心を寄せてくださる。長島選手のお人柄は

非常に優しく温かい人間性を持っておられることを教えられました。
だからこそ全国のファンから親まれ、同選手が快調であればファンも活気づき長島選手が不調であればそれなりに心配し、一喜一憂しているのだと思いました。

私は昨年（三八年）のクリスマスにも、長島選手宅にまた鹿島育成園の子供たちにとサインボールと色紙のプレゼントをお願いに伺いました。
お手伝いさんから、長島選手は欧州招待旅行の出発準備や二冠王を闘い取ったその祝賀会のインタービューなどで非常に忙しいということを伺って誠に身勝手なお願いに来たものと後悔しました。お暇のときにできたら結構です、とお願いして辞去しました。私は長島選手のご多忙の様子を伺ってなかばあきらめの気持でした。長島選手の出発の日になってもご返事がなかったので、多忙のためにできなかったことと、そのような多忙なときに大変手数のかかることをお願いする方が間違っていたと反省していました。ところが果してどうでしょう。長島選手宅のお手伝さんから裁判所の私のところにご依頼のサインボールができているからという電話連絡がありました。その声に私は嬉しさの余り飛び上りたい程の気持でした。お手伝さんのお話によると長島選手は出発までにいろいろと頼まれたものがあったのですが
「鹿島の子供さんへの約束のプレゼントは、ぜひとも果して行こう」と出発当日の午前四時す

ぎまでかかってて仕上げてくださったとのことでした。せっかくの心楽しい海外旅行の間際に、そのような負担をおかけしたことを誠に申訳なく、無事に、ご帰国されますようにと祈る心で長島さんに対する御礼にかえさせていただきました。私は、この尊く温かいプレゼントを持参して鹿島に向い、クリスマスに列席して、宴たけなわになったとき

「これはなんですかー」

と、長島選手のプレゼントを披露して、問いかけたところ、白痴にも等しいといわれている子供たちが一斉に

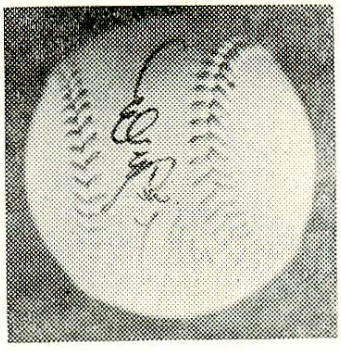
「長島選手のサインだ！」

と、私のまわりに馳けより手にふれて喜んでいる姿に私は胸を締めつけられる思いでした。ちえ遅れの子供たちでさえも親しみと、心の奥底にあこがれを抱いているのは、長島さんの選手生活の偉大なる心情がそうさせるのだと思います。私は、このプレゼントをいただくまでの経過を子供たちに話したところ

「俺は長島選手を応援するんだ……私も」

と目の輝きは一段と光っていました。

しかし、テレビの野球中継が開始される八時は子供たちの就寝の時間であります。なんたる



皮肉なことでもありましょう。そのことを思うと余りにも可愛想でしたので、表題カットの写真を三九年セリーグ開幕の日に長島選手にお願いして心安く写させていただきました。長島選手のユニホームを脱いだときのお姿は人情味あふれるすばらしい写真なので引伸してサインをいただき、可愛想な子供たちに贈りました。子供たちはその写真を額縁に入れて廊下に飾り、心から応援している毎日であります。

ひとなみの幸を

ひとなみの幸を

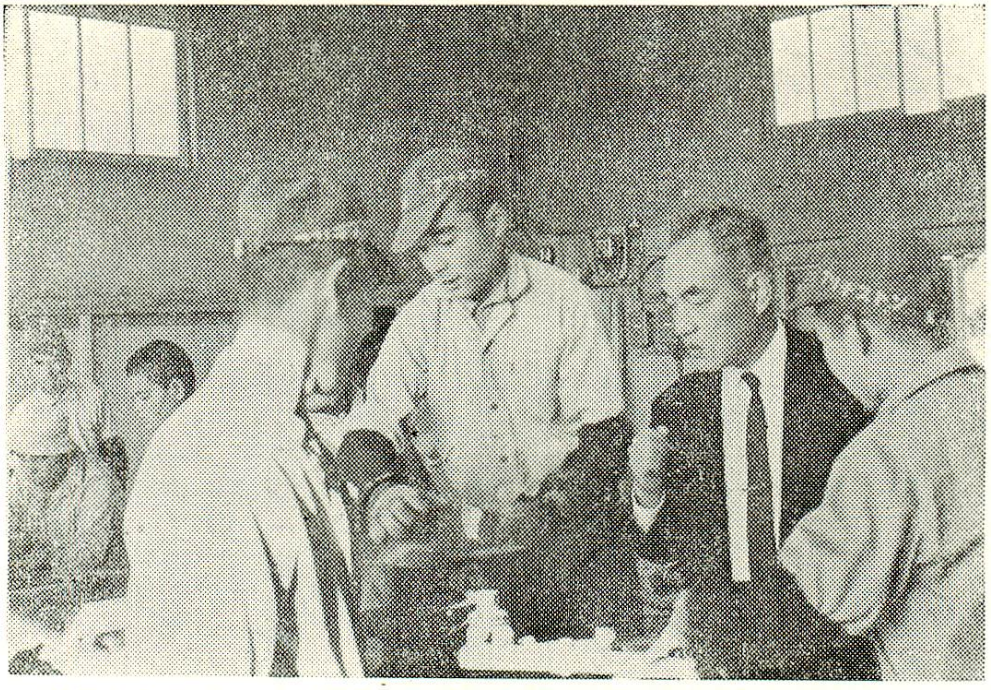
——精薄の子・親・指導員——

◆この世に生をうけた私たちも人間です◆

私たちは人間として生れたのです。世の人々は私たちをまともでない子、精神薄弱者と言います。世間からは厄介者と思われているのですが、私たちも世のため人のためにお役にたちたいと考えております。それなのに精神薄弱者だ、白痴だ、と馬鹿者扱いにされております。

私たちの両親は、なぜ、こんな私たちを生んだのでしょうか。誰のせいでもありません。私たちは成人式を迎えても子供扱いにされるのです。なぜならば、私たちのちえは三才か四才位の子供同様だときめてかかっているからです。つまり頭の中が氷りついて固っており、薬でもお医者でも治せないとされているのです。

私たちのちえ遅れの原因は何であったでしょうか。高熱に脳がおかされた、小児マヒ、また



子供たちのブロック作業を激励する筆者（世界救世教提供）

お母さんが精神的ショックを受けたなどの時に眠り薬を多く飲んだなどいろいろでしょう。私たちは、こんな恐しいことを知らずに生まれ、あるいは大きくなり、五才位になって、初めて両親が家の子はおかしいぞと悟った時はどうにもならないと見放された人間なのです。

私たちは精神薄弱者相談所で、ちえの測定検査を受け、ちえの格付けをされました。私たちのことを専門に研究してくださる人は私たちのような子は全国で三百万人、いやそれ以上だと申しております。そのうち施設に収容されている者は二万人に達していないそうです。これでは秀才といわれている人達が大学の入学試験に合格することよりも困難なことです。私たちは幸いに鹿島育成園成人寮に収容されていますが、残された他の人々を何んとかしてください。

私たちは両親兄妹と別れて二年半を過しました。肉親と一緒に暮したいのですが、精神薄弱者であるために両親兄妹と同じ家に住めないのです。

お父さんが死んで、お母さんが働かないと生きていけないから、私が家にいたら世間態が悪いから、両親が死んだら困るから、きょうだい達の結婚に差し支えるからなどと私たちのいる家庭は普通の家庭にはない悩みがのしかかっているのです。

私たちは、世の中の邪魔者なのでしょうか。人間として生れでた者でも、この世に生きることが、他人の邪魔だというならば私たちを、この世から消してしまってもらいたい。普通の知能をもちながら世に害毒をながす極悪人に対してすら法律は彼等の正当な権利を守ってくれます。法律は私たちを守るように六法全書にも立派に印刷されているのですが、実際には、私たちは一日の食事代が百十四円で、一ヵ月約三千四百円余り、それに日用品費千八百二十円で生活しているのです。それでも私たちは、生きるために、めいめいの能力に応じて働かなければなりません。施設で遊んでいることはできません。先生に何かを教えてもらいたいのです。

先生は、私たちのちえに合った仕事を教えてくれます。朝六時に起床し、掃除のやり方、ラジオ体操、食事の作法が施設生活の第一歩です。ミシンを使える人はミシン作業を、ブロック作業ができる者はその仕事を、封筒作り、農耕などをやって二年半を過しました。

施設の中では世間に対して、ひけめを感じることもなく、これが我が世かと満ち足りた喜び

を味じ合うこともできます。しかし、ある人の両親は、必ず月に一回面会に来てくれるが、私のお母さんは一人で働いているので中々面会に来られません。その時は羨しいやら、恥ずかしいやら、悲しいやらで心が乱れますが、面会に来たよそのお母さんが、あなたたちも、ここにお出なさいとお土産を分けてくださるときは、本当にありがたく嬉しく思います。私たちは馬鹿と言われても、人情の機微にふれる敏感さは人並に持っておるのです。かしこい犬が主人の気持を察するどころではありません。ましてや普通といわれる人達の感覚以上の感受力をそないています。

成人寮の定めとして正月と夏季は、家庭実習ということで一週間の帰宅を許されます。しかし私たち十人位は、家庭の特殊事情で帰宅できない、でも、もう悲しみません。むしろ帰宅する人に手を振って見送ってあげる気持になりました。先生は施設に残った私たちを可愛想と思って特別料理を作ってくれたり、レコードを聞かせてくれたり、歌を合唱してくれたりします。だけど人数が少なくなった寮は、ヒッソリとして、夕日が沈むころになると、心の奥底に湧きでてくる淋しさは、こらえることができず枕を涙でぬらしていつのまにか寝入ってしまいます。

私たちは、この先一体どうなるのでしょうか。お父さんやお母さんが死んだら、お金がなくなったら、そのことを考えると目の先きがまつくらとなって、自分の力でできる限り働こうという気持もにぶりがちになります。

◆お母さんが悪いのよ勘忍して◆

お母さんは、あなたを好んで精神薄弱者にしたのではありません。あなたを不幸にしたいと思って生んだのではありません。ちえ遅れの子とわかったとき、なんと悲しいことと日夜悩み苦んだことでしょう。神様に祈ったり、四方八方馳けめぐり、なんとか丈夫な体にしてあげようと、迷信と言われることもたびたびやってみました。お医者様に相談してもどうにもならなかったのです。もう、あなたと一緒に死んでしまいたい気持になったことも幾度もありました。しかし、また考え直し、手を替え、あれこれ最善を尽しましたが、遂に駄目だったのでした。

あなただけが、なぜ、この不幸を味あわなければならないのか。兄さんや妹は無事に高校に進み、大学にも進学しているのに、お母さんはいろいろ考えた末、お父さんと相談のうえ施設にお世話をお願いしたのです。世間には未だ施設にも入れないで座敷牢に入れられている方や、家で何のお手伝いもできない人も沢山いるそうです。でも、あなたの二年半の寮生活で、あなたは生甲斐を感じてきたことが、お母さんにはわかります。本当に悲しんでばかりいた心に、光が輝いた思いで嬉しい限りです。あなたの将来を考え、少しでも貯金を考えていますが、最近の物価高の波に押し流されそうです。一ヵ月に六千円近くの経費を出すのに、歯を喰い縛って耐え忍んでいるのです。できることなら、せめて月一回でも面会に行って、あなたを喜ばせたいと心がはやるのですが、それがなかなかできないのがつらいのです。しかし、その悲しみ

に負けてしまうことは、あなたに対する、親としての責任を果せないことだと自分に言いきかせて気をもち直しています。心にかかる子供をもっていることが、今では自分を励ましてくれるとすら思うことができるようになりました。いっしょにがんばりましょうね。

◆施設指導員は精神薄弱者の親でもある◆

精神薄弱者は大体一棟に三十数名が適当な人数とされて収容されているが、指導員は一人一人の個性特質を見極めることが必要で、一律に取り扱うわけにはいかない苦心があるので、その気苦労は実に言語に絶するものがあります。言語障害者、嫉妬心の強い者、羨望心の強い者、ひとりで用便のできない者、天かん性、ぜん息持ちの者等の起床時から就寝まで、一日の面倒をみることは並々ならぬこと、神仏の御加護を信じ、その使徒として神仏に恥じることのない献身の心をもつのでなければつとまりません。聖職という言葉があてはまる職業は、これをおいてはないと申しても過言ではないと思います。その務めは、一定の与えられた規格規律を守ってさえおれば足りるというものではありもせん。智能に格差のある子供たちは、制裁や言葉ではわからないことが多いだけになおさらに苦労が伴うわけです。子供は制裁に対しては無言の反抗を示し、怒られれば怒られたことに無関心ではいないのです。肉親と別離していることが指導員を何とか自分の有利に利用しょうとする考えを生ませることさえあるのです。どの指導員が優しく、どの指導員がいやということなどが普通以上に敏感だと思われるような例もあ

ります。それは理知的な利益打算からではなくて、環境によってつくられる反射的、本能的なものだと思います。それだけに、ただ教えこむだけでは指導の目的を達することはできないわけです。

ここに収容されている者は、男女とも既に成人に達しており、人間本来の性的目覚めの現象もみられます。廊下は一つでも、各指導員が男女の寝室両側に見張りを兼ねて就寝するのですが、寮生の深夜の用便の物音にも自然に目を覚すまでになるためには、厳しい修練をつまなければなりません。

鹿島育成園成人寮は、幸いにして、未だ男女間の間違いが起きたことがないのは、一に指導員の子らに対する責任感の表われです。また病人が出れば付き添いに一人の指導員をとられ、流行病が発生したときの神経の使い方は恐らく肉親以上のもので、その気苦労のほどは、はたでの想像を絶するものがあります。寮生が、ぶらりと寮を脱け出せば自転車で捜しまわり、有線放送で町村全体に、また警察に捜査を依頼する等、実に身体が二つ身でも足りないほどで、四六時中、緊張感に胸を締めつけられる思いであります。せめて一日が無事に終りますことを祈らずにはおられません。

指導員の勤めは、そればかりでなく、子供たちが就寝すれば、めいめいの身上書にその日の行動を記録し、日用品費の収支計算を終えないと寝ることもできないし、深夜に寮内を巡回し

子供たちの安全をたしかめなければなりません。果して子供たちが家庭にいたとして、両親は指導員と同じ努力をつくしてやれるでしょうか。子供たちが一週間の家庭実習で帰宅したとき位はとの考えから、あれこれ我侭な生活をさせてしまい、折角の指導員の努力を無にしてしまうことがないでしょうか。だから子供たちが寮に帰ったとき、生活態度のバランスが崩れてしまっており、それを矯正するために前にもまさる努力が必要とされるのです。

このような忍耐と努力は、ただに子供たちの看護に対してだけ向けられているのではないのです。この子らのことをひろく世間に訴え理解と協力をお願いするためにも走り回らなければなりません。近頃は社会の各方面で福祉、福祉とさわいでいるようですが、このような施設にいる子、施設にはいることができずにいる子たちのことを忘れないでいただきたい。

また、子供たちを施設にお願いしておきさえすればよいとの安易な考えをもっている親たちも、よくよく考えてもらいたいものです。

この子らに光を

今回のグラビアは趣きを異にして、精神薄弱者の問題を取り上げその生活を追ってみた。取材に訪れた施設は、茨城県鹿島町の鹿島育成園成人寮ともいう。この施設は鹿島灘に臨んで美しい松林の続くところ、都会の騒音をはるかに遠ざけた静かな環境の中に建っている。――鹿島病院、鹿島更生園と共に、「鹿島医寮、教育福祉センター」と呼ぶ。

この成人寮には満十八才以上の精薄者を対象とし、男女合せて三十四名が収容されている。ここで日常生活のことから、ブロック製造、養鶏、洗濯、洋裁、刺繍等の簡単な作業をとおして「自活」の道を歩ませようというのが目的である。

日課は彼等に合せて組まれている。日曜日を除く毎日、冬は六時三十分起床、先ず、寮の内外を清掃。一部、食事の準備をするものもある。清掃が終って食事。八時、ラジオ体操、後、各自の決められている作業へ出かける。

先ず、ブロック作業をみてみよう。ここでは、ブロック製造機二台を具え、一日平均約八百個のブロックを製造する。ここで最初に気付くことは、一般の製造所で認められる程度のキズもここでは認められないということ。それは製品の上からではなく、彼等自身が

それを認めない。たとえ指導者がそれは良いのだと説明しても納得しない。キズがあるから駄目なのだという。いわゆる、教えられたことに対して、そのとおりにやろうとする厳しい面を持っていることが伺える。又、その作業態度は熱心そのもの。大部分の男子はここで働いているが、養鶏部にも一部の男子が働いている。

一方、その時間に女子の方は何をしているかについても書いておかなければならない。一番多いのは洗濯と洋裁。他に清掃、布団干し等がある。日によっては全員で学習をすることもある。

こうして一日が終れば、食事、入浴、その後、部屋で遊ぶもの、テレビをみるもの、それぞれに分れて自由時間を楽しむ。消灯は午後八時とかなり早い。

こうして日常生活を追って来ると、彼等は、普通の人にまねの出来ないすぐれた、面を持っていることがわかる。何事も教えられたとおりにやろうとする。教えられないことは決してやろうとしないが――。それだけではない、ゴマカスことがない、すべてが真剣だ。こうして、彼等は一生懸命に人間として、社会人として生き、そこに生きる喜びを得ようとしている。我々は今、その人達に心から励ましの言葉を送りたいと思う。（坂本）

世界救世教「地上天国」一八五号掲載

精茲者の真の幸せのため

精薄者の真の幸せのため

――一父親として社会復帰の考え――

火ヲ放テ現ニ人ノ住居ニ使用シ又ハ人ノ現在スル建造物、汽車、電車、艦船若クハ鉱坑ヲ焼燬シタル者ハ死刑又ハ無期若クハ五年以上ノ懲役ニ処ス（刑法第一〇八条）

以下にのべる事案は実在のものであるから直接の関係者の姓名などは省略する。

私は、たまたま社会福祉法人全日本精薄者育成会の専門委員をしていた関係から証人として裁判に関与しました。私は精神薄弱者といえども人間である以上、罪を犯したばあい処罰されることはもちろんであると考えている。

本件の主人公である彼も、またその一人である。

裁判に関与したという直接的な原因もあるが、私はかねがね精薄者と犯罪について考えてい

たことも多々あるので、その一端をのべてみたい。

彼の生いたちと罪となる事実

彼は小学校二年生のとき父と生き別れ、母の手によって育てられ、中学校を卒業し高等学校に進学した。

まもなく高校を退学、その後、母の希望で約六年間にわたって社会福祉法人全日本精神薄弱者育成会の施設に収容され、昭和四十年十一月に社会復帰した。

社会復帰後、某市に住む母のもとから市営の職場に通勤していたところ、四十一年三月下旬に母親の突然の死に遭い、しばらくは伯母の家に引きとられていた。

四月十日ごろから伯父や伯母たちのきめてくれた同市内のアパート（六畳間）に移り、自炊生活を送っていた。

彼は最愛の母親の急逝によってわが身のゆくすえなどをあれこれと考えるうち、このさき一人でアパート住いをしていくことに耐えがたい寂しさに襲われていた。

これと同時に勤務先ではかねて、上司から仕事が遅いと注意されていたことや、職場も清潔でないことなども思い起こされて、東京に逃げだそうという気持をもっていた。

彼はこのためにはアパートを燃やしてしまうほかはないと考え、同年六月十五日朝居室の中

央に新聞紙を四、五センチ積み重ね、その上や周囲の畳の上にライター用の油を少量ふりまいて火が容易に畳に燃えうつるようにしたうえ、マッチをすって新聞紙に点火し彼のほか一四世帯が現に居住している木造二階建モルタル壁アパートに放火した。

結果として新聞紙を燃やしただけで火が自然に消えたため、その目的は遂げえなかった。

七〇三号法廷

裁判長から彼にたいする被告事件の開廷が宣せられ、検察官の起訴状の朗読、それに対する彼の認否、証拠調とすすむにつれ、事件の全容が明らかになった。

彼本人にたいする質問に、彼はただちに

「間違いありません」

「そうです」

「悪いことをしたと思っています」と、一見なんら変るところがない答えをした。

しかし、むづかしい質問は理解できず、再三頭をかいて困っている様子であった。こうした彼の態度を見て、私は目頭が熱くなった。

彼は知能指数六六であることは鑑定書で明瞭であり、十歳六か月程度の軽愚に相当していた。したがって、ある程度の誘導質問をしてやらないと返答に困ってしまうのである。

私は育成会の専門委員という立場から在廷証人として証人席に座った。

問　精薄者は犯罪を犯すような者でしょうか。

答　犯罪意識をもっておりません。三、四歳の知能指数しかない幼い子がマッチの棒で火をつけるのを覚えたのと同じだと思います。統計上は精薄者に放火が比較的多いようです。

問　彼をよい施設に入れたならば、再び犯罪を犯すということは考えられますか。

答　犯罪者が刑務所に入っているうちは朗らかであるということと同様に社会から隔離されたところにいれば劣等感ももたず朗らかになって、犯罪を犯すようなことは考えられません。

問　彼が身内の家から通勤しながら生活を続けていて、さしつかえないと思いますか。

答　精薄者は精薄者の部落で生活するのが適当だと思います。たとえば彼の身内の人に結婚話しが出るとか、家庭内の問題のため面倒をみるのがむづかしくなることが起りうると思います。

問　前の証人が、精薄者は神様のようなものだとのべたが、この点について証人はどのようにお考えですか。

答　まったく同感です。彼らは清らかで、なんの雑念もなく幼児と同じです。犯罪がからんでくるのは親を亡くしたり叱言をいわれたとかで、精神的に不安定になるか

らです。殊に樹木の新芽が出る四月から六月までと落葉の時期が不安定な時期と思います。

問　施設で知能を進歩させることができますか。

答　行動力は向上させられましょうが、知能的には進歩させることは困難と考えます。

彼にたいする判決

裁判の結果、彼は懲役三年に処せられ、四年間の執行猶予をいいわたされた。

一人暮らしのたえがたい孤独感などから彼は衝動的に自室に火を放ったが、大事にいたらなかったのは、彼と近隣の人たち双方にとって幸運であった。

しかし彼が放火したのは一四世帯の家族が現に住んでおり、人的、物的に一大災害を招来する危険と近隣にあたえた不安と衝動はかなり大きく、刑責は重大である。

しかし彼に同情すべき点も多く、知能的に一般人より劣る精薄者であること、純真な性格で、これまで一度も犯罪を犯したこともなく真面目な生活態度、本件犯行後もすすんで自首していること。年若く審理の過程で事の重大性を深く理解し、二度と罪を犯さないことを誓い、親類縁者も彼を更生させるため万全の策を講じようと努力していることなど、彼のため酌むべき事情も少なくない、という情状をくんだ裁判であった。

精薄者の社会復帰について

最近、精薄者を積極的に雇用しようとする社会の動向は喜びにたえない。

そして、彼らが修得した技術を十分に発揮し、また生産者となって社会人に伍していけるように努力している姿は尊いものである。

しかし、このような環境に入る人は幾人いるであろうか。

社会は彼らを雇用するのに憐憫と低賃金を目的としていないだろうか。

身体障害者福祉法は、彼らにとって詳細に具体的な魂の入った生きた法律である。

それならば、精神薄弱者福祉法にもその魂は生きているだろうか。

精薄者は自己の意思を自由に表現することは困難であるから選挙の入場券をもらっても正確な投票は望めないかも知れません。このようなものを身体障害者なみに法律の改正を為政者は成立させるか否か、はなはだ疑問である。

施設内に授産施設を

精薄者が満十八歳になって退寮を命ぜられたり、援護施設も三か年間の教育・指導・訓練で、これまた退寮しなければならない現実は非情というほかはない。

福祉司の温かい配慮によって、さらに一か年延長させて長期間入寮させる方法もあろうが、これについては国家の行政指導は必ずしも心よしとしないむきもある。

施設指導員の訓練、指導によって精薄者の脳障害を矯正しようとしても、これに大きな期待をもつことは酷なことである。

現在の授産は指導員の創意工夫だけでおこなっているといっても過言でない。私は三十八年の六月二十五日、精薄者の施設に庇護授産所の設置を国家予算ですゝめていただくよう請願書を衆参両院議長に提出した。この請願書は（註一〇〇頁参照）衆参両院公報には登載されたものの、その後四か年経過しているが委員会付託になったとは聞かされていない。

皇室からは精薄者に対して深い御理解を示していただいているが、皇室の方が精薄者関係の催しに臨席なさるとき、厚生大臣はじめ各党の代議士諸公も列席し、理解者顔をしているが、その場かぎりのジェスチャーとしかうけとれない。

篤志家や芸能人に依存して精薄者を援護することは、労少なくしてできることかもしれない。福祉国家の代表である為政者よ、精薄者が三〇人に一人の割合で生まれ三〇〇万人になろうとしている現状をなんと心得ているのか、彼らのためになにをなそうと考えているのか。

精薄者を委託された施設長が、借入金による資金繰りに心身ともに疲労の日々を繰返しているようでは、指導も訓練も落ちついてできないであろう。

長崎県の佐世保に近い「のぎく寮」の近藤益雄先生が資金難のため施設経営の前途を絶望し、自己の生命を絶って福祉国家の実現を訴えたことがあった。

しかしマスコミはこれを黙殺していたが、ただ東大の三木安正教授が三十九年八月「朝日ジャーナル」にこの問題を取上げられたことがあった。

また、同年三月にライシャワー元駐日大使傷害事件の後に、あわてて精神衛生法の改正などが論議になったこともある。にもかかわらず主務官庁職員が理想的な施設の一つを視察して、立派すぎると批判したことを聞き私は強い憤りを覚え、彼ら精薄者を厳冬に身を海中にほおりこむか、酷暑のとき食物もあたえず、自然死させてもよいのかと考えたこともある。

精薄者は施設のなかで指導員とともに難行苦行の努力の末に社会復帰がかなったとしても、指導員には、なお一沫の不安があるのである。遠く離れても心のつながりがあるからである。

彼らの両親も社会復帰を手放して喜んでいるわけではない。

一般社会人のうちに入って、はたして満足に勤務できるかと憂えているのである。

現代の物質文明の飛躍的高昇の反面、精神的不安定をもたらしている世相に精薄者をあたたかく理解し、深い愛情を注ぎ見守ってくれる企業家が幾人いるであろうか。

彼らにたいして、愛情のない単純な制裁や叱責でことがすむと考えるのは大きな誤りである。精薄者を社会復帰させることを願うならば彼らに適合した職場に、よい指導者をおいて自主的な行動力と稼動の場をあたえ、一般社会とは離れた環境をつくる必要がある。

精薄者に生きるよろこびを

全日本精神薄弱者育成会が提唱していた「ゆりかごから墓場まで」の精神を、政府も五か年がかりで五〇〇名を収容するコロニーを建設するというが、決定した以上、先進国に恥じない配慮で、かつ迅速に確実に着手してもらいたい。

昭和四十一年二月の「読売新聞」の「気流」欄に、私が投稿した「法人の政治献金を各党がその一〇パーセントを精薄者の施設建設に寄附してくだされば……」との提唱を実現していただけば、それだけで、四八〇〇余名が収容できるのである。

現在の多くの指導員は多かれ少かれの宗教的な素質を身につけており、肉親にもまさる愛情をもって真の知恵、愛の光にあふれる奉仕をしている。それが、指導員が精薄者に尊敬される理由である。

施設の中でとはいえ教育と訓練によって彼らが生産にたずさわる一員となったときの彼らと指導員は喜びを感じ、それがやがて誇り高い勇気と厳も通す力となって、社会に貢献するので

ある。

だからこそ確固たる援護の場を整備し、内容を充実させるのが大切である。すなわち十分な機能と施策を樹立させ、彼らに生きる喜びと、作る喜びを与え、嘘いつわりのない人生の尊さを教えなければならないのではなかろうか。

彼らに何か問題が起ったときにだけ彼らに目を向け、大げさに嘆き、あるいは嘆願陳情するなどして、百議百論していては、福祉国家として誠に恥ずかしいことではあるまいか。

また、親、兄姉ですら生命力に感謝することを忘れ、いたずらに自己の不幸を悲しむだけでこの子らの幸福のためにする真の努力を怠っているといっても過言ではあるまい。

このような世相は心に、どのように反映しているであろうか。

現代医学ではかりにちえ遅くれのこどもたちを完治することは不可能であるとしても、私たちには誠意と努力とによって、彼らをより幸せにする責務はないであろうか。

今、精薄者たちはつぎのように叫んでいる。

私たちは人間です。

しかし、人はみな私たちを精薄者と呼びます。

私たちも人間として生まれてきたのです。

世の人びとは私たちをマトモでない子、世の中の無為徒食の人間とでも思っているのでしょ

うか、私たちは成人式を迎えてもこども扱いにされるのです。

かりに、私たちのちえが三歳か四歳ぐらいのこども同様で、これ以上のちえの上昇は望めないにしても、そのままで人として一人前に扱ってもらえないのでしょうか。

私たちの頭のなかは凍りついて固っており薬でもお医者でも治せないのでしょうが、その原因はなんでしょうか。高熱に脳がおかされた、脳性小児マヒ、お母さんが眠り薬を多く飲んだり、有害食品を多く食べたのが原因なのではないでしょうか。私達の責任ではないのです。一つは母親の責任であったり、もう一つは社会の責任といえないでしょうか。私たちはこんな怖ろしいことを知らずに生れ、五歳ぐらいになったとき〝うちの子はおかしいぞ〟と知ったときは、すでに遅すぎたのです。

私たちは世の中の邪魔物なのでしょうか、大切な人間としての存在価値があると私たちはいいたいのです。それがないのならば、私たちをこの世の中から消してしまってもらいたいのです。法律には、私たちを守るように、立派に印刷されているではありませんか。

私たち社会人は、この叫びを無にすることがあってはならないと思います。

請　願　書

（昭和三八、一〇、一八、衆、参議院議長あて提出、衆、参議院、公報登載済）

精神薄弱者収容施設に庇護授産所の設置について

請願の要旨

精神薄弱者の援護施設（即ち成人者）に庇護授産所の設備強化促進をお願いいたします。

請願の理由

1　精神薄弱者の各施設は保護と更正のため職業指導に目標があるように解されます。

2　ついては現況は、各施設の経営者は自らの熱意により目標に近づくため日夜東西をとわず、時間と足により寄附金の獲得に狂奔し、その不足金は各父兄に建設資金として寄附金を募り、授産所を設け、法の精神を生かすより他に途はないのであります。

3　精薄者に対する我が国の社会福祉事業は、篤志家に委ねられていて政治的、金銭的にも非常に心もとない現状であります。従つてこのちえの遅れた者を持った父兄は、貧富の差はあつても、毎月七千円ないし一万三千円位費用を支出しなければならないのです。

4　精神薄弱者については、皇室特に、皇后陛下、秩父宮、高松宮殿下はことのほかお心を垂れ下され、機会あるごとに精薄者自身および父兄を激励のため皇室の日程に組み入れられ、御台臨とお言葉を身近に接してい

る次第で、全国のこの悩める者は心の灯を得ている訳であります。

5　我々は金額の多少に拘わらず納税しながらも身体障害者より冷遇されて東西も判別し得ない人間をかかえ、将来の不安と生活に追い廻されている状態であります。又収容施設に入ることはその競走率は国立大学入学より以上に困難な社会状態です。

6　しからば、収容所に庇護授産所を設けることに国が保障する制度化を図つていただけるならば、収容設備を提供する側として、まことに心強く、その授産所の生産収益により不幸な人も収入を得、父兄も安んじ、かつ心強くお互いに手をつなぎ全国的な一団体を結成し、世界にさきがけて、恵れた社会福祉国家ができるものと確信いたします。

7　ついてはぜひ共この庇護授産所設置に要する予算化を図られ、各施設に基本から職業訓練が実施できますよう御取計らいください。

8　かくなることは、収容された者は、同授産所により職業訓練により習得した技術を生かせる者は社会復帰も叶えられ、更に重症者は終生安んじて保護を受けられ、父兄は勿論社会も安心してこれら精神薄弱者を収容施設に送ることができ、いわゆるコロニー施設に名実ともに一歩前進するものと考えます。

9　ぜひ共、社会の片隅の少さな声を温かい心をもつて、誠をもつて受け入れて頂ければ、これにまさる幸福は又とありません。

こころ

こ　こ　ろ

(一)

施設に入寮中の娘が、冬休みをかねた家庭実習のため、僅かな日数であるが家庭に帰って来るようになって、四回目の正月を迎えた。娘も家族と生活することを喜んでいるのは確かである。娘を家庭に迎えてやれば、幸福だと思うのは、親の自己満足とも思える。

私たちは、娘の帰宅を待って、部屋を飾り、食卓を賑わし、一族郎党相寄って、明るく迎え、クリスマスを行う。妻や姉妹達が、誠意を込めて造ったものに、娘は、ちょっと箸をつけただけで、もう沢山だと満腹を訴え、むしろ、愛犬メリーと戯れることを楽しんでいるときが多い。純真な動物との心の交流が、嬉しいらしい。寮で、平和に、同僚との友情と、指導員の創意工夫の教育・訓練によって心のうちに、逞しい自信を得て、憐憫に頼らない人間に成育し、

自分たちは、人間であることを自覚しているように思える。

親だ親だと一人合点し、思い上がっている私の心が、恥ずかしいと思った。このちえ遅れの子らのためには、利他愛の精神の必要性を強調することも空な響とすら感じられる。流行語のように、ケ、セラ、セラ（なんとかなるだろう）と漫然と看過できない子らが求め欲している真の幸福を享受できるかを真剣に考えるときに至っていると思うのである。

健康は、我々の一切の源であるが、私たちの周囲は、交通地獄と、公害と数多い有毒食品の、まことに物騒千万な日々の生活である。このような世の中に、無事に一日を過ごせたことに、感謝することが、報恩のためにも、また明日に備える深い思慮の源であることを忘れてはならないと思う。

㈡

前鹿島育成園長藤原保先生が、昭和三九年七月、病いのため天国に召された直後、キミエ夫人から、私の妻あてに、「散る桜また散る桜、いのちの限り尽さざらめや」と、心の柱を失った夫人の心境を、詩によせて、夫も妻も、いつかは桜のように散る運命にある、健康のうちに互に愛情を交わし、互に悔いを残さないようにと、さとされたものである。

保先生が、生前、ジェット機の尾翼の片方だけの金があれば、ちえ遅れの子らのために、希望ある豊かな生活が与えられるのにとおっしゃった絶語の遺志をつぎ、キミエ夫人が子らの母

親代りとなって、見守られていることは、私共の心の糧であり、ともするとくじけようとする心をふるいたたせる支柱である。

㈢

毎年夏と冬の休みに、外泊を許されるが、家庭の事情で、一〇名位は残寮する。私は、迎えに行くつど苦しみを味わう。それは、帰り仕度を始めると、残寮する子らが、部屋の片隅で悄然と眺めている姿は、こみあげる悲しみを堪え忍ぶのに精一杯で、ついに、彼も彼女も赤くなった目を両の手で覆っている。『わたしの家の人は、どうして迎えに来てくれないの？　ねえ、会長さん！』と、私に抱きつき泣じゃくる子らの身体のぬくもりが伝わるにつれ、どう慰めてよいのか言葉にならない。

種々の事情のため、子らを迎えに来られない親兄姉の心を納得させる自信もなく、偽りも言えない。真、善、美を信じ、愛善を行なう子らに…。したがって、親兄姉に、面会または一枚のはがきだけでも喜ぶ子らの求愛心をわかって欲しいとおもう。愛情に飢え、家庭内に不和があれば、子らの心が乱れ夜尿が多くなり指導員の負担はかさむのである。生後四か月位の幼児の頃に想いを起こすならば子どもを指導員に委ねて安閑としているのは安易な逃避行為である。

自分の心にある愛情を、可能な行動で表わせば、互に幸福を味わい、安心感が湧き出るものと思うが、どうであろうか。

千葉指導員と子供たち

㈣

施設の指導員は、園長のもとに一致団結して施設を運営し機能を発揮してこそ子らを円満におさめ、世を愛し、人を助け、人を動かす力となることは、あらためて述べるまでもあるまい。このことは、些細なことのようであるが、ゆるがせにできないことで施設の真価を問われる重要なことである。

鹿島育成園設立以来、子らと五か年間、春夏秋冬を通じ、肉親にも優る愛情をもって、教育・訓練にあたっておられた千葉茂代指導員は、昨年夏、突然、病魔に侵かされ、五〇日近い闘病生活をされたが、天意と神の恵みにより全快された。入院加療中に、私にその心境を次のように寄せられた。

『寮の子供達には、淋しい思いをさせてしま

いました。お蔭様で皆様の暖かいお心にお守りいただき、日々全快に向っております。今日で二二日です。かわいい寮生と別れて暮したのも初めてです。

それだけに（私がいなくても諸先生がいて下さるのですが）三四名の一人一人の顔、性格等が走馬灯の如くかけより、ああもしてあげねば、こうもしてあげねばと過去の無意味な在り方を反省させていただいております。

某君（筆者が名を秘す）が淋しさの余り寮を飛びだしたことも二回あったそうです。やはり淋しいのだなと思いますとき、可愛想で、某君も真実の我が子（指導員は二児の母親である）のように思われて泣いてしまいました。これでよいのだ、真の親子の愛情が流れて、はじめて打ち解けた指導ができるのだと、一日も早く退院し、姿だけでも、笑顔だけでも見せて励ましたい一心でございます。私は、生れ変りがん張る覚悟でございます。（後略）』

私は、ＰＴＡの会長として、指導員各位の誠からの利他愛の精神に感謝し、幸せを待つ子らのために尽すことの尊きお働きに対し敬意を表し子らの幸多かれと祈りつつ筆をおきます。

大慈の人ライシャワー大使

August 13, 1976

Mr. Shizuo Takezawa
Court Clerk of the Grand Bench,
Supreme Court of Japan
1445-go, 14-to, 3016-1,
Nagatsuta-cho, Midori-ku,
Yokohama-shi, Kanagawa-ken 227
Japan

Dear Mr. Takezawa:

It was very good to hear from you. My wife and I both read the proofs of your chapter about your contacts with us in connection with your work for handicapped children in your forthcoming autobiography, and we were happy to have our memories refreshed about these matters. We still are much impressed with what you are doing and hope you are well and able to continue your help for handicapped children along side of your no doubt strenuous duties at the Supreme Court. You of course have my full permission to publish my letter to you in your book. I hope it will be successful and will draw attention to the care of the handicapped and perhaps even make some money for the cause.

My wife joins me in sending you our very best wishes and our greetings to the children of the Kashima Ikusei-en.

Sincerely yours,

Edwin O. Reischauer

Edwin O. Reischauer

拝復　あなたからのお便りを嬉しく拝見いたしました。私は妻と近く刊行されるあなたの本の中の心身障害者のための仕事に関して私たちとの交際について書かれた文章の校正刷りを読ませていただきました。

あなたがたとの思い出を新たにすることができて幸せに存ずる次第です。私たちは，現在でも，あなたのなさつていることに対して深い感銘を受けております。あなたがお元気で，疑いもなく激務である最高裁判所での職務と併行して，心身障害者のために援助を続けることができることを希望いたします。あなたあての私の手紙をあなたの本に掲載することは勿論結構です。このたびの出版が成功されて心身障害者の保護に注意がかん起され，そのための資金が得られることを祈ります。

妻とともに，あなたの御繁栄をお祈りするとともに鹿島育成園の子供たちにごあいさつをお送りいたします。　敬具

1976年8月13日　エドウイン・オー・ライシャワー

大慈の人ライシャワー大使

◎　ライシャワー大使と鹿島育成園の子どもたち

一九六四年（昭和三九年）三月にライシャワー駐日大使は、日本人少年から危害を加えられるという、まことに痛ましい不祥事件が起きました。

私は、その少年が精薄児であったことから、同じようなちえ遅れの子を持った親として、また、国民の一人として堪えがたい感情にかられ深い苦悩に沈んでおりました。大使は長い闘病生活の甲斐あってご快方に向われたという報道があったので、私は大使あてに

『尊敬する閣下が御快方に向われたことを心からお喜び申し上げます。心ない日本の少年の閣下に対する、永遠に拭い去ることのできない行為は、日本国民ひとしくお詫び申し上げなければなりません。

幸い閣下の特別の理解あるお取計いによって国際的にも、ことなきを得ましたことに、感

謝いたします…

（以下略）』

と、ひたすらにお詫びを申し述べ、もとの健全なるお体に回復されるようお祈りするとお手紙を差し上げたのです。

このことがライシャワー大使とご交際をいただく契機となりました。

ちょうど、このころ、私は前年の慈善公演に引続いて慈善音楽会を行う、つまり八月二二日（土曜日）に、ちえ遅れの子供さんたち二〇〇名を日比谷公会堂に招待する計画を進めていたときだったのです。そんなときのできごとでありましただけに、私の心の痛手は大きく初心がざ折しそうになってしまいました。

私は意気消沈して、この公演の中止をも考えたのですが、すでに日比谷公会堂との会場使用

タピボン刺しゅうを持たれた大使ご夫妻

契約を結んでしまっていたので今更後退することもできませんでした。

幸い、ときの参議院議員であられた山下春江先生と、労働大臣石田博英先生から、蔭ながら援助するから初心を貫けとの激励の言葉をいただいて、心機一転、目的達成に向って再び行動を起しました。

ちょうどそのとき、歌手の渡辺はま子先生から財団法人ゴールド・ベル芸術協会の理事に就任することを推せんするとのお話しがあったのです。

早速、最高裁判所の意向をうかがったところ、上司の温かい配慮をいただき、時間外、無報酬の条件つきでその団体役員につくことの許可がいただけました。タイミングもよく、慈善音楽会の主催をゴールド・ベル芸術協会と鹿島育成園恵松会（父兄会）の共催にすることもできたことは非常に幸いなことでありました。

そのゴールド・ベル芸術協会会長に石田博英先生が就任されたことは、なおさら私に勇気を与えてくれました。

慈善音楽会の第一の難関は、その資金造りでありました。

その資金造りに着手するにあたって山下、石田両先生に趣意書の発起者になっていただくことをお願いし、その案文を提出すると「結構」ということで御署名をいただいて趣意書が完成しました。

まず、手初めに昨年の公演にお世話になった東京、渋谷道玄坂上にあるふるさとの柳屋社長を訪ねて、趣意を説明して芸能人の出演にご賛同を得たいとお願いしたのです。

柳屋社長は

「私共の芸能人を無料出演させましょう」と快諾してくださいました。

「一応、芸能人と打合せをしてください」

ということで座敷に招かれて、同店の呼び物である東北民謡を聞かせてもらいながら芸能人の出演終了を待っておりました。

そのとき、私のテーブルの前にアメリカ人らしい夫妻が坐って、食事と演芸を楽んでいたのですが、夫人らしい人が日本の畳に坐ることが苦手と見えて足をもぢもぢさせて顔をしかめていました。

私はひざをくずして、そのようにすすめたところ、夫人も、ひざをくずして

「サンキュー」

と言って、にこにこしていました。

出演を終った芸能人らが、私のところに次々と集ってくれたので、私が趣意を述べて出演をお願いしました。芸能人たちは、八月二二日の出演は可能な日程であることを確約してくれたので、細かい打合せを終え、社長に礼を述べて帰ろうとしました。

そのとき、私の前に坐っていた先程の外人が私に話しかけてきました。しかし、どういうことを言っているのか、私にはその意味がわかりませんでした。

私は同店のくさむら支配人に来てもらって通訳を願って、一言二言会話を終えたときに、そのアメリカ人の夫君は、突然、私の手に五〇〇〇円を握らせたのです。

私は支配人に、どうしてアメリカ人が金をくれたのか、その理由を聞くと

「あなたを、『この人は最高裁判所の職員だが、ちえ遅れの子供たちのために努力している方だ』と紹介したから五〇〇〇円を寄附してくれたのだ」

ということで、アメリカ人の善意に驚き、感謝いたしました。

私は、そのご夫妻にお礼を申上げると、夫君は私にビールをすすめてくれました。ありがたくいただいて、お名前をうかがったのですが、なかなか言ってくれません。それではサインだけでもしてくださいと頼むと、しぶしぶサインをしてくださった。その夜は互いに乾杯をしてお別れしました。同店の支配人は寄附してくださったアメリカ人は軍人らしいということを教えてくれました。この異国の人の尊い五〇〇〇円が、資金造りの第一号となって、私の心に力強い勇気を与えてくれたことはもちろんであります。

私は、早速、当時虎の門にあったアメリカ大使館内の海軍基地の武官室を訪ね、受付嬢に先日寄附をいただいた経緯を話して、そのときもらったサインを示して、寄附してくださった軍

人の住所、氏名を調査してもらいたいと頼みました。
タイプを打っていた受付嬢は
「私は今勤務中であるから、この仕事が終れば調べられますが、それまで、お待ちになれますか」
と言われた。私は、まことに厳格な執務態度に感服しながら、仕事を終るのを待ちました。
やや、暫くして仕事を終えたらしい受付嬢は人名簿を開き、あちこちに電話をして、ついに、その贈り主をつきとめてくださいました。
贈り主は厚木基地のパール・ステイビンズ中尉であることが判明したので、中尉と、その司令官の住所氏名のタイプをお願いしました。そして帰るとき受付嬢は
「また、お役にたつことがあったらいらっしゃってください」
と優しい言葉をかけてくれました。
私は、早速ステイビンズ中尉に寄附をいただいたことに対して、あらためて書状によるお礼と、その軍司令官にも同中尉の篤志行為の報告とともにお礼状をさしあげました。
ステイビンズ中尉の善意は私にとってまことにありがたいことであったので、私はライシャワー大使へも報告することにしたのです。
大使への報告は、八月二二日に日比谷公会堂で、ちえ遅れの子供たちを招待する慈善音楽会

を開催すること、そしてステイビンズ中尉の寄附金は慈善音楽会の第一号の資金として活用させていただくことの書面を作り、これを持ってアメリカ大使館を訪ねました。

秘書官に用件を告げると

「大使はあいにく会議中ですから暫時お待ちください」

ということであった。秘書官に

「大使に私が待っていることをお告げになりますか」

と聞きますと

「もちろんです」

と言われたので、私は会議中にお待ちすることは失礼になると考えて、報告書を大使にお渡しくださいとお願いして大使館を辞しました。このとき振り返って見た大使館屋上の星条旗は、あたかも私を励ますかのように真夏の空にへんぽんとはためいていました。

八月一三日に私のところに英文の封書が届きました。それは、まぎれもないライシャワー大使からの書翰でありました。

『拝啓　貴殿が心身障害者のために努力していられるということと、厚木の海軍基地のパール・ステイビンズ中尉が貴殿の事業に対して寄附をしてくださったとのことをお知らせしてくださった一九六四年八月六日付の書簡を拝受いたしました。

私は貴殿のような仕事をしている人のことを知るたびに、いつも励まされる思いがいたします。

貴殿が、これらの不幸な人々を援助するために時間と精力とを捧げている、その無私の心は私共大使館一同に対する一つの神の啓示となります。

貴殿の事業は一方ではステイビンズ中尉のような他の人々の努力の焦点となるものです。

貴殿の御計画によって日比谷公会堂での八月二二日に行われる音楽会が、貴殿の美挙に、それは心身障害者に直接になぐさめを与えることと同時に貴殿の事業を援助するために他の人々の協力を求めるということに役立つものと信じます。

その音楽会は貴殿の期待に沿いあらゆる点において当然受ける価値あることですから成功を収めることを祈ります。

貴簡に感謝し、現在も将来も貴殿の事業が成功することを祈ります。

一九六四年（昭和三九年）八月一二日

エドウィン・オー・ライシャワー　』

1964 年 8 月12日付，ライシャワー大使書簡原文

Tokyo, August 12, 1964.

Dear Mr. Takezawa:

Thank you for your letter of August 6, 1964, in which you informed me of your efforts on behalf of the feeble-minded and of the donation of a sum of money made to your work by Lt. Paul Stebbins of Atsugi.

I am always heartened when I learn of work such as yours. Your selflessness in devoting time and energy to help those less fortunate than yourself is an inspiring example to all of us at the Embassy. Your work also provides a focus for the efforts of others, like Lt. Stebbins.

I know that the concert which you are planning for August 22 at Hibiya Hall will be of significant help to your cause, both by giving direct comfort to the feeble-minded and by enlisting the aid of others to assist you in your work. I hope that the concert fulfills your every expectation, and that it is in all ways the success it so richly deserves to be.

Again, many thanks for your letter and my best wishes for success in your work, now and in the future.

Sincerely yours,

Edwin O. Reischauer

Mr. Shizuo Takezawa,
RO 46 Komazawa Jutaku,
7-chome, Kamimeguro,
Meguro-ku, Tokyo.

このような心温かい大使の激励の書簡をいただいたことは私にとって意表外のことであります。また、この感激は終生忘れることのできないことで、私のものの考え方に大きな影響をもたらしたことは言うまでもありません。

私は、従来ちえ遅れの子を持っている親として、とかく卑屈になって自分は救われないという心が先走り、己れの手で幸福の網を断ち切っているような毎日であったからです。

大使のご書簡によって奉仕ということが如何に重要なものであるかという啓示を得て、また社会福祉に尽すことは人のためではなく、結局は自分自身のためでもあることを悟り、このことは私の心を一層明るくしたのです。

大使の右の書簡のことが、朝日新聞に次のように報道され、見知らぬ方々から数多くの激励文をいただき心身ともに救われ、勇気も倍加しました。

朝日新聞昭39・8・18・（火）　朝刊14ページ掲載

精薄児を見守るライシャワー大使

慈善公演を励ます

刺傷事件のわびに返信

「精薄児を見守っていこうというあなたの献身的な仕事が今後とも成功することを願っています」。――きたる二十二日、東京の日比谷公会堂で開かれる「ちえの遅れた子どもたち（精薄児）を守るための招待音楽慈善特別公演」の事務局長武沢静雄さん（四九）へ、このほどライシャワー駐日米大使から激励の手紙が寄せられた。

ライシャワー大使が精薄の日本人少年に刺されてから五カ月、同大使はこの手紙で「私はあなたたちの精薄児を見守ろうという仕事を聞くにつけ勇気づけられる。米大使館の全員があなたたちのこういった献身的努力を模範として、感激している」と書き送った。

武沢さんはこの手紙を読み「一生けんめい正しく生きようとしている多くの精薄児も今度の公演には出演するので、ぜひライシャワーさんや米大使館の人たちにも見ていただいて、

五カ月前の悪夢をすっかりぬぐい去ってしまいたい」と、はりきっっている。

武沢さんが不幸な子どもたちのために働きはじめたのは、一昨年春のこと、武沢さんも身内に不幸な子どもがおり、茨城県鹿島郡鹿島町の鹿島育成園という精薄児施設に預けているが、そこの父兄会「恵松会」の会長にかつぎ出されてから、精薄児が、みんながわが子のように感じられ、彼らのために思いきって尽したい、と心を決めたという。

武沢さんは最高裁判所の用度課長補佐をしており、公務員として民間での行動は制限されているのだが、最高裁の事務当局では、とくに民間事業の兼職を許可して武沢さんに協力した。「おかげで、昨年一月の全日本精薄者育成会主催〝精薄者資金造成、歌と民謡の慈善公演会〟でもいろいろお手伝いができました」と武沢さんは感謝している。

ことしの慈善公演は社団法人ゴールド・ベル芸術協会（会長、石田労相）と恵松会の共催。武沢さんの責任は重く、公務のひまには関係団体に協力を求めてかけずりまわった。こうして厚生、文部、法務各省はじめ、東京都、朝日新聞厚生文化事業団など十六の団体の後援を受けることになった。

そんな準備に追われていた五月半ばのある日、武沢さんは都内のある飲食店で厚木基地のステイビンズ米空軍中尉とことばをかわし、精薄児の育成に努めていることを語った。同中尉は「私も応援しよう」と、五千円を差出した。感激した武沢さんはさる六日、ライシャワ

ー大使にあて「刺傷事件について私たちが申訳なく思っているのに、米軍人から応援を得たことは感激です……」とおわびをかねての礼状を出した。

それから十日後、東京都目黒区上目黒七丁目駒沢公務員住宅RO四六の武沢さん宅に同大使から返事がきた。

またこの返事に先立って米大使館は、米第五空軍軍楽隊を今度の慈善公演に参加させよう、と武沢さんに伝えてきた。こうして今回の慈善公演は、一般のほかに都下の精薄児二百余人も招き、鹿島育成園の成人寮有志や精薄児の四施設のこどもたちに加えて、米空軍軍楽隊などが演奏したり合唱するほか、同じ会場で開かれる精薄児の手芸品の慈善即売場には、野球選手やおすもうさんのサイン入り色紙も応援出品される。

私は、この報道を知って慈善音楽会の企画が容易ならぬ事態になったと恐怖に似た感情さえ芽生えはじめたが、じっと堪え得たことは大使の激励の賜でありました。

私は、ただちに次のようなお礼の手紙を日本文で差しあげたのです。

『謹啓、ご尊敬申しあげている閣下から早速、億倍にも余りある激励のご書面を賜り日本全国三〇〇万人の精神薄弱者の親、兄弟たちに代り心から御礼を申しあげます。

閣下のご厚意が一八日付の朝日新聞に大々的に報道されました。

全国の精神薄弱者の母親たちに百倍もの勇気を与えられたことと信じます。そして今後の生涯に光明を見い出し閣下の尊く神のような御心に対し感激の余り落涙しながら合掌して閣下のご健康をお祈りするとともに感謝申しあげていることと深く信じます。

私は、閣下の神のような御心に対し言語に表現できない感激を覚えました。

つきましては公務ご多端の折まことに恐縮に存じますが八月二二日、日比谷公会堂で午後一時から精神薄弱者自らも打楽器演奏や合唱をいたしますので、閣下始めアメリカ大使館員の方々とご家族も、ぜひ共ご来臨くだされ、不幸な子供たちを励まし、温かい御心で見守っていただきたく、真心こめてお招き申しあげます。

そして閣下の心の奥底にある日本における不快な想い出を拭い去っていただけるならば、非常に幸いなことと、大変身勝手ですが、一粒のような私の心で神にお祈りいたします。

なお、申し遅れましたが本公演には閣下のもとにご勤務中のシルバーバーグ書記官のご援助を賜り、アメリカ第五空軍軍楽隊員の皆様から数十名の出演演奏してくださる申出もいただきました。

また、閣下のお言葉のとおり各界各位から温かいご援助をいただきました。

とくに本公演については参議院議員山下春江氏、石田労働大臣、テレビタレント関屋五十二氏、歌手渡辺はま子氏から重ねての激励とご援助をいただき、もちろん当日は講演とご出演を

いただくことに決っております。

以上の次第で御座いますのでご繁忙のところ、まことに恐縮ながら当日の閣下のご都合の趣をご一報くださらば光栄に存じます。

右お礼とお願いを申しあげ閣下のご健康をお祈りいたします。

敬　具

一九六四年（昭和三九年）八月一九日

』

翌日の二〇日付で大使からの返書が使者によって上目黒にある公務員宿舎の私のところへ届けられました。

大使館から私宅までは自動車でも五〇分はかかったはずであります。

もし私の勤務する最高裁判所へお届けいただければ自動車で精々五分間以内で到着する距離であったのに……。

大使からいただいた返書は

『昨日いただきました貴殿のお手紙を拝見いたし感謝いたします。朝日新聞に掲載された私の書簡のことが、日本のちえ遅れの子供さんをもつ親たちに、いくばくかの勇気を与え、しかも、この手紙に、あなたが同感されたことを大変しあわせに思います。

私は、また、八月二二日の慈善音楽会にお招きくださることを深く感謝いたします。

ぜひ、お招きにあずかりたいと願うのですが、あいにく用事があるためにまいることができません。

私の代理として当大使館に勤務する文化面を担当するドロシーロビンズ嬢を出席させたいと存じます。

敬　具

一九六四年（昭和三九年）八月二〇日

』

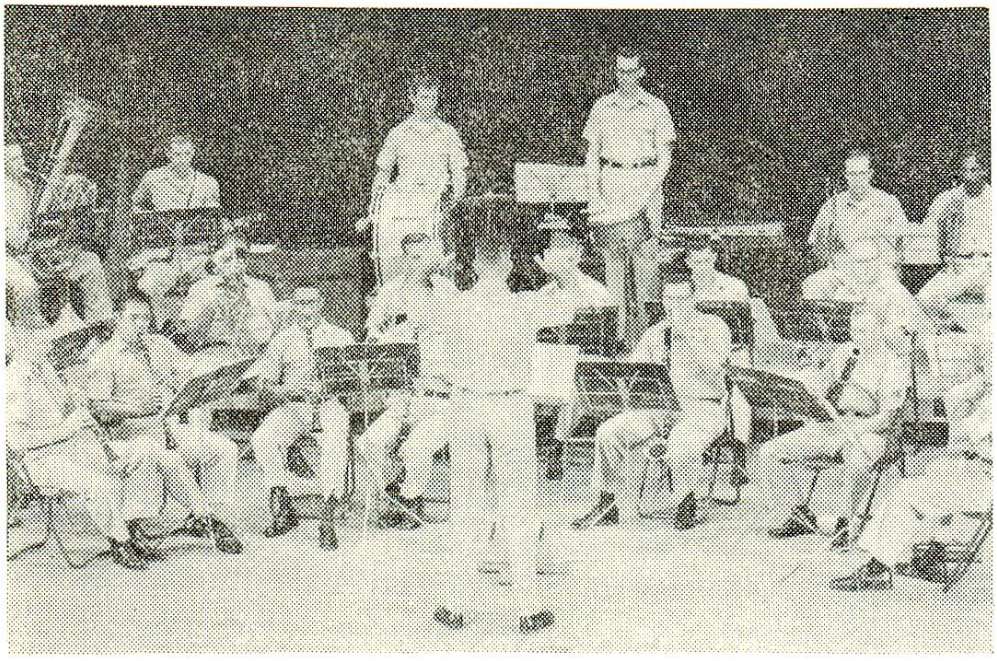
私は、早速大使館内の海軍基地武官室におられるロビンズ書記官を訪ねて、二二日に大使代理として臨席されることを謝し、大使から書簡をいただいたときの感慨と経緯を述べると

「それは、大使の武沢さんに対する礼儀でしょう。大使は、武沢さんを相手にされているのです。それで最高裁判所に持参させずに、あなたの自宅に届けさせたのです」

という説明を伺って、私は大使の公私を厳格に区別しながらの、温かいご配慮に感激を覚えました。

アメリカ大使館のシルバーバーグ書記官からのあっ旋をいただいたアメリカ第五空軍軍楽隊長から

「あなたのお仕事に、無料にて出演し、演奏できることは心から喜びにたえない。隊員も名誉に考えて当日を楽しみにしている。あなたのご成功を祈ります」



アメリカ第五空軍軍楽隊

という好意あふれるお手紙をいただき、そして当日はトメロイ中尉の率いる四〇名の音楽隊員が勇壮な曲と日本民謡の数々を披露してくださったのです。演奏を終ったトメロイ中尉は私を楽屋に呼んで握手を求めて

「本日のご盛会おめでとう」

と祝詞をくだされ隊員からも大きな拍子をいただきました。

話は前後しますが、音楽会の最大の難関は資金造りもさることながら、出演していただく歌手、楽団、司会者を選ぶ交渉でありました。私はかかる方々とは交際が浅いから到底その交渉の成功は望めないので、再び歌手渡辺はま子先生の事務所を訪ねて先生に相談に乗っていただきました。渡辺先生の

「東海林先生と相談して、なんとかしますから任せておきなさい。暑いとき忙しくて大変でしょうが体に気をつけておやりなさい」

と、やさしいお言葉に安心してお願いすることにいたしました。

そして数日後、渡辺先生から

「当日出演する歌手への交渉、楽団の選択、司会者への交渉等は日本歌手協会長の東海林先生と理事長の林伊佐緒先生のご英断で、協会が引き受け、その費用を一切無料奉仕するということに決まりましたから安心してください」

と、ありがたいご連絡をいただいたのです。

このときの私は体が宙に浮くような心境でありました。この大朗報のお蔭でプログラムの編成も無事に完了しました。

これ偏えに各位の温かいご理解をいただいた賜で、筆舌に尽せない感激を覚え、胸をふるわせたのであります。

公演当日ロビンズ書記官は定刻に来場されて、次々に行われる演奏が終るたびに大きな拍手を送っておられました。

特に鹿島育成園の子供たちが、渡辺先生とともに数々の合唱を行なうと、大きな体をゆする

ようにして拍子をくださいました。鹿島の子供たちにとって最高の喜びでありました。

終演になってロビンズ書記官の席へ行き、お礼を申しあげると

「ご盛会おめでとう、私に、非常に楽しい一日を与えてくださったことを感謝いたします。ライシャワー大使に、今日の音楽会が盛会であったことを報告いたします」

というお言葉をいただきました。

当日の音楽会は、長良英介氏の司会によって幕があがったのですが、そのプログラムは次のとおりでした。

ちえ遅れの子供たちを守るための

招待音楽慈善特別公演

とき　昭和39年8月22日(土)午後1時

ところ　日比谷公会堂

主催　社団法人ゴールド・ベル芸術協会
　　鹿島育成園恵松会

後援　厚生省、文部省、法務省、東京都、朝日新聞厚生文化事業団、N.H.K.厚生文化事業団、日本歌手協会、ソニーK.K、森永製菓K.K、カルケット製菓K.K、アサヒビールK.K、中外製薬K.K、近代映画協会、東京都を明るくしましょうの会、小田急百貨店、世界救世教

賛助　全日本精神薄弱者育成会

プ ロ グ ラ ム

第 一 部

司 会　長 良 英 介

1. 開会のことば……社団法人ゴールド・ベル芸術協会理事長…長谷川堅二

2. 歌と打楽器演奏……東京都立青鳥養護学校

おもちゃのチャチャチャ　山の音楽家、しあわせなら

出演者は東京都立唯一の精神薄弱者を入学させ高等科まで教育を施し、各種の技能を修得させて居り、音楽も重要な科程になつており、その成果を御披露いたします。

3. 合　　唱……江戸川児童学院

とんぼのめがね・海

出演者は通院施設で知能指数が非常に低いのですが音楽を通じ、発声方法、言語を理解させることに重点をおいて居りますことに御注目下さい。

4. 合　　唱……鹿島育成園成人寮有志（渡辺はま子合唱）

出演者は二重、三重障害をもつた重度の精神薄弱者で社会復帰も叶わず、家庭生活も営めない十八歳以上の者を福祉事務所の措置により援護収容し、特殊教育を忍耐強く毎日反復指導し、手芸、ブロック製造、農耕、料理実習、などを指導致しています。

(イ) みなと、ふるさと、赤とんぼ……伴奏　松浦千恵子

5. 歌 と 楽 器……金の鈴音楽院

(イ) 通りやんせ、ずいずいずつころばし、さくら、ハイヤハイヤ、しあわせなら、おいもほり

6. 挨　　拶

社団法人ゴールド・ベル芸術協会会長　石田博英

鹿島育成園恵松会顧問　山下春江

全日本精神薄弱者育成会弘報宣伝委員長　関屋五十二

7. 吹 奏 楽……アメリカ第五空軍々楽隊

アメリカ大使館および第五空軍広報部長の御好意と軍楽隊の奉仕によるものであります。

第 二 部

司会　三和完児

1. 民謡と踊……ふるさと社中

(イ) 秋田けんぱやし	唄	コロンビヤレコード 佐藤寿昭	踊	村上勇一
	〃	コロンビアレコード 佐藤雪江	〃	長谷川千恵子
(ロ) 新たんと節	〃	東芝レコード 赤石常勝	〃	中川光子
	〃	伊藤雄雅	〃	鈴木令子
(ハ) 津軽あいや節	〃	小松つる子	〃	荻節子
	三味線	小山貫	〃	外岡季子
(ニ) 秋田船方節	〃	高橋祐次郎	〃	長節子
	尺八	星天晨	〃	石原摩美子
(ホ) 花笠音頭	笛	斎藤金丸		

2. 歌謡曲

1) 夕焼け峠……ビクター　小高林太郎
2) 泣いてもいいぜ

1) 北上夜曲……ビクター　多摩幸子
2) 永良部百合の花

1) 青年の樹……ビクター　三浦洸一
2) 踊る
3) 八丈ごしやめん花

リズムゴシップ……三和完児

1) 雨のダンスパーティ……キング　林伊佐緒
2) 長崎の女
3) 真室川ブギ

1) 支那の夜……ビクター　渡辺はま子
2) ああモンテンルパの夜は更けて
3) 夜来香

楽団　レッドウイングオーケストラ

3. 巨人軍　長島、王選手提供のサインボール投げ込み

4. 閉会のことば……鹿島育成園恵松会長　武沢静雄

プログラム第一部合唱…鹿島育成園成人寮有志が終了したとき渡辺先生に対して、鹿島育成園々長藤原キミエ氏から花束を贈呈されました。

第二部開始前に、次の祝電が披露された。

武沢静雄殿

「ご盛会をお祝い申し上げます。」

読売巨人軍　選　手　一　同

読売巨人軍　王　貞　治

日本相撲協会　時津風理事長

「ご盛会を祝し今後のご発展を祈ります。」

読売巨人軍　長　島　茂　雄

第二部の渡辺はま子先生の歌謡曲が終ったとき

渡辺先生は

「今日は鹿島育成園の皆さんとご一緒に舞台に立って歌うことができまして本当によかったと思っております。どうぞ皆様もお元気で、これからも歌を覚えて元気にすごしましょうね」

と励まされました。

このとき、司会者の、鹿島育成園恵松会長の武沢静雄さん舞台の上へとのアナウンスがあって、林伊佐緒先生と渡辺はま子先生から、「これは、わずかですが何かのお役にたててください」と日本歌手協会から金一封の寄付をいただきました。

プログラムは順調に進み出演者全員による、読売巨人軍の長島、王選手からのサインボールの投げ込みが終って、この音楽会は無事に終了した次第です。

最後の幕がおりた瞬間、緊張感から解放された私の体は大海の彼方に引き込まれるような心地でありました。

公務員の身でありながら、つとめて、退庁後の時間など余暇を利用してした無謀きわまりない企画が、成功裡にその幕を閉じることができたのは、これ、みな、ライシャワー大使の激励とアメリカ厚木基地のステイビンズ中尉の篤行によって勇気を与えられたことはもちろんですが、一六団体にもおよぶ数多くの善意の方々のご好意と山下春江、石田博英両先生のご庇護の賜でありました。ことに、この音楽会には故池田内閣総理大臣から過分のご寄付を、直接に私が呼ばれていただいたのです。私は、これにもまた大きな感動を覚えました。

また、さきほど日本歌手協会を代表して林伊佐緒、渡辺はま子両先生から舞台上でいただい

た金一封を、当日招待された五か所の施設の子供さんたちのために、均等に配分してさしあげました。まことにこの上ない幸せでありました。

この催しに厚生省、文部省、法務省、NHK厚生文化事業団、朝日新聞のご後援を受け、池田首相とNHKから祝の花輪をいただいて、舞台の両脇に飾り、音楽会をさらに盛大にしていただくことができましたことは身に余る光栄でありました。

このほか、多数の会社からいただいたお土産品等は山と積まれ、招待した子供たちには持ちきれないほどでありました。

私は、この音楽会を開催したことによって世間の人々の善意の尊さを心に強く焼きつけられました。

誠意というものが、いかに大切であるかを、あらためて体得でき、これが私の生涯を通じての心の支えになることを信じて疑いません。

一九六五年（昭和四〇年）九月に所用があって鹿島育成園成人寮を訪ねたとき、千葉茂代指導員から子供たちが作ったという実に見事なタピボン刺しゅうを見せられました。

その出来ばえのすばらしさに目を見張った。

その刺しゅうはバラの花を配置し、子供たちが一針一針、忍耐強く長時間を費して、ただひ

たすらに刺したもので、よくその誠意が表われている、まことに貴重な労作でありました。
たとえ精神薄弱者が作ったものであろうとも、見る者に何かしらの感動を与える立派な作品であると感じ取りました。
〝正常な人間が作った物には、ときとしては欲望とか、羨望心などが、その制作の中にあらわれるものである〟と考える私には、このバラの刺しゅうはちえ遅れの子供たちが無心で作ったところに尊さがある〟と考え、これをライシャワー大使への記念品として贈呈しようと千葉指導員に相談したのです。千葉指導員と父兄は、ちえ遅れの子供が作ったものをと、記念品にすることをためらっていました。私は熱心にすすめて了承を得、これを東京に持ち帰ったのです。
千葉指導員が素直に納得しなかったことが気になって数日間その刺しゅうを手許においたのですが意を決して、のし紙に包装し「鹿島育成園のちえ遅れの子供たちが真心をこめて制作したものです。謹んで閣下に捧げます」と日本文字で書き、大使館に持参して、大使にお渡しくださるように依頼して帰りました。
それから一か月近くたった。大使から、なんの音沙汰がありませんでした。
ところが、初秋のある日、一〇月一九日付の英文の厚味のある大きな封書が私あてに届きま

Tokyo, October 19, 1965.

To: The Children of Kashima Ikusei-en

My wife and I were thrilled to receive from Mr. Takezawa the beautiful rug all of you made for us. I can't tell you how much we appreciate a gift you obviously worked so hard on and assure you we will treasure it forever.

We are deeply grateful for your kindness and send you our very best wishes in return.

Sincerely,

Edwin O. Reischauer

ライシャワー大使から鹿島育成園の子供たちへ礼状

した。それとなく心待ちしておりましたライシャワー大使からの書簡でありました。

早速書簡を開披すると四つ切大の写真と封書が入っておりました。

その写真は、私が、さきに持参した刺しゅうを大使ご夫妻がお立ちになり、手に持たれたお姿でした。

その写真の下の余白には

「鹿島育成園の子供さんたちのご多幸を祈ります」

という、まことにありがたいおことばが書き加えられてその上に、大使ご夫妻のサインもありました。

いつもの大使でしたら、ただちに返信をくださるのに不思議に思っていたのですが、かくも立派な写真をお添えいただけるとは夢々思ってもみま

せんでした。

さらに別の封書に「鹿島育成園の子供さんたちへ」と題して次のような感謝のお手紙が同封されておりました。

『あなた方が私たち夫妻のために、みんなで作ってくださった美しい刺しゅうのある敷物を武沢さんからいただいて、私たちは深く感動しました。

あなたがたが骨折って作られたことが、ありありとうかがえる尊い贈物を、私たちがどんなに嬉しく思っているか申し述べる言葉もありません。

私たちは、きっと末永く、いつまでも、いつまでも大切にしたいと思います。

ご親切まことにありがとうございました。みなさま方のご幸福を心から祈っております。

一九六五年（昭和四〇年）一〇月一九日　』

私は、大使ご夫妻の温かいお志を伝えるべく鹿島育成園に行って右の写真と書簡を子供たちに披露し、大使のお心をわかりやすく伝え、これからの生活、訓練にも大いに努力するようにしましょうと励ましたのです。

子供たちは、大使の温かいお気持を純真に感じとり彼らは喜びと誉れを表わして

「そのおじさんは、優しい人なの」

「そのおじさんは私たちのことを知っているの」
「私たちの作ったものを、ほめているんだよね」
と、目を輝かして、かわるがわる大使のことについて質問をするのです。
指導員たちの
「せっかく、大使からいただいた、ありがたいものだから写真と感謝のお手紙を額縁に入れて玄関に飾っておきましょうよ」
という提案に、彼等は大賛成で全員が拍手を送った。
私は、子供たちが大使ご夫妻に対して尊敬の念と憧れをいだきはじめたことを察知し
「あなたたちは、この写真の方に会ってみたいと思いますか」
と尋ねると
全員が手をあげて
「会長さん、本当に会わして……」
と真剣な意思を示したのです。

私は、大使ご夫妻を鹿島までご案内することは、到底、不可能でしょうから、許されるならば大使ご夫妻のお姿を8ミリ映画に撮影させていただき、子供たちに見せようと思いつきまし

た。動く絵ならば子供たちが、大いに満足してくれると考えたのです。
私は、断崖からとび降りるような気持で、全く暴挙といわれるかも知れないとおそれながらお願いの手紙を大使あてにしたためたのです。
つまり、子供たちのために8ミリ映画の撮影をぜひともご許可賜りたいということだったのです。
『謹啓　閣下から一〇月一九日付の子供たちへのお手紙と特別に撮影されたお写真をいただきご芳志まことにありがたくお礼申し上げます。
私は鹿島育成園の子供たちの生活記録を8ミリ映画に三カ年余撮り続けております。
先日閣下からいただいたお写真とお礼状は額縁におさめられて鹿島育成園の玄関に飾らせていただいております。
精神薄弱者と申しながらご厚志をくださった方への感謝と憧れから、閣下の動くお姿に接したいと熱望していることを彼等の言動から感じとりました。
ついては閣下ご夫妻が官邸を散歩されるお姿だけでも結構でありますから8ミリ映画におさめさせていただき、クリスマスの贈り物として子供たちに二重の喜びを与えていただけるようにご配慮くださることをお願い申し上げます。
政務、ご多忙の折このようなお願いは大変恐縮に存じますが、幸い薄い子供たちのために、

ぜひ共この願いをご許可くださることをお願いいたします。
万に一つご許可くださるときは、日時は閣下のご都合のよろしいときをご指定くださらば、まことに幸せに存じます
』

このような願望は、おおむね公務のため希望にそいかねるという口実で拒絶されてもやむを得ないと、なかばあきらめに似た心境でおりました。それは私の願いが、まことに意表外であったからであります。ましてや、その時期は不幸にして、ベトナムでは血の戦いが繰り返されていて、大使の公務は殊のほかご多忙であったはずであると察せられていたからです。

数日が過ぎたある日、最高裁判所の電話交換手から、アメリカ大使館から電話がかかっているからという連絡を受けて私は受話器に飛び付くと、日本語で

「武沢さんですね、一二月三日（金）午後一時三〇分に大使があなたにお会いするそうですが、お出になれますか」

という問い合せの電話でありました。

私は心をふるわせながら

「必ずお伺いいたしますから大使によろしくお伝えください」

と答えるのが精一杯で、放心状態になってしまいました。

しばらくして願いごとが叶った喜びに飛び上らんばかりの心境に戻り、体がフラフラとゆれているようでありました。

時間がたつにしたがってこの喜びは、世界的な高官に直接にお会いすることのかすかな不安におののくような気持に変りました。

大使が私の無謀に等しい希望をかくも寛大にお許しになるとは到底考え及ばなかったからであります。

私の願いをご許可くだされたのは大使の不幸な子供たちへの愛情と奉仕の精神から温い心をお与えくださったものと感激がこみあげてきました。

私は、この経緯を最高裁判所事務総長岸盛一氏（現最高裁判所判事）に申上げると同時に面会当日、大使にお会いする作法と心のおきどころのご教示をお願いすると

事務総長は

「率直に裸の心でよいではないか、大使のせっかくのご好意を無にすることなく、すべて誠意をもってあたることが大切だと思う」

と、いろいろと細かいご教示をいただきましたので私の心に余裕が生まれました。

私は、大使に面会する当日は妻にも同道することをすすめたが、妻は困惑し容易に承知しませんでした。

毎日家事におわれ、大使のような高官に面会する席にはべった経験もなく、かかるところに出席する着物も持ち合せていなかったことも妻の決断を渋らせている原因であることは容易に察せられたのです。

私自身も普段着の洋服で、妻の着物も失礼にあたらないものであれば差支えないだろうということで、やっと納得させることができて、この際、無駄な見栄を捨てて裸の気持で大使にお会いしようということに決めました。

一二月三日、いよいよ面接の当日、私は事務室にいてもなかなか落ちつくことができませんでした。

幸い上司から三時間の休暇をいただくこともでき事務室に待機していると大使館から重ねて電話がかかってきました。

「今日お約束の時間に大使のところに来られますか」

という電話問合せに

「必ずまいります」

と返事した時点で、やっと心の動ようが不思議にピタリとおさまったのでした。

いざ出発の時間になってもう一度自分に、落付けよ、落付け、ふだんのままでいいんだよ、裸で誠意をもって会うんだよ、といい聞かせたのです。

私たちは、約束の一〇分前に大使館に到着することができました。大使館の受付に来意を告げると

「大使は、あなたを官邸でお待ちしています」

と官邸へ案内される途中その受付の人から「大使に面会のときには兵隊か警備員が見張っているかもわかりませんからあしからず」という説明がありました。

私とは初めての面会でありますから、もちろんのことと思われました。ことに、さきに日本人少年による不祥事件があったばかりでもあり、加えて、私が8ミリ撮影機と写真機ならびに録音機を持参していたから厳重な警備をされることも当然ありうることと察せられたのです。

大使官邸に着き案内されて控室に入ったとき、ちょうど定刻五分前でありました。ここで待てば一時三〇分に大使ご夫妻が見えるからと受付係の方が教えて引きさがっていきました。その部屋は、私たち夫婦だけになってシーンと静かになりました。私たちにとって、この数分間の待機時間は一年のうちで一番長い時間に感じ、妻は恐しいから帰りたいと言い出す始末でありました。

時計の針が定刻一時三〇分を示したとき扉がサッと開かれ大使ご夫妻のお姿が見えました。

大使ご夫妻は、微笑をたたえながら私たちの方へ進んでこられ

「お……武沢君、よく来てくれました」
と私に握手を求められました。
私は感激に心ふるわせながら大使の手を固く握らせていただきました。
大使の温かい手のぬくもりが私の体の中を電光のようにかけめぐり万感胸にせまる感激は最高潮に達し、私の体はふるえていました。
大使は、妻にも握手を求められましたが、妻はうろたえ手を出しかねていたのです。
妻は、一介の公務員の妻の荒れ放題になっている手を差し出すのに気遅れがして一瞬、体中に冷汗をかいたと、あとになって述懐していた。
大使ご夫妻の面前で、もじもじとして落ちつかない妻を大使は
「奥さん、さあ、どうぞ」
と大使のお部屋へお招きのお言葉をいただきましたが
「大使からお先に」
と私が申しあげますと
「今日は、あなたたちがお客様ですよ。奥さんから先にお入りください」
と、まことに、ありがたいおもてなしに恐縮していると
「さあ、あなたも、お入りください」

と、入室をすすめられ、私、大使夫人の順で入室し大使が一番最後に扉を閉めて私たちに席をすすめてくださいました。私は、着席する前に

「これまでも、いろいろご配慮をいただいてありがとうございます。その上にこのたび、私のご無理なお願いをお聞き届けくださいましてありがとうございます」

と大使にお礼を申し上げますと、さりげなく

「まあ、まあ、お座りください」

とご愛想よく、くつろぎをおすすめくださいました。

応接室に入ったときからの部屋の感じは大使ご夫妻と私たち四人だけで、ほかに警護の人たちがいる空気は感じられなかったのです。この私達を信頼していただいていること、大使の無警戒の心と、大きな包容力に、私は驚嘆もし、敬服してしまいました。

大使は

「話はあとにして、先に写真を撮りましょう、光線の具合も大切でしょう」

と、先にお立ちになり中庭に案内してくださったのです。

「武沢君、今日はあなたの望みどおり撮って結構です。

武沢君の好きな場所へ行きますから、指示してください」

と私の気持をほぐしてくださいました。

私も大使の優しいご配慮のお言葉にあまえて、場所の選定をさせていただいてから、カメラマンになったような気持で大使ご夫妻に

「ここに立って庭の中の池のまわりを散歩してください」とご注文を申し上げると大使は

「はい、はい」

と答えてくださいました。

8ミリ撮影機をセットし終って

「では写しますから池のまわりを歩いてください」

と言ってシャッターをスタートさせようとしたとき、大使は大声でストップを命じられましたので、ハッと驚きました。

「武沢君、あなたたちも一緒に撮らなくちゃ意味がありません。どうぞ、ここに来てください」

と夢想だにしなかったお言葉に私はとまどってしまいました。

「私たちも大使と一緒に撮らせていただけるんですか」

「そうですよ、あなたたちと四人で撮るんです」

私は、遠慮は時間の無駄と考えて

「ではお言葉に甘えてそうさせていただきます」とご好意に甘えてご一緒に撮らせていただ

大使館官邸応接室にて面接

くことにしました。

幸いに撮影に詳しい補助者を一人同伴していたのでカメラの操作を依頼してカメラをスタートさせてから大使ご夫妻の側に近付いて行くと、大使は

「奥さん、私のように笑って写りなさい。俳優と違うんだから、よそ行きの顔をしても駄目よ」

その言葉を受けた妻は場所がらもわきまえず口を大きく開いて高笑いをしました。それから大使ご夫妻と気楽に言葉をかわせるようになった様子でした。

ハル夫人も、私たちに細心の心をくばられ、私たちの気持をやわらげようと、いろいろ話題を作ってくださいました。

そのようなお蔭でか、私たちは前からご交際をいただいているような気やすさを覚えるようにな

りました。
もちろん、この間ずうっとカメラのフィルムは回っていたのです。
大使は、私を中庭のあちこちへ案内してくださって私も遠慮なしに、フィルムを回し、撮り終ると新しいフィルムを入れて遠慮なく撮らせていただきました。
フィルムを新しく取替える操作しているときに大使と、かたわらの夫人との
「ハル、昨日は天気が悪いので心配したが、今日は天気が良くて助かったね」
という会話が私の耳に入ったので、大使が天候のことまで心配されていたご胸中を知って、いたく感激しました。
私が撮影場所を変えて撮影機をセットする間の待機中、大使は、いかにも楽しそうに口笛をふきながら芝生の雑草をつみ始められたので
「閣下は、そのようなことまでなさるんですか」
と私がおたずねしますと、ハル夫人は
「私が、やめなさいといっても駄目なんです。この頃は庭師も少なくなりましたね」
とおっしゃり、大使は笑いながら
「私は健康のためにやっているんです。武沢君によいものをお見せするから、いらっしゃい」
と案内されて指さされた。よい物というのは二〇年位はたったかと思われる鮮かに紅葉してい

た古木のもみじの盆栽でした。

「これは立派な盆栽でしょう……このようにするためには随分苦労したでしょうに……どの位たっているか武沢君わかる！　僕が治療のため虎の門病院に入院していたときに日本の方からお見舞にいただいた物ですから大切にしているんですよ、盆栽の手入れはむずかしいね」

私は、このお言葉を伺ったときに全身に冷水を浴びたような気持になって心が痛みました。日本人少年の不祥事件にあって長い日時をかけて闘病生活をされた大使の胸中を察したとき本当に申訳なく、ご免なさいと心の中でお詫び申し上げずにはいられませんでした。大使は

「虎の門病院の先生方も大変親切にしてくださったので元気になれたのです」

と病院をたたえ、日本人の見舞品を大切にされるお気持に尊いものを感じ、そのご寛大なお心に圧倒されてしまいました。

フィルムも終りになろうとしたとき大使は

「そうそう……さきにいただいた刺しゅうを武沢君たちと四人でながめている光景を撮ってもらおうよ」

とハル夫人をうながせられました。

ハル夫人は急ぎ足で部屋に戻られ、鹿島育成園の子供たちが作った刺しゅうを大事そうにお

大使ご夫妻とタピポン刺しゅう

持ちいただいたので、思いがけぬ撮影をさせていただくことができまして、この上もない光栄に浴した次第です。

このようにして、すべての情景は一部始終余すところなく8ミリ映画におさめさせていただくことができました。

また35ミリのスナップ撮影も同様に完全におさめることができましたのは、これひとえに大使の開放的で偉大なる包容力の賜であります。

その尊いご精神は神を畏敬する心からほとばしるものであろうと深い感銘を受けた次第であります。

鹿島育成園の子供たちの父兄会長である私を、なんら警戒するところなく、私の願望を叶えてくだされ、私の心を満たしてくださったのは大使が奉仕を尊び温い愛情の持主であることのお人

柄によるものと深い尊敬の念に、ただただ頭を垂れるばかりでありました。
大使は
「武沢君……どう、心おきなく撮れましたか」
と尋ねられましたので
「はい、お蔭様で……本当にありがとうございます」
「そう、じゃ部屋に戻りましょう」
と再び、さきの大使の部屋に私たちを案内してくださいました。
大使ご夫妻は
「武沢君……このタピボン刺しゅうはどうやって作られているんですか」
と尋ねられたので、指導員が下絵を書き、その手本を子供たちが一針一針刺すのですとご説明しますと
ハル夫人は
「これは何人位で作るんですか、本当に上手にできていますね」
「はい、子供たちは一人ないし数人で作っております。私たちに、これを作れと言われても忍耐心がないから到底無理なことです」
ちえ遅れの子供たちが精魂こめて製作したことが大変貴重なものと考えて閣下に記念品とし

て贈呈することにしましたとの経緯を申し上げましたところ
大使は
「本当に立派な贈り物をしていただいてありがとう。
ハンディキャップを持った子供さんたちが製作されたということに大きな意義があります。
その努力に感謝します」
と、その努力と出来ばえをたたえる温かいお言葉をいただきました。

大使は
「武沢君……あなたは、非常に宗教心が強い方ですね」
とおっしゃいましたので
「日は浅いですが、熱海市にある世界救世教の教えを受けております」
とお答えしますと
「それはよいことです。あなたたちだけが不幸と考えてはなりません。あなたたちに天が試練と苦悩とを与えられたことに感謝の気持で生活することが大切です」
と、お励ましくださいました。そして
ハル夫人も

「どこの家庭にも何らかの悩みごとのない人はありません」

と、また大使は

「あなたの子供さんに感謝し報恩の気持を忘れないで欲しい。勇気と自信をもって、親として、できる限りのことを尽してやることが、お互いが幸せに導びかれる結果を生むものです。ちえ遅れの子供さんたちはハンディキャップを持っていて毎日試練と闘い、努力していることを忘れてはなりません」

大使ご夫妻から温かい慰めと激励のお言葉を賜った私たちは、まことにありがたい教訓を得て幸福というものは美のほか真、善を求めることであり、災を転じて福となすという古来の教えがひしひしと私の胸をうちました。

日本の一裁判所職員夫婦が、幸いにも大使ご夫妻から、かくも親密にしていただくことができましたのは、私たちがちえ遅れの親としての苦悩と試練をあわせ持ったがためでありましょう。

大使ご夫妻から人の幸福を希う心の持主となることのご教示をいただき、そのことによって私たちの病める心がいやされ、奉仕の心がめざめ、悲しみを悲しみとすることなく、利他愛の精神が少しずつ芽生える発端となったのであります。

大使が
「武沢君……今日の目的は十分に果せましたか」
とおたずねになりましたので、私は
「はい、お蔭様で、私の望みは十分以上にみたされました。ご多忙のところ特別のお取計いをいただきまして本当にありがとうございました」
とお答えしましたところ
「そう、満足していただいてありがとう。私は明日から旅行に出るので用意もありますし、まだ勤務がありますから失礼させてもらってよいかね」
とおっしゃり、私も
「ご多忙のところ長時間まことにありがとうございました」
とお礼をのべたのですが、私には、ほかに満腔の感謝をあらわす適当なお礼の言葉を見出だすことができませんでした。
この日の面接は、実に二時間余に及びました。
大使とお別れして、ハル夫人に応接室で茶菓をいただきましたとき、同夫人は
「武沢さん！　大使との付き合いは遠慮せずに率直になさることがよいですよ、とかく日本の方はおっしゃることが遠まわしですから」

とご教示くだされ、そして

「例の少年は、どうしているかご存知ですか」

とおたずねいただき、私は

「あの少年は医療の必要があるということで、病院で治療を受けているはずでございます」

と、お答えしましたところ

「ライシャワーは刑罰を与えるよりも、むしろ少年の将来の幸福のことを心配しているんですよ」

とおっしゃいました。私はこのお言葉に、胸にジーンとくる熱いものを感じ、その場に泣き伏したい程の感動を覚えました。

私たちは、あついおもてなしを感謝申し上げて官邸を辞しました。大使夫人は、私たちの車が見えなくなるまで玄関に立って見送ってくださったことを運転手から聞かされて、あらためて夫人のご厚情に感銘を受けました。

一二月三日という日は、私たちにとって終生忘れえない尊い記念の日となりました。

帰庁後、東京地検を訪ね、ライシャワー大使傷害事件の担当検察官に面会して、差し出がましいようでしたが、大使のご心境を伝えましたところ、担当検察官も君は、よいことを知らせてくれましたと喜んでくださいました。

私は、未だ感激さめやらぬ一二月五日(日)、朝のテレビ・ニュースを見て驚きの声を発してしまいました。それは大使が動乱の地ベトナム戦線を視察されているとの報道だったからです。前々日の三日(金)、私たちとの面接のとき大使が

〃明日から旅行に出るから〃

とおっしゃられたのは、この視察だったのです。私は、〃明日〃が土曜日にあたることから大使夫妻が週末旅行にでもごお出かけになるものとばかり考えていたのです。私はテレビを見ながら、恥かしい思いで一杯でした。

大使はこの重責ある海外旅行を翌日に控えながらも、私たちのために長時間の面接と撮影の機会を与えてくださったのです。私はあらためて感激を覚えました。

そして数日を経た一二月なかばに、また大使館から電話をいただきました。

それは一二月二三日に

「大使の親しい方をお招きすることになっておりますが、あなたにもクリスマスの装飾をお見せしたいから官邸にお出になりませんかと、大使がおっしゃっております」

というお招きの電話でした。

「大使ご夫妻の親しい方が来られるのでしたら身分の高い方々がお出になるのでしょう。私たちのような者が、そのようなところに出席するのはどうかと思います。せっかくのご厚意

は誠にありがとうございますが、今回はご辞退させていただきます。大使によろしくお伝えください」と受話器を切ったのですが、翌日さらに電話をいただき

「大使の申されるには、そのように気遅れするような催し物でないから、着る物も平服で差支えありませんからご同伴でお出かけください」

と重ねてお誘いをいただきましたので、せっかくのご厚意をこれ以上お断りしては失礼かと思い、お伺いすることを約束いたしました。一二月二三日、官邸へ参上しますと大使館の夫人会々長さんが接待に出てくださって先に立って装飾会場を案内してくれました。一つ一つを説明してくださっているところへ、ハル夫人が見えて

「この装飾品は夫人会の方々の手製で、しかも廃品を活用したものばかりです」

と、そしてせっかくのクリスマスですから装飾に不足なものは大使夫人が自ら秋葉原商店街に買い求めに行かれたのだということもおっしゃっておられました。

何一つご不自由のないこのご夫人たちでしょうに、クリスマスの装飾に廃品を活用され、しかもその席に親しい人々を招待されるとは、全く想像も及ばないことでありました。

最近の日本人の生活の派手な振舞いに警鐘を打たれているようにも思われました。

大使夫人は、私が写真機を持っているのにお気付きになり

「会場で写真を撮っても結構ですよ」

とお許しをくださいましたが
「閃光球をつけないと撮れませんから、会場のふん囲気を壊わすといけませんので」
と申し上げますと
「結構です。撮りたいものがあったらご自由に撮りなさいよ」
私は、装飾品を全部撮らせていただきました。会場で写真機を持参していたのは私だけで、ちょっと引け目を感じましたが、会長夫人は
「記念に一枚撮ってください」
と申し出てくださり、助ったという気持が湧いているところへ、ほかの夫人たちもこられて撮影を求められましたので、さらに私の気遅れは少なくなりました。
大使夫人および夫人会の方々にそのご厚意を謝して辞去しようとしたとき、夫人会長から
「鹿島の子供さんたちへ衣料品その他のものを差し上げたいが受取ってくれますか」
と非常にありがたい申し出がありました。
「ありがたくいただきますが、どの位の量でしょうか」
とおたずねしますと
「二トン車に一杯位ありますから、あとからお届けいたします」
とのことでした。そして数日後届いた品物は、ダンボール箱につめられたかなりの量で、私自

身びっくりしてしまいました。

一二月二五日に鹿島育成園はクリスマスのお祝いを催すから、父兄会長の私にぜひ来てくださいという子供たちから数通の招待状をもらっていたので、夕刻に出席することにしてありました。

私は一二月三日に撮影させていただいた大使ご夫妻の8ミリ映画を、上映時間二〇分に編集を完了していたから、このフィルムを子供たちへのクリスマスのお土産として持参し、大使ご夫妻からのクリスマスのお祝いのお言葉の録音テープも同時に携行しました。

クリスマスのお祝いも進んでサンタクロースのおじいさんが沢山のお土産を子供たちへ渡し終ったところで、今度は会長さんからのお土産ということで、8ミリ映画を上映しはじめると子供たちは大きな拍手をおくったあと、かたずをのんでジーッとスクリーンを見つめていました。

その画面に私の姿が写るとオーと叫び、子供たちが作った刺しゅうが写ると、また拍手が起る、大使ご夫妻のお姿にはくい入るように見つめている、その姿は憧れの人に会ったという満足感を味っているようでもありました。映画を見終って喜んでいる子供たちの光景に私自身、よくぞ、この大任を果し得たものだと感無量でありました。

映画が終ってから録音機のスイッチを入れると、回わるテープから、まず、ライシャワー大使の

「鹿島の皆さんメリークリスマス、皆様お幸せに」

と、またハル夫人からの

「皆様メリークリスマス」

と大使ご夫妻のクリスマスを祝うお言葉が聞えてきました。このお言葉は、ことのほか子供たちの心に強く響いたようでありました。

一九六六年（昭和四一年）四月になって、日本の新聞の、ライシャワー駐日大使が辞任されるような報道が目につくようになりました。私は四月二五日付で日本文の手紙を大使あてに差し上げました。

『親愛なる閣下ご夫妻には、ますますご壮健のことと心からお喜び申し上げます。

最近の日本の新聞は、閣下が日本を去られ、ハーバード大学教授に就任なさる旨報道しておりますが、私のみならず日本国民は等しく良き理解者である閣下の離日を悲しんでいることと確信しております。

私は、さきに日本の良き教師として一日も多くご滞在下さることをお願いいたしましたが、

閣下のご希望と令夫人のご都合まで中止してくださいと希う勇気は持ち合わせておりません。
私たち夫婦が大使の官邸に二回もお招きを賜り、かつ鹿島育成園の精神薄弱者には温情と激励をいただきましたことに心から感謝申し上げております。
さきに、閣下からいただいた大使ご夫妻の貴重な写真は育成園の玄関に飾って、毎日子供たちへの励ましと、ご守護をいただいておる感がいたします。
つきましては、さらにもう一度、大使のご都合のよろしい日時にご面接の機会をお与えくださることを伏してお願い申し上げます。
私の身勝手をお許しくださって希望を叶えていただきたく存じます。
どうぞ現在も将来もともにご壮健でありますことを心からお祈り申し上げます。
とり急ぎ日本文でお便りいたしますことをお許しください　　敬　具
一九六六年（昭和四一年）四月二五日　　』

一九六六年五月にアメリカ大統領特別補佐官ドクター・バンディ氏が来日されたことによって、日本の各新聞はライシャワー大使の辞任は確定的であるかのように報道しました。
バンディ特別補佐官は五月二一日まで滞日されるということであったので、大使は公務ご多端であることは十分に推察されました。

私は四月二五日付の手紙の大使からのご返事をいただけるかどうか不安な気持で待っておりました。

バンディ特別補佐官が五月二一日に日本を離れたとの新聞報道がありました。

その翌々日の五月二三日、私の宿舎へ大使館から電話があったことを妻から知らされた。

それは

「大使が五月二七日(金)午後二時十五分にお会いになられますそうですが、ご都合を知らせてください」

という問い合せだったのだそうです。

私は早速大使館へ電話をして、日時等を再確認すると間違いなかったので

「当日は必ず伺います。大使によろしくお伝えください」

とご返事申し上げました。

大使は、寸暇も惜しい程にご多忙でございましょうに、私にこのようにご配慮いただけることはまことにありがたく感激の極みでした。

五月二七日のお約束の時間に、私たち夫婦が官邸に到着しますと玄関に人待ち顔の人が立っていて自動車の扉を開けてくださり

「武沢さんですね」

とお聞きになるや、すぐに大使の応接室に招じ入れてくださいました。
定刻二時一五分に大使ご夫妻が応接室に入って来られましたが、大使は、にこやかな笑みをたたえて
「武沢君、よく来てくださいました」
と握手を求められた。
私は、これが最後の握手になるかもと思うと、大使の手を離すのが、なんともせつなく、やるせない思いでありました。
大使に対して辞任という言葉は遂に最後まで出せないで終ってしまいました。
大使は、私の心中を察してか
「庭にバラが満開だから、そこで記念写真を撮ろう」
と中庭へ案内してくださいました。
満開のバラをバックにして、大使ご夫妻と私たち夫婦の四人の写真を数枚撮らせていただくことができました。
中庭から応接間に戻ったとき大使は朱塗りの地球儀の形をしたものを手にして
「武沢君、これなんだかわかりますか、これはラジオです」
とスイッチを入れられると美しい音楽が部屋中に流れ出しました。大使は

バンディ特別補佐官贈呈のラジオ（中央は藤原園長）

「バンディ特別補佐官が、これを君に渡して鹿島の子供さんたちにとお土産において行った」という説明がありました。

私はバンディ特別補佐官がどうして鹿島の子供たちのことを知っていらっしゃるのか不思議に思いました。おそらくライシャワー大使から聞かれて、このような贈り物をいただくことができたものと、お礼を申し上げ、バンディ特別補佐官へお礼状を差し上げるお約束をしました。

この日の面接時間は一時間三〇分でありました。

私は万感胸に迫る喜びの中で、このラジオはきっと鹿島の子供たちにお届けしますとお約束をして辞去しました。

私は、七月一日付でバンディ特別補佐官に

『謹啓　私は最高裁判所に事務官として勤務のかたわら、社会奉仕に微力ながら努力しており

ます。そのお蔭をもって駐日大使エドウィン・オー・ライシャワー閣下と一九六四年からご交際をいただくことができまして度々の激励とご厚情とご指導を賜り、茨城県・鹿島育成園の精神薄弱者は、私を通じ大使と心の交りをいただいております。

そのお蔭で鹿島の子供たちは輝かしい目的に向って日夜、作業訓練に励んでおります。

貴殿が来日されて、この子供たちに非常に立派なラジオを寄贈くだされたことをライシャワー大使から伺い、五月二七日に大使官邸においてちょうだいいたしました。ありがたくいただき鹿島育成園の子供たちに六月一二日確かに届けました。同封の写真はラジオを贈呈するときのものですのでご報告の印としてご諒承ください。

ライシャワー大使を通じてラジオを贈られたときは夢かと、その驚きと喜びは文言では十分に表現できないほどの感激を覚えております。

ちえ遅れの子供たちの親の代表として心から厚くお礼を申し上げます。日本の良き理解者であるライシャワー大使を通じて、貴殿のご厚意をいただいたことは子供たちにとってこの上ない喜びであり光栄であります。

右簡単ながらお礼を申し上げ貴殿のご健康をお祈りいたします。　　敬　具』

と礼状をお送りしました。これに対し、七月二一日にバンディ特別補佐官から次のような、大変ご丁寧な返書をいただきました。

THE FORD FOUNDATION
477 MADISON AVENUE
NEW YORK, NEW YORK 10022

McGEORGE BUNDY
PRESIDENT

July 21, 1966

Dear Mr. Takezawa:

Thank you for your thoughtful note of July 1. I am delighted that the children have the radio set, and it was more than kind of you to send me the pictures which tell of the occasion.

With renewed thanks,

Sincerely,

McGeorge Bundy

McGeorge Bundy

7月1日付の手紙ありがとうございました。子供たちがラジオ，セットを持っていることを嬉しく存じます。その催しを伝える写真を送つていただいた貴官の厚意は親切以上のものです

フオード財団理事長　マクジョージ，バンデイ

私は、大使ご夫妻がもし日本を去られるような、私どもにとって悲しいことになっても末永く日本を見守っていただきたいと願うとともに、現代の医学では、ちえ遅れの子供たちを完治することは不可能でも、私どもの誠意と努力とによって彼らを、より幸せにしてあげることは絶対に可能であり、私どもは、そのための不断の努力をつづけることを、大使ご夫妻に誓いつつ筆をおく次第です。

一九六六年（昭和四一年）七月に記す。

後記

―◇―◇―◇―◇―

◎大使とのお別れ

ライシャワー大使閣下は駐日大使を辞任されハーバード大学教授にご就任されることが決定、一九六六年八月一九日、羽田空港を飛び立ちアメリカにご帰国されました。

羽田空港控室で、お別れのご挨拶に伺うとご夫妻は

「今後とも鹿島の子供さんのために尽してください。アメリカへ帰っても日本風呂を備えておきますから、ぜひ、いらっしゃい」

と、いつもと変らぬこの温かいお言葉に感激し、ご夫妻が乗られた飛行機が日本の空から消えるまで、送迎デッキを去ることができませんでした。

―◇―◇―◇―◇―

◎博士との再会

その後、ライシャワー博士ご夫妻が昭和四五年一月に私用で来日された際に

「プリンスホテルに宿泊しているから、お暇があったら来られませんか」

とのお招きをいただきましたので、早速、お伺いしました。

ご夫妻はまず

「鹿島の子供さんたちは元気ですか」

Inscribed to my
old friend
Shizuo Takezawa
with appreciation for his
work for unfortunate children
Edwin O. Reischauer
Jan. 20, 1970

私の旧友武沢静雄氏の不幸な子供たちのための活動に謝意を表するとともに，署名の上この本を贈呈いたします。
1970年1月20日

エドウイン・オー・ライシヤワー

とお尋ねになられました。

私は、久しぶりに再会の機会を与えてくださったことにお礼を申し上げ、鹿島の子供たちも全員元気で訓練に励んでおりますとご報告申し上げました。

博士は

「これを武沢君に差上げます」

と、博士の著書「日本《過去と現在》」（昭和四二年五月㈱時事通信出版）をいただきました。

その著書右扉に、いかにも博士のお人柄をしのばせるかのようなゆったりとした、それでいて実に重厚味あるサインがあり、それは今もなお、永遠の輝を放っているのです。

慈善音楽会についてのご協力

一　慈善音楽会資金造成に対する協力

(1)　ふるさと・山下春江・石田博英・渡辺はま子

ふるさとの支配人くさむらさんから次のようなありがたい電話をいただきました。

秋葉原駅近くにふるさと越中店が新築落成して開店披露と同時に同店恒例の提灯会を行うということでありました。

当日は

「各界の名士が沢山見えるはずだから、その席上で音楽会の資金としてご寄附をお願いをしてみてはいかがですか。幸い石田博英先生が提灯会々長でもあるから先生にもお願いをしてみてはどうでしょう」

と大変ありがたいご勧誘をいただのです。

私は、早速衆議院議員会館の石田先生のお部屋をお訪ねすると、ちょうど先生が在室してお

られたので趣旨を申し上げ、ご出席を懇願しました。
石田先生は夕刻から秋田県へ旅行される予定があったのですが
「折角のことだから出席して提灯会に見えたお客様にご喜捨のお願いをしましょう」
と折角の旅行の予定を変更して出席のご承諾をいただきました。
さらに石田先生から、「そういう計画ならば、ぜひ山下春江先生と渡辺はま子先生にも出席をお願いしたらよかろう」
とご助言をいただいたので、その足で参議院議員宿舎の山下先生を訪ねて経緯を述べ、ぜひご出席くださることをお願いすると
「武沢さん、そんな場所でお金をくださいなんて言うの！、いやね、……でも、まいりましょう。あなたの情熱にかかっちゃ国会議員もたまりませんね」
と笑いながらご承諾してくださった。
渡辺はま子先生にも銀座の事務所に電話して早速、事務所へ駆け足でお伺いして、唐突なお願いを申し上げましました。
渡辺先生は
「あまり急なお話ね、歌を唄わなくてもいいのかしら」
「急なことでまことに申訳ありません、お体だけで結構ですから、ぜひともご出席になって

いただけませんでしょうか」
とお願いすると
「じゃ、体だけでお願いにまいりましょう」
とご承諾をいただきいました。三人の方のご承諾を得ましたので私は、ホッと安心しました。
それで、とりあえず月並みの募金箱を作ろうと考え、役所に帰って空箱を二つみつけて穴をあけて作り始めたが、うまくはかどらないで困っていました。これを見かねた女子職員らが
「とても見ちゃいられない、私たちが作ってあげるから任せなさい」
と、私の手から空箱を取りあげてたちまちのうちに、いろ紙などを貼った美しい、立派な募金箱を二つ作ってくれました。
私は退庁時間を待って、二つの募金箱と録音機を携えて「ふるさと越中」へ急ぎました。
そのとき空模様が、にわかに怪しくなって、ものすごいドシャブリの雨が降ってきました。
雨は路面をパチパチと叩きつけて洪水のようになりました。私は、こんな日に先生方にご無理をお願いしたことを申訳なく思いながら「ふるさと越中」で待っておりました。豪雨の中、まつほどに、まず石田先生が到着されました。
先生は笑いながら
「武沢君、君は僕のスケジュールを変えちゃうんだから、かなわんな」と言われたので私

は、身が縮む思いでした。穴があったら入りたいということは、こういうことをいうのかと思いました。

「武沢君、今夜は、どういう次第になっているの」

と尋ねられたが、私自身どういう次第になっているのか、さっぱりわからないので困っておりました。披露宴のお客様は満員になって、すでに着席されておりました。

山下先生と渡辺先生も相前後して到着されたので、ほとほと困っているところに、くさむら支配人が見えて、今晩の次第は私どもにお任せくださいと助け舟を出してくださったので胸をなでおろしました。

くさむら支配人からの説明で進行の次第を承知された石田先生はマイク片手に立ち上られました。

「実は私も三〇年前に大島の精薄者の収容施設の藤倉学園に勤めたことがあり現在もその施設の経営にあたっております。

ついては今晩ここに出席されている山下春江先生と渡辺はま子さんは、不幸な人々の施設を援助することに日夜お骨折りをしておられます。

近く日比谷公会堂にちえ遅れの子供たちを招待する音楽会を催する計画をもっております。

そのことについて、このお二人から今晩お集りの皆様にお願いがございます。お願いとい

うのはちえ遅れの子供さんたちへの募金運動にご参加をいただきたいのであります。
皆様は、幸いにして通常以上の頭脳と精神力とちえをもらって世の中に生れて、こういうめでたい席で酒を飲んでおられるわけでありますから運の悪い人々に対してのために後刻、募金箱がまわります。どうか神様から特別によく与えられた才能にかんがみて、恵れない人々に対してご喜捨のほどをお願い申し上げたいと思います。そのかわり、私たちもただではお願いいたしません。先程、渡辺はま子さんにお願いして「モンテンルパの夜はふけて」の懐しい歌を唄っていただくことにいたしました。
皆様は特別上等の劇場においでになって、いい椅子にすわると相当なものでございます。まして、お酒を飲みながら歌をうかがうのでありますから一流の劇場の一等席にお払いになる入場料にプラス・アルハーのご喜捨をいただきたいと思いますので、よろしくお願いいたします」
と、冗談を混えながらお客様に対してご喜捨をお願いの言葉を結んでくださった。
次いで、山下春江先生が立たれて
「今、石田先生からお話ありました精薄問題は、こういう席にはとても不向きでございますが、ちょっと、じめじめした話で恐縮ですがご勘弁ください。日本に、この不幸な子供さん

たちが現在三〇〇万人位いると言われております。その生れる原因は未だに世界的に発見されていません。医学が進んでいないときは遺伝だと言われておりました。現在も亭主関白の主人に

『お前の血筋を調べないで、お前をもらってえらいことをした。俺の血筋にはこのようなものはいない』

と言われ、矢もたてもたまらず家族が寝静ってから、ふとんをかぶって泣いている母が日本に三〇〇万人もいるわけです。

そのお母さんたちが国会に精薄者のための立法措置等について三年も四年も陳情されている姿をみまして本当にお気の毒であり、この運動を前進させてあげようということで私は、専門委員会の委員長を命ぜられて、初めて精薄の人たちを政治的に表街道で救済してあげる精神薄弱者福祉法を昭和三五年四月一日施行で世に送ったわけです。

それ以来皆様から大変ご理解をいただくようになったのですが、私がこのことに手をつけてみても大変なことがわかりました。知能指数35は白痴で、30・40は、ろ鈍ということで何もわからない。その白痴の子が物を作ることを覚え、物を生産する作業例えば国鉄の駅の売店で、ちり紙を売っております。普通の子どもたちは一〇〇枚ずつしばりなさいと言うと五つ六つ位は確実に数えますが、あとは手で押しつけて、ちょっと厚いようだ、ちょっと薄い

ようだと適当にたばねるから一二〇枚あったり九五枚であったりします。
ちえ遅れの子供さんが数えたのは全部一〇〇枚あります。一〇〇ほど抜き取って調べてみても一枚も違わないというよう作業をする、すばらしいことになっております。
そういう立派な施設がだんだん増設されております。
今、私のそばで録音機を持っておられる武沢さんは最高裁判所に勤めていますが、この方にも一人そういう不幸な娘さんがあって茨城県鹿島町にある施設に入れていらっしゃるのです。
私が今日お酒の席で
「こんなことを言うのはいやよ」
と言ったんですが、武沢さんの気狂いみたいな熱心な情熱にうたれまして
「それじゃ、恥をしのんで、お願いしましょう」
というのが本日私たちがお願いに参上いたした次第であります。
武沢さんは、昨年も渡辺はま子さんのご協力でチャリテイ・ショーをイイノホールで行い、当ふるさとの無料出演のご厚意をいただき、また巨人軍の長島、王選手の助けもあって大成功をおさめました。
今日、国が施設に対して金を補助しておりますが、道路を作るのに三兆円も使っております。その道路建設費用に追われている日本は、どうも精薄者の方には十分な資金をまわしてお

りません。したがいまして皆様にご無理を申していくばくかの資金を集め、施設に贈ってやることの積み重ねが必要なのであります。それによって子供さんたちが幸せになるのでございます。そのようなわけで野暮な話で恐縮でございますけれど、石田先生にお願いをして募金箱をまわすことにいたしました。そういうことで縁もゆかりもない、このふるさと越中の開店披露のときに皆様が心持ちよく酔いながらご喜捨を入れてくださるということが大切なんでございます。こういう席には本当に全く不似合いなことをお願いするご無礼をお許しくださいましてご協力賜りますよう、よろしくお願いいたします」

と懇願されるとともに私も引き立ててくださったのです。

次は渡辺先生の順番になったのですが、私は歌を唄わなくてもよいから出席してくださいとお願いした手前申訳なく、オロオロしておりました。

渡辺先生は

「もう覚悟しましたから安心しない」

と私をなぐさめるようにして立ち上られました。

私は本当に申訳なく平身低頭するばかりでありました。

渡辺はま子先生は

「今晩は皆様に本当にご無理をお願いすることになって申訳ありません。
私は参議院議員でもないし、代議士でもなく何んのお役にもたたないんですけど、ただ歌を唄うことによって、いくらかでもお役にたてばと思ってやっております。
実は八月二二日に日比谷公会堂で、ちえ遅れの子供さんたちのために音楽会を催しますので、その節はどうぞよろしくお願いいたします。
先程石田先生から、皆様からご寄附をいただいて、ただでは申訳ないから私に唄えというお話がありまして唄わなければならないことになりました。
実は、本日は唄うことを考えておりませんでした。こんなことになるんだったら伴奏者を連れてくるんだった。今、しまったことをしたと思って、大変気のきかない次第になりまして申訳ございません。皆様もお酒を召していらっしゃる。私も唄わないつもりでお酒を少しいただいたので顔が真赤になっております。ですが先程アナウンスがございましたので「モンテンルパ」の歌を唄います」
と言って「モンテンルパの夜は更けて」を伴奏なしで唄ってくださいました。
渡辺先生が伴奏なしでお客様の前で唄うのは、これが最初で最後だということを並木一路さんからアナウンスがあってお客様から大きな拍手が湧き起っておりました。
このように大勢の方々のご厚意が私の勇気をふるいたたせる原動力となったのでした。お客

様の中には私の手を握って「頑張りなさいよ」と激励してくださる方もございました。

募金箱は、お客様の中を滞りなく廻りました。

この日の開店披露宴のお客様は大勢で、同店の二階にもお客様がおられたので、石田、山下、渡辺先生は、その席へも伺って重ねてご喜捨をお願いしてくださいました。この日のお客様の温かい多額のご喜捨で募金箱は、ずっしりと重くなりました。

山下、石田、渡辺先生の温情もさることながら、見ず知らずのお客様からいただいたご厚情に深く感謝いたしております。

(2) 東海林太郎・渡辺はま子・(株)長島観光開発

渡辺はま子先生は慈善音楽会の資金造成についてご心配をされていたらしく

「音楽会の資金を作るの大変じゃない？　私もお手伝いしますから遠慮なくおっしゃいよ」

というありがたいお話しがありましたので、ぜひともご援助くださるようにお願いしました。

数日後、渡辺先生から

「土、日曜日に旅行できないか」

とお誘いの電話をいただきました。

渡辺先生のお話によると東海林太郎先生とともに三重県の㈱長島観光開発に行って、そこでゲスト出演する予定があるということでありました。

そのときに、長島観光開発の社長（服部知祥）さんに会ってみないかというおすすめであった。

「もし、武沢さんが行けるなら服部社長に連絡をとります」

というお話なので、私は

「ぜひとも、お願いします」

と、ご返事を申し上げて東海林先生と渡辺先生とともに同じ列車で名古屋に向いました。
東海林先生は大きな旅行かばんを持っておられたので、私が運搬を引き受けると大変恐縮しておられた。
長島観光開発に到着すると、服部社長が、わざわざ東京から来られて私たちを待っておられるということでありました。
早速、応接室に伺うと社長始め役員の方々が私たちを待っておられた。
東海林、渡辺両先生は
「武沢さんが八月二二日に日比谷公会堂で慈善音楽会を開くために東西奔走しているんですが、その資金作りも思うようにはかどりません。どうか長島観光開発もご協力してくださいませんか。社長、よろしくお願いします」
と、音楽会の計画内容も付け加えて説明してお願いをしてくださった。
服部社長は
「役員とも、よく相談しましょう」
と後刻あらためて再会しましょうということでありました。
ひとまず部屋で休憩しようと、東海林先生は私を相部屋にしてくださった。部屋の鍵をもらって休憩する部屋に行くエレベーターの中で、東海林先生は

「今日は武沢君に重い荷物を持ってもらって大変お世話になったから今晩は私がご馳走しますよ」

と言われました。私が先生の荷物を運搬したことを、そんなに大事に思われるのは歌謡界の大御所ともなれば小さい厚意も大切になさるものかと感心してしまいました。

部屋に入った東海林先生は暑いからシャワーを浴びようと裸になられて

「武沢君、僕の腹を見たまえ、手術の傷跡だよ」

先生が直腸ガンであることは、かねがね伺っていたが、数条の切開手術の傷跡があるとは予想もしなかったことでした。

「こんな体になっても唄っておれるんだから幸せですよ。これで七〇歳まで唄われたら、なお幸せだね」

と、さりげなくおっしゃった。

服部社長から再会のご連絡をいただいて応接間に行ってみると、役員の方々も同席されておりました。

服部社長は

「当社も、その音楽会にご協力することに決まりました。まず、東海林、渡辺両先生は舞台からお客様にご寄付を訴えてください」

とご承諾をいただきました。東海林、渡辺両先生は舞台からお客様に寄附を願ってくださるお姿を私は感謝の気持で見つめておりました。

長島観光開発でも早速、趣意書を書き、そのうえ募金箱も作ってくださったお蔭で入場されていたた沢山のお客様からの募金をいただき大きな金額に達しました。そのお恵みに私は救われたのであります。

長島観光開発の服部社長さんからも貧者の一灯ですということで特別に金一封を賜りました。

そして引き続き募金箱を玄関先において趣意を訴えつづけてくださるというお取計いをいただきました。重ねてのご厚情に感謝の念で一杯でした。

二　慈善音楽会に対する協力

(1)　日本相撲協会・水谷八重子・森繁久弥・日本歌手協会・喜劇人協会

私は日本相撲協会を訪ね、そのときの理事長であった時津風（元横綱双葉山）親方に、私たちの慈善音楽会開催の趣旨と、それに対して、もし関取各位の手型を押したサイン色紙を寄附していただけるならば、音楽会当日に即売会を開いてお客様に買っていただき、その金を施設の資金にまわしたいと、説明してご協力をお願いしましたところ理事長は言下に承諾してくださいました。

そして柏戸、大鵬の両横綱と大関ほか三役力士の手型を押したサイン色紙を沢山ご寄附していただきました。それは運搬に困るほどの枚数でありました。

水谷八重子先生宅へ伺ったときは、先生は初対面である私に気さくに会ってくださいまして、協力をご承諾してくださいました。

「私だけでは心細いでしょうから、娘の良重にも協力させましょう」

と、ありがたい引き受けの言葉につづいて
「よいことは、一生懸命におやりください」
と激励してくださいました。

私は水谷八重子さんの激励に勢いを得て、更にベテラン俳優の森繁久弥さんにサイン色紙をお願いしようと決心して石田博英先生にご紹介をお願いしました。
石田先生は
「今晩、森繁君はＴＢＳ放送に出ているはずだから、放送が終ったら連れて行く。ふるさとで待っておりなさい」
ということで私はふるさとに待っておりますと石田先生と森繁先生がご一緒に見えられました。
私は、もちろん森繁久弥さんとは初対面でありましたが、石田先生は
「森繁君、武沢君に協力してやってくれないかね」
「武沢君、音楽会をやることは結構だが素人のあなたがやって大丈夫なんですか」
と尋ねられたので
「もう、あとにひけないことになっていますので、俳優さん方からサイン色紙をいただけるようにご協力をしてください」

とお願いすると、石田先生が

「武沢君を助けてやってくれよ、森繁君！」

と口添えをいただきました。

森繁先生は

「よろしいです。色紙でよいのならお引き受けしましょう。池内淳子君などにも話して全面的に協力しましょう」

と快諾してくださいました。そのお蔭で芸能人の方々からサイン色紙を沢山ご寄附をいただくことができました。また、日本歌手協会および日本喜劇人協会の方々からもご協力をいただき多くの歌手の方、喜劇人の方々からサイン色紙のご寄附を賜りご厚情まことにありがたくお礼申し上げます。そのご芳名は次のとおりですが、順不同、敬称を略させていただくことをお許し願います。

水谷八重子	春日八郎	島倉千代子	三木のり平
森繁久弥	大江美智子	石原裕次郎	藤本二三代
東海林太郎	淡島千景	小林旭	浜田ゆう子
渡辺はま子	水谷良重	木の実ナナ	松尾和子
林伊佐緒	池内淳子	三浦洸一	伊藤ゆかり

勝　新太郎
水島道太郎
川地民夫
船越英二
長谷川裕見子
鰐渕晴子
南　かおる
谷　幹一
フランキー堺

スマイリ小原
北大路欣也
仲宗根美樹
ペギー葉山
津川雅彦
井上ひろし
佐伯孝夫
小宮恵子
金田星雄

平田昭彦
久我美子
高橋英樹
楠　トシエ
中尾ミエ
榎本美佐江
丘　さとみ
左　とん平
由利　徹

平　凡太郎
堺　駿二
南　利明
江戸家猫八
人見　明
佐山俊二
谷村昌彦
村田正雄

(2) 読売巨人軍

慈善音楽会当日に有名人のサイン色紙の即売会も行う予定でしたので、読売巨人軍の事務所に佐々木代表を訪ねて巨人軍選手のサイン色紙の寄贈をお願いしました。

佐々木代表は、ご多忙のご様子でありましたが、私の趣意をゆっくりと聞いてくださった。

「それは大変ですね、しかも、この暑いさなかですから御苦労が多いことでしょう。体を大切にしてがん張ってください。巨人軍から、長島、王選手の色紙を特別に作って寄附しましょう」

長島、王選手の色紙には特別にプロマイドを貼ってあげると、まこと夢のような温かい代表のお言葉に私は暑さなど吹き飛んでしまいました。代表はさらに

「ほかの選手のサイン色紙もあればいいんでしょうか」

「はい、ぜひともお願いします」

「それじゃ、巨人軍の試合日に後楽園へ行ってください、私から現場の方へ話をしておきます」

と、まことにありがたいお話がありました。試合当日に勇躍、後楽園へ行くと球場事務所員

は、すぐに巨人軍の山崎マネージャーを通じて川上監督を紹介してくださいました。川上監督と山崎マネージャーに面会して事情をお話したところ、もう、お二人の方はすでにそのことは承知しておられて、巨人軍の試合日の三日間、私は選手控室に自由に入ることを許されました。川上監督始め巨人軍選手の皆さんからサイン色紙をいただけるという大きな幸運を与えていただいたほか三日間、後楽園へ通って球場内で写真撮影をすることも許されたので、写真機に望遠レンズをつけて選手各位のユニホーム姿をパチリパチリと撮らせていただきました。長島選手などは裸で食事をしているところだけは撮らないでと冗談を言っておられました。

長島、王、北川さんとは、前々から顔なじみであったので、大変助りました。北川選手は暑くて大変でしょうと冷たい飲みものまで心配してくださいました。

この際に長島、王選手に両選手のサインボールを音楽会の終りに投げ込みたいという計画があることを話して、お二人にサインボールの寄附をお願いすると、お二人とも、快よく承諾してくださった。このご承諾によってサインボールを投げ込むことをプログラムに加えることもできるという幸運に恵れました。巨人軍の皆さんの温かいご理解によって望外な贈り物を与えていただいたことに深く感謝いたしております。

佐々木代表からプログラムに、巨人軍のことは印刷しないようにというご要請がありましたので、そのお言葉に甘えプログラムに巨人軍後援という掲載は省略させていただいた次第でし

た。

色紙をくだされた川上監督、および左記の選手の皆さんにあらためて感謝申し上げます。

長島茂雄、王貞治、藤田元司、森　昌彦、国松　彰、柴田　勲、北川　芳男、宮田正典
藤尾　茂、須藤豊、高橋　明、広岡達朗、伊藤芳明、船田和英、城之内邦雄

三　慈善音楽会の挨拶

ゴールド・ベル芸術協会理事長長谷川堅二氏の挨拶

会場の皆様に一言ご挨拶を申し上げます。

本日はご多用中にもかかわらず暑いさ中に大勢のお客様をお迎えしまして、まことにありがとうございました。

この音楽会に招待いたしました施設の生徒さんたち、ならびに付添いの方々、諸先生には大変ご苦労をおかけいたしましたことを厚くお礼申し上げます。

さて、われわれ芸術家が集りまして社会事業をいたそうとするゴールド・ベル芸術協会は終

戦前に金の鈴こども会と申しまして、子供の音楽の団体でありました。

ところが戦後は、これを拡大いたしましてこのような組織にもってきました。そして細々ながら社会事業のために尽してきたのであります。

皆さんもご存知のように日本の社会事業あるいは福祉施設というものは貧弱そのものでして、貧弱と申しますのは数が少ないということでありまして、ここに働いていらっしゃる指導員の皆さんは大変ご苦労を担っているのであります。

これはわが日本が貧乏国であるかどうかは私は政治家でありませんからわかりませんが社会事業あるいは福祉施設ということについては関心が薄いということがわかるのであります。

幸いにゴールド・ベル芸術協会の会長である石田博英先生は現在労働大臣の要職にあります。会長は若い時代、すなわち学校を卒業しまして社会事業に身をていしてこられた方でありまして、わが政界においても社会事業についてはご理解のある第一人者ではないかと私は思っております。

私たちは石田先生を会長にいただいております関係でわれわれ芸術家たちは、ますます、この道に精進いたしたいと思っております。

終りにあたり本日の音楽会に、いろいろご支援くださいましたアメリカ大使のライシャワー閣下にお礼を申し上げます。

また、沢山のお土産をくださいました諸団体の皆様方にも厚くお礼を申し上げる次第であります。

これをもって開会のご挨拶といたします。

ゴールド・ベル芸術協会々長石田博英氏の挨拶

本日は私どもの社団法人ゴールド・ベル芸術協会と鹿島育成園恵松会（父兄会）の共同主催で、この音楽会を催しましたところ沢山お集りをいただきましてありがとうございます。

また各方面から非常にご厚意あふるるご援助をいただきましたことも併せてお礼を申し上げます。

私は今から三二年前の、昭和七年に伊豆大島にございます精神薄弱児の収容施設である藤倉学園というところにお手伝いにまいりまして以来この問題にずうっと関係をいたしてまいりました。

その間を通じまして私が体得した信念は神様は決して、どんな人からも、すべての才能を奪わないということであります。

何か優れたところ、何かいいものを必ず持っているのでありまして、それをわれわれが伸ば

し、引き出し、成長させていくことが大切であるということでございます。
この運動は、まだまだ、ほんの出発点に立ったばかりでありますけれども、しかし三二年前とくらべると大変な違いであります。
どうか皆様を通じて世間の理解と協力を得て、不幸な子供さんたちに神様が与えてくださった何かの才能を引き出して、そうして、その子供さんの将来を明るくすると同時に社会に何か残して行くようにしてみたいと思っております。
本日は本当に沢山お集まりいただいたことと各方面のご協力に重ねてお礼を申し上げましてご挨拶にかえる次第でございます。
どうもありがとうございました。

鹿島育成園恵松会顧問山下春江氏の挨拶

本日は茨城県鹿島園育成寮の子供さんたちの父兄が大変お骨折りになりまして、この会が持たれることになりましたところ、お暑い中を大変多数お出かけくださいましてまことにありがとうございます。
ちえ遅れの方たちのための福祉法を三五年四月に施行しましたところ、皆様から大変温かい

ご理解をいただくようになりました。

国家予算もつけてもらうようになって沢山の施設や学校ができるようになって本当にありがたいことだと思います。

本日の音楽会のためにはふるさとというお店の開店披露宴に、石田先生、渡辺はま子先生、私とがまいりまして、本日の公演資金のご喜捨をお客様にお願いしましたところ多額の基金をいただきました。

そのほかに多数の方々から沢山のご厚意に助けられまして本公演の運びとなりましたことを深く感謝いたします。

これというのも父兄の方が酷暑の中で大変ご苦労なさった賜と深く敬意を表します。ことに父兄代表の武沢さんが最高裁の職員という多忙な仕事をもちながら身をもって足をすりへらして一生懸命やられた結果でございます。

本当に感謝感激でございます。

どうか皆様方も今後とも、これらの仕事に対して温かいご理解とご同情を賜りますよう私から、くれぐれもお願い申し上げます。

関屋五十二氏の挨拶

労働大臣の石田先生、参議院議員の山下春江先生から、いろいろお話がありましたから、私からは何もいうことはありませんけれども一言だけ話したいことがあります。

ほかの人ほどものがわからない、ほかの人ほどものができないということは決して馬鹿ではありません。

馬鹿というのは、いろいろ教えてもらって、覚えようとすれば覚えられるのに、それを覚えようとしない人のことです。

自分が他人よりよくわからない、自分はよくできないということを恥かしがる、これも馬鹿です。

自分ができないから、わからないからって恥かしがる人は大馬鹿です。

自分よりも、ほかの人の方が、ものができない、ほかの人の方が、よくものがわからないということで、その相手の人を馬鹿だ馬鹿だという人があれば、その人より、もののできる人、その人よりも、もののわかる人から、馬鹿と言われても黙っていなければならないと思います。

もし、頭がいいの、ものがよくできる、よくものがわかるということが馬鹿でないということになれば今地球上に三〇何億という沢山の人が住んでいる。その中で馬鹿でないという人は、たった一人だけです。

二番目からは馬鹿になる。

ですから私たちは、いま言ったように、ものができないとか、わからないとかいうことは馬鹿じゃないんです。

でも、そのかわり私たちが、勉強して覚えられるのにうっかりして覚えようとしなければ馬鹿になります。

できないことを恥かしがれば馬鹿になる。

それをごまかそうなどということになれば大馬鹿になる。

これは誰もが気をつけなければならない。

どうぞ、そのことを頭に入れて、この日本中に馬鹿の人が一人もできないようにお互いに手を握りあって助けあって、できない人には力を貸して、わからない人には、いろいろ教えてあげて皆んなで仲よく日本中に一人の馬鹿もできないように一生懸命に骨をおりましょう。

光の家建設の夢

「光の家」建設の夢

鹿島育成園成人寮に昭和三七年三月に入所した子供たちは、あと四、五年たつと三〇才を超えちえ遅れというハンディキャップを持っている体質として体力がおとろえて作業訓練の能率が低下することは間違いない。そうすると寮生の間の体力のアンバランスから生ずる指導員の配置、労力の過重等、施設運営上複雑な問題が起ってくることが予想されました。

各父兄間にも自分の子供が高令になれば退寮を勧告されないかという心配がありました。

社会福祉法人全日本精神薄弱者育成会を訪ねて子供たちの高令化対策をただしたところ今すぐ退寮させるようなことはないだろうというありがたい御返答をいただきました。

我々父兄は、親の生命があるうちに子供たちのために何んらかの形を残したいという意見が出始め、それならばと父兄会総会を開催しました。

その父兄総会において

一　「光の家」を増築させていただくこと。

二　その資金は各自の資金拠出と募金によってまかなうこと。

三　施設増築ができた場合はそこへ高令者を収容援護をお願いすること。

四　あいたところへ若い者を順次入所させる。

ということが議決されました。

この議決を生かすために、またまた、山下春江、石田博英、東海林太郎、渡辺はま子、林伊佐緒各先生にお願いして、募金の趣意書の発起人になっていただきました。

この趣意書を添えて昭和四四年二月二七日付、東京都知事あてに募金許可申請をしました。そして昭和四四年三月八日付で（募金許可番号四四第四八号・募金の方法、会社、法人、団体及び一般個人に趣意書を配布し、賛同者から任意の寄附を募る）募金許可書をいただきました。私たち父兄は、ただちに募金趣意書を、郵便で各方面に配布しました。私たちの唐突な御願いに対して数多くの方から温かい御志を（金百二十万円）賜りましたことを厚く御礼を申し上げます。ご芳名を左記のとおり掲載させていただきますことを御寛恕を賜りたく存じます。

記

職域関係の諸先輩ならびに各位の寄附ご芳名（敬称略、順不同）

五鬼上　堅　盤　裁判官室に私を呼ばれて「誰かが、やらなければならんことだから、体を大切にしてやりなさい」と励してくださいました。

松　本　正　雄　よいことだから勇気をもって一生懸命におやりなさいと励してくださった。

城　戸　芳　彦　最高裁判事ご在官中「うちの家内から」だとおっしゃって毎年クリスマスの寄附をしてくださいました。

城戸智恵子

岸　盛　一　たびたびの寄附をいただいたほか、奥様からクラスメートの方々との寄附は十年以上引続いていただいています。

岸　叡　子

奥野健一　大野六之丞　荒木登　田村清八　大久保昭
内藤頼博　服部一実　倉田武夫　高橋寿一　作間輝雄
内藤董子　堀田勉三　江藤和生　田中武夫　最高裁調査官有志
関根小郷　保持道信　坂根勇　湯田明宣　東京家裁会計課有志
安倍恕　恒次重義　佐藤真　中里範忠　最高裁交換手有志
矢崎憲正　中村充治　佐藤元一　増田康明　最高裁運転手有志
矢口洪一　中山忠男　森馨　佐古敬助　最高裁理髪室有志
田宮重男　長沢一　矢村靖　菅野宗助　最高裁庁務員有志
寺田治郎　飯島泰二郎　小松弘二郎　菅野俊四郎　八木力三
中野次雄　成田貞義　白岩四郎　内田卓二　水野勇
長井澄　新村武十郎　下藤正　菅野浅治　向山隆
大内恒夫　岩永秀治　鈴木俊吉　河口章子　向山なみ子
今中幸次郎　宇都宮綱久　瀬戸川誠一　大内正
鬼沢末松　金田耕作　竹内種蔵　大内タニ子

寄附金のほか物品寄附のご芳名

㈱コクヨ　東京支店長の温かいお取計いによって社内奉加帳を作っていただき支店社員の皆様から二年間にわたって寄附をいただきました。

三波春夫　長いお付合いをしましょうという直筆の手紙が添えてありました。

㈱リコー　市村社長から私のポケットマネーですと多額の寄附をいただき、さらに同社製作の発声映写機を寄贈いただきました。

㈱高羽　鹿島育成園の子供たちへ作業衣、外出着を贈るため現地へ出張して寸法をとって一人一人に合うものを作ってくださった。

日本相撲協会　お相撲さんの手形色紙のほか、度々寄附金をいただきました。

一般個人、会社、法人の寄附ご芳名

アメリカ輸送司令部　浅野利治　射場和子　市村常代　飯島十三子

走木令子　新井誉子　猪塚万三　伊藤三郎　池上碩郎

荒木リツ子　秋元美代子　石原肇一　五十嵐信一　五十嵐きよ

新井かほる　相沢しず　榎本清一　石井秀男　石井秀雄

荒木たま子　東茂男　市川きん　市川誠四郎　岩井いの

東梅子　安藤ツル　岩月積輝　市川タツ　伊藤つた

阿曽勤　青木金吾　遠藤とみ子　市川清光　石田政治

安東みや　秋山てる子　岩崎きよ　石原肇一　池田五作

秋葉良雄　石井今朝之助　諫山照子　板橋すぎ　板橋社会福祉協議会

岩村公子
市川節子
伊藤憲太郎
遠藤アサ子
井戸武治
受川句子
内山キヌ枝
梅沢美恵
宇田川幸子
上野勝弘
上野丹三
榎本清一
大森嘉幸
大野源太郎
尾山台ナザレン幼稚園

（クリスマスに毎年多額の寄附をいただく）

大江波満子
岡田成敏
太田栄子
小沢滋雄
大島定晴
大原ツユ子
大埜邦子
奥津京子
小沢英司
大竹康介
奥村伊作
小笠原はつ子
小木曽ちよの
大坪秀吉
岡　梅一郎
大村恒子
大友ナツ子

奥田シロ
大森留吉
太田美津子
太田和子
㈱飯島商店
㈱日新事務機
㈱三菱銀行
㈱堀井謄写堂
㈱第二印刷
㈱くろがね
㈱トーワ事務器
㈱山田金庫
㈱松田運送店
㈱アンドーカード
㈱土木田商店
金子ソメ
川鶴いく

上妻三枝
佳葉会
加藤和子
釜谷勝伍
河西嘉一
金川正直
柏倉ちか
鹿島育成園指導員一同
河西花子
加藤精一
金子久米
金子染子
金子こと
川向武夫
川島定次
金子たけ
金子久米子

柏倉ちよ
金子栄子
金子ツメ子
川島製作所
川田とり
亀田松助
岸本のり子
岸上マキエ
木村幸子
菊地直行
銀林　郁
木村とき
木村綾子
窪田千代江
栗村ひさ
慶　文子
黒田ふじ

栗林道代
熊坂久子
郡司きよ
沓野みの乃
黒田民子
工藤三行
久保正彦
黒岩貴三
近藤泰明
五明明
近藤咲子
小林幸子
小林秀子
小坂洋輔
小坂信子
小曽木ちよ
小堺きよ子

小久保良子
小坂運次郎
近藤君江
五野井三千代
小久保三重郎
小西清平
小西利枝
小西由枯
小坂春雄
佐藤一英
坂本延子
佐野光枝
佐藤一
斎藤武雄
桜井周三
佐野良子
佐野吉司

佐藤照勝
佐野征一
佐野三津夫
佐野昭英
坂本貴助
坂上勝次
斎藤守
斎藤ひさ子
佐野春夫
佐直きみ
斎藤国芳
坂本里美
佐藤文
佐藤勝生
佐久間正夫
五月会
佐藤敏一

榊幹雄
坂本延子
斎藤岩雄
財団法人ゴールド・ベル芸術協会
篠崎咲子
篠鐘松
篠ひで
下山みつゑ
品田きよ
七野敏子
下村良子
清水武彦
清水希維子
島村祐世
杉山しげ子
末房譲次
鈴木直夫

鈴木田鶴子
鈴木繁子
鈴木富士代
世界救世教光陽教会長
世界救世教市川支部有志
世界救世教富士見支部有志
関根隆重
関根洋士
関根雅之
曽我繁三郎
武田愛子
武沢敏子
高橋つや子
高木美恵
高岡喜久子
高橋勝栄
田川秀雄

谷浦英男
高橋アキ
高林吉乃輔
高安かつ子
多湖勇吉
田中きよ子
高野千代
辰野みの乃
田村よし子
田中ちよ子
田島　衛
醍西朋金武
月居美保子
鶴岡喜代
綱谷静子
土井静子
都築一二

富田善治郎
富岡静江
利根川冬義
中井きみ
中島勝子
中島良策
中馬靖友
永野善吉
中野喜代七
中島幸子
中島シン
裵　かよ
中島旅夫
中沢ちゑ子
中村鉄工所
西原弘之
西尾みゆき

根本秋友
根本より子
野崎新八
野堀忠昭
郎木稔弥
長谷川恵美子
荻本菊枝
塙　勇
服部真言
馬場　俊
久武寿代
平原はる
平井　佐
久松道子
久光　昭
古田雄二
古谷卯一

福富かよ
藤井順平
藤田かね子
堀江寿美子
堀口さかえ
星野政一
松本六郎
増田むめ
満石まさ
松尾秋子
丸山さわ子
丸谷つね子
森下絢子
前田忠一
町田富美
前田直治
万波　教

松田与次郎
松本佳郎
松本信一
前田幸子
松崎秀子
町田イネ
前川数江
町田昭子
松本功治
間瀬　実
丸山辰夫
皆川新一郎
皆川善次
箕浦せつ
水野信子
三浦昭雄
村石保之

目黒裕子	山田和子	柳瀬信子	吉岡民子	石田博英
矢島泰孝	山岡富美	脇　ナヲ	吉田育代	山下春江
山本峯子	安井利雄	渡辺ふみ子	米田こつる	東海林太郎
矢沢庄作	矢島光子	若林秀蔵	横田幸侍	渡辺はま子
八木よね	山田シズエ	渡辺しづゑ	吉岡とも枝	
山根しづ子	安田すい	渡辺幸雄	横山純子	以上
山本次夫	山下キクノ	吉岡芙容子	横山美枝	

附記

多数の皆様から折角のご芳志を賜りながら「光の家」の増築が完成しない事情を次頁、別紙にご報告をいたしましたが、この増築計画は、その後も、いわゆるオイルショック以来の建築費等の急騰により、ご芳志賜りました資金では実現できなくなりましたので、「鹿島育成園増築基金」として、徳川理事長名義で三菱銀行有楽町支店に保管してございます。いずれ計画実施のときがくるものと信じますが、その節は、重ねてご援助賜りたく報告をかねてお願い申し上げます。私も本書発刊による益金をこの資金にあてたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

著　者

（別紙）

謹啓　時下ますますご清栄のことと推察お喜び申しあげます。

さきに東京都知事の認可を得て皆様方にご協力をお願い致しました鹿島育成園増築資金の募金は、このたび総額一二〇万円の多額に達しました。これはひとえに皆様方の暖かいご理解とご協力の賜と関係者一同心から深く感謝致しております。厚くお礼申しあげます。

皆様方のこのご芳志に応えすべくただちに増築工事にとりかかるのが本来でありますが、諸般の事情から、今しばらく実施しかねる状況下にありますので、誠に勝手ながら、右金員をとりあえず三菱銀行有楽町支店に「鹿島育成園増築基金」と明示し、鹿島育成園の経営主体である社会福祉法人全日本精神薄弱者育成会名義の（口座番号〇〇〇〇〇号）を設けて定期預金し、増築実施の時期に備えて大切に保管させていただくことに致しました。

皆様方のご芳情を昨今に生かすことができなくなりましたことを深くお詫び致します。しかし、早急に増築実施にかかるべく努力する所存でございますれば、何卒右事情ご賢察のうえ、ご諒承賜りますよう伏してお願い申しあげる次第でございます。

なお、今後ともひきつづき精神薄弱者のよき理解者としてご協力賜りますようよろしくお願い申しあげます。皆様のご健康とご多幸をお祈り致します。

昭和四六年八月　　日

敬具

鹿島育成園恵松会長　武沢静雄

拝啓　時下ますます御清勝にて慶賀に存じ上げます。

さて予てから鹿島育成園恵松会において同園の増築資金の募金をなさっておられた金額が一二〇万円の多額に達せられましたところ、施設の周辺は鹿島臨海工業地域として都市計画中のもとに、事業の一切が明確になっておらず、折角増築に着手しても、後日工事の変更も懸念されますので、諸般の事情を勘案しますと直ちに増築工事にとりかかることができなくなりましたために恵松会から右金円を御移管頂くことになりました。

つきましては、皆様方の御寄附の御趣旨を尊重致しまして、増築が可能になるまで、武沢恵松会々長の御指示に従い、三菱銀行有楽町支店における「鹿島育成園増築基金」と明示した当会名義の定期預金として保管させて頂くことと致しました。当会と致しましてもできるだけ早い機会に皆様の御芳情を生かすよう努力致しますから何卒御諒承賜りたく、なお今後ともよろしく御支援御協力の程をお願い申しあげます。

敬具

昭和四六年八月　　日

社会福祉法人全日本精神薄弱者育成会

理事長　徳川義親

心身障害者に対する諸制度の案内

心身障害者に対する諸制度の案内

◉専門の相談所

相談に行く先には次のようなものがあります

① 福祉事務所
② 児童相談所
③ 精神薄弱者更生相談所
④ 保健所
⑤ 精神衛生センター
⑥ 病院
⑦ 公共職業安定所
⑧ 教育委員会、教育研究所
⑨ 大学付属教育相談所、その他の教育相談所
⑩ 特殊学級、養護学校、精神薄弱施設
⑪ 福祉事務所

生活に困る人たちおよび児童、老人、母子家庭、身体障害者及び精神薄弱者等、いろいろ問題を持っている人たちの相談相手となり、必要な援助をする窓口です。

ここには、最初に相談の内容を聞く面接員、それぞれの問題について専門的立場から指導助言する児童福祉司、老人福祉指導主事、相談員、身体障害者福祉司、精神簿弱者福祉司、また地区を分担して地区の対象者の自立更生の措置をする地区担当員等がいて、問題の解決にあたっています。

【相談内容】

① 生活保護法関係
生活や病気などで困っている要保護者の面接相談および生活指導など。

② 児童福祉法関係
保育所など施設への入所、およびこどもの問題一般に関する相談および指導。

③ 身体障害者福祉法関係
身体障害者手帳の交付、補装具および更生医療の給付など、身体障害者福祉に関する相談および指導。

④ 母子福祉法関係
母子福祉資金の貸付など母子福祉に関する相談

および指導。

⑤ 老人福祉法関係

老人ホームへの入所、老人健康診査など老人福祉に関する相談および指導。

⑥ 精神薄弱者福祉法関係

精神薄弱者援助施設への入所など精神薄弱者の福祉に関する相談および指導。

⑦ そ の 他

生活一般に関する相談、関係機関への紹介およびあっ旋など。

◎ 家庭児童相談室を設けているところもあります。

② 児童相談所

児童相談所は、児童のあらゆる問題について、その原因がどこにあるか、どのようにしたら児童がすこやかに成長するかを診断判定し、その児童にもっとも適した指導、保護、治療などについて相談に応じるところです。

【相談内容】

① 乳児（一才未満）の養育の相談。

② 家庭で養育できない手足、耳目などが不自由な児童の相談。

③ ちえのおくれた児童についての相談

④ 家庭でみられないか、身体の弱い児童身寄りのない児童の相談など。

③ 精神薄弱者更生相談所

精神薄弱者に関する問題について、家庭、その他からの相談に応じ、その援護のために専門的、総合的な判定を行なうところです。

ここには、医学判定員および職能判定員がいて科学的に精神薄弱者の知能程度、精神、職業適性の状況などを判定し将来の援護の方向づけをしています。

【業務内容】

① 施設入所、職業、医療保健、経済的援助等についての相談に応ずること。

② 医学的、心理学的及び職能的判定その他。

④ 保 健 所

ここでは一般の保健衛生問題をはじめ精神衛生、環境衛生など衛生問題全般についての相談や診断を行なっておりますが、とくに妊娠中のお母さんや、乳幼児の衛生問題などについて力を入れております。3才児健康診査もここで行ないます。

⑤ 精神衛生センター

ここでは、精神病、精神病質及び精神薄弱といった精神障害全般の問題についての診断と相談を行なっており、病院に入院した方が良いか、または、その他に適当な方法があるかなど、いろいろのことをしらべてくれます。

⑥ 公共職業安定所

特殊紹介係またはは援護係がおかれ、障害者の就職の世話をしています。就職にはここを経ることが大切で、就職後の世話もしてくれます。

◉ 病院・施設・学校など

(1) 病院

医学的検査はきわめて重要です。とくに幼児の場合はまず医師に診せましょう。身体の一般的な発達程度、手足の機能、脳波、眼、耳、鼻、言語障害、精神病などの合併症を正確に知ることが第一です。このため総合的な診察をしてくれる病院が必要となって来ます。精神科だけの病院だと世間体をはばかっていやがる親もいるので総合病院との協力体制を作っておくことが必要です。

〔精神衛生法による措置入院〕

いちじるしく自分を傷つけるとか、他人に害を加えるおそれのある人は、知事の命令で精神病院に入院させることができます。この場合の費用は公費で支弁されます。

〔精神病を伴う場合の入院〕

重いてんかんをはじめ精神病を伴っており、その治療が主となっている場合は精神病院に入院させます。（通院でよい場合は通院）このような場合でなく重い障害で精神薄弱者のための重度施設のない場合、精神病院を利用しますが、作業療法や生活指導の上からは、やはり精神薄弱専門の施設の方が望ま

しいのです。

精神病院への通院治療は、医療費の半額が公費負担として都道府県から直接医療機関へ支払われます。

(2) 福祉施設

① 精神薄弱児施設

家庭の事情や児童の状態から、家庭で養育することのできない、あるいは不適当な児童を収容保護して独立自活に必要な知識技能を与うる施設です。重度棟の制度があり、これには重い子どもや重複障害のいちじるしい子を入所させます。

〔対象児童と入所期間〕

満一八歳未満の精神薄弱児が対象ですが、事情により二〇歳まで在所の延長ができ、また入所中の重度の障害のある児童で引続き在所させる必要があると認められた場合は、満二〇歳に達した後も在所させることができます。職業指導が進んだ児童は一五歳から成人のための精神薄弱者更生施設や授産施設へ移ることができます。

伝染病、他人を害する性癖などがあっていちじるしく集団生活に適さない場合は入れません。

〔指導内容〕

・食事、排便、衣服の着脱などの生活指導
・情操教育、集団生活訓練などによる社会適応訓練
・職業指導や学習指導

（学校教育に適する児童のためには、近所の小中学校の特殊学級、養護学校へ通わせたり、施設の中に小中学校、養護学校の分教場を設けて特殊教育をしています。）

〔費　用〕

家庭の収入の状況によって徴収金を納入します。生活保護世帯や前年度の住民税非課税世帯は無料です。

〔入所の相談と手続き〕

児童相談所または福祉事務所で受け付け、児童相談所の判定を経て知事が施設に措置します。

② 精神薄弱児通園施設

精神薄弱児を保護者のもとから毎日通わせて、社会に適応できるように必要な生活指導、学習指導、運動などを行なう施設です、通園にはきまった場所まで施設の通園バスが送り迎えに当ります。

〔対象児童と入所期間〕

満一八歳未満が原則で、幼児から入れます。今日では就学猶予免除の必要はありません。

〔指導内容〕

精神薄弱児施設の場合と同様です。

〔費　用〕

精神薄弱児施設の場合の半額が基準になっており、生活保護世帯や前年度住民税非課税世帯は無料です。

〔入所の相談と手続き〕

前項と同じです。

③　重症心身障害児施設

重度の精神薄弱と重度の肢体不自由を併せ持っている児童を収容保護して医学的管理の下に療育を行なう施設です。在所期間に制限はありません。費用・入所の相談、手続きは精神薄弱児施設の場合と同じです。

④　精神薄弱者更生施設

おとなの精神薄弱者のための施設で、職業指導を行なえば社会で働くことができる人、家庭環境の事情で家にいることが適当でないと思われる人、重度の人を入所させて、これを保護するとともに、生活指導や職業指導を行なう施設です。収容・通所両方あります。

〔対象者と入所期間〕

満一八歳以上の精神薄弱が対象なのです。

家庭で負担する金額（国で定める費用徴収基準月額）

施設等の種類 / 世帯分区（生計を同じくする人の税の合算）		育成医療（通院分）	補装具の交付	精神薄弱児者通園	肢体不自由児施設通園部	育成医療（入院分）	精神薄弱児者施設	肢体不自由児施設	重症心身障害児施設
A B	生活保護法による被保護世帯 市町村民税非課税世帯	0				0			
C_1	前年度分の市町村民税所得割非課税世帯（均等割のみ課税）	600				1,200			
C_2	前年度分の市町村民税所得割課税世帯（所得税非課税）	750				1,500			
D_1	所得税 4,800円以下	1,250				2,500			
D_2	〃 4,801～9,600円	1,500				3,000			
D_3	〃 9,601～16,800円	1,750				3,500			
D_4	〃 16,801～24,000円	2,100				4,200			
D_5	〃 24,001～32,400円	2,450				4,900			
D_6	〃 32,401～42,000円	2,800				5,600			
D_7	〃 42,001～92,400円	3,900				7,800			
D_8	〃 92,401～120,000円	4,750				9,500			
D_9	〃 120,001～156,000円	6,000				12,000			
D_{10}	〃 156,001～198,000円	7,500				15,000			
D_{11}	〃 198,001～287,500円	10,000				20,000			
D_{12}	〃 287,501～397,000円	12,500				25,000			
D_{13}	〃 397,001～929,400円	15,000				30,000			
D_{14}	〃 929,401円以上	全額				全額			

◉ 経済的な福祉のために

① 身体障害者手帳

いろいろな援助を受けるのに必要なもので、福祉事務所で交付されますが、決められた医師の診断書が必要です。

② 精神薄弱の場合は「療育手帳」

昭和四八年から精神薄弱者のために「療育手帳」の制度がはじめられました。

「手帳」は国の補助を得て、都道府県が作成交付します。昭和四九年早々から各県の実施要領がきまり、できた県から申請手続がはじめられています、その内容は

① 各種相談、指導、施設入所等を記録し、療育の参考にし、一貫した援護措置に資する。

② 指導の手引、福祉の案内を記載する。

③ 各種福祉施策による援護措置を受ける場合の証明書として手続の簡便化を図る。

④ 台帳を整備して福祉事務所、児童相談所、保健所等が相談、訪問指導、家庭奉仕員の派遣などきめ細かな住宅対策を行なう際の資料とする。

「手帳」は使い方で、対策の原点にもなれば単なるレッテル貼りにもなります。実施を前にして、どうすれば本当にしあわせを保障する手帳になるか、活用の方法について当局でも親の会でも考えてほしいと思います。新しくできた「療育手帳」を早く申請して、活用して下さい。福祉事務所で受付けます。

③ 税金の軽減

お子さんに身体障害者手帳又は精神薄弱の場合は療育手帳が交付されますと（又は精神薄弱であるという証明を児童相談所や精神薄弱者更生相談所からもらう）納税者の所得から二〇万円が、特に重度の方の場合には二八万円がそれぞれ控除されます。また住民税（都道府県民税。市長村民税）も所得金額から一六万円が、重度の方は一九万円が、それぞれ控除されます。

相続税の場合は、お子さんが七〇才になるまでの年数に三万円（重度の場合は六万円）を掛けた額が

税額から控除されます。

④ 自動車税の減免

お子さんの通学や通院のために使用する自動車については、自動車取得税、自動車税が減免されます。（税務事務所や自動車取得税事務所でご相談ください）。

このほか、国鉄運賃の割引制度（精神薄弱児の場合にはない）や、公営の交通機関や民営のバス料金の割引制度があります。（福祉事務所や地区社会福祉協議会にご相談ください）。

また放送受信料も障害者がいる世帯で生活に困っているときは免除されます。

⑤ 育成医療

肢体不自由や先天的に心臓疾患のあるお子さんで、比較的短期間で治療効果があがる場合に、公費の負担によって、薬剤または治療材料が支給されたり、手術やそのほかの治療が行なわれたり、病院や診療所へ収容されたりする制度です。ご家庭で負担する金額は前年度の所得税額によって決まっています（註二二二頁参照。）（療育指定保健所で受付けますが、施設や病院で手続きを教えてくれます）。

⑥ 補装具の交付

お子さんが義肢やコルセットなどを使えば失った能力を補うことができる場合に、補装具を公費負担で交付・修理してくれる制度です。義肢、車イス、松葉つえなどを交付してくれます（福祉事務所で受付けますが、施設や病院で手続きを教えてくれます）。

⑦ 特別児童扶養手当

二〇歳未満の心身障害のお子さんを育てている家庭に支給される手当です、手当は、そのお子さんのご両親もしくは養育者に支給されます。所得制限がありますが、普通の収入の家庭なら支給されますから福祉事務所に相談してください。

手当額は次の通りです。

① 重度の場合は、月額二〇、三〇〇円。

② 中度の場合は、月額一三、五〇〇円。

⑧ 障害福祉年金

二〇歳以上の重度の精神薄弱者、身体障害者に支給される年金です。手当額は特別児童扶養手当と同額です。

所得制限があるほか、本人の前年度の所得額（総収入から税法上の必要経費を引いた額）が六〇万円以下であれば、支給されます。

⑨ 福祉手当

重度の精神薄弱または身体障害で日常生活において常時の介護を必要とする人に月額五、〇〇〇円が支給されます。

⑩ 心身障害者扶養共済制度

保護者が亡くなったあと、障害児に終生年金を給付するために地方公共団体が実施し、国が世話をしている保険共済制度で、保護者が加入者となって、月に一、〇〇〇～一、五〇〇円を掛金として払い、月額二〇、〇〇〇円の年金が支給されます。

（この稿は社会福祉法人全日本精神薄弱者育成会発行の「どんなに重くても、どこにいても」より抜すい転載）

上司と下僚

上司と下僚

(一)　――三宅正太郎先生の思い出――

東京地方裁判所長時代

三宅先生が大審院判事から、東京地方裁判所長に就任された昭和九年八月、私は初めて先生に接する機会を得たわけですが、その時歴代の所長と一風変わった、鼻眼鏡のよく似合う、貴族的風格をもち、何となく近より難いという印象を受けたことをおぼえております。

私は、ある晩、若さに任せ、友人とともに深酒をし、翌朝、二日酔でぼんやりした感覚のまま、登庁したところ、突然先生から呼び出しを受けましたので、急いで所長室に伺いました。

先生は私をじっと見つめておられましたが、しばらくして、鋭い目を柔らげ

「君！　人と対談するときは相手の目を見ることはよいことだよ、しかし君の目はいつもの目と違って、活きていないね。僕は五時間しか寝ないんだよ」

と言われたのです。前夜の深酒のため古い鰯の目のような目をしていた私は思わずハッとし、先生のあまりの鋭さに、内心ギクリとし、柔かいながらも寸鉄胸をつくような先生のお言葉に思わず身のひきしまるのを覚えました。

そして先生がお急ぎのときによく階段を二、三段一ペンに跳び歩いておられるのを知っていた私は

「五時間の睡眠で、よく階段を跳び歩けますね」

と申しましたところ

「僕は熟睡することに心掛け、朝は読経し心を清めて、静かな気持で登庁するのだよ」

との何げないお言葉でした。この、平生の心構えについての先生のお言葉は、当時若かった私の心に強い感銘を与え、未だに脳裡に刻みつけられております。又ある日、私のいる事務室に来られ、私の執務ぶりを背後で眺めておられましたが

「君はどんな仕事を分担しているのかね」

とのお尋ねです。私は一応仕事の内容をかいつまんで答えましたところ

「君のその仕事を、もっと早く済ませることを考えて御覧」

と言われて、事務室を出て行かれました。

所長から雇の事務について、直接ものを言われたのは初めてのことで、私も感激し、後日そ

のことにつき心を砕いた結果を報告したところ

「それで結構、雇の仕事も、裁判に関係しているのだから、創意工夫を常に怠らぬように」

とのお言葉を受けました。先生は、各裁判官の判決書は必ず一読しておられましたが、判決主文には言及されることはなかったが、理由の書き方について担当判事を呼んで懇切丁寧に指導されておられたようです。このように職種階層の如何を問わず先生の目は役所内の隅々にまでいきとどいていた反面、部下への思いやりの深いことも並々ならぬものでした。

私たちにとって一二月は昇給と賞与の楽しみの月でした。この時私は三円という当時としては破格のベースアップと望外な賞与を支給されましたので、当時麹町の富士見町にあった所長官舎に、友人と相乗りでタクシーをとばしてお礼に参上しました。ところが、次の朝早速所長室に呼ばれ

「昨晩は昇給、賞与のお礼と言って沢山の書記や雇の人達が来たがどういう訳か」

とのお尋ねでした。

当時は昇給や賞与のさい所長のところにお礼に行くことは慣例となっていたのでそのことを申し上げたところ

「僕が君達に俸給を出しているのではないから、今後はそんな時に訪ねてくるのは止めるように」

と申され、このことは後に監督書記名で全庁に通知が出されました。

又ある時先生の奥様からたった一度でしたが、所長の車があいていたら、ちょっと拝借出来ないかとの依頼を受け、車庫長に依頼して配車しましたところ、翌朝早速先生から公私の別ははっきりすべきだと厳しく戒められたことをおぼえております。その直後奥様からも意外にも丁重なお詫びの電話をいただいたので、奥様をもそのことで戒められたのだなと知り、先生の公私の別をはっきりさせられるお考えに私自身が強く反省させられた次第です。

常日頃他には寛大に、自らには厳しく独りを慎む先生の生活態度からして公私を混こうするというようなことは許されぬことだったのでしょう。

先生は所長としての職務のかたわら、自ら裁判に立会われました。裁判の日は、必ず和服に角帯を締めハカマ姿で登庁されたものです。審理に色々の工夫をこらされたことは有名ですが人定尋問が終わると、被告人に対して

「あなたは私の前に出て来なさい、私の問いに答える時、私の目を見て答えなさいね」

と、もの静かにさとされるのが常でした。旧刑訴法のもとでも被告人をあたまから犯人扱いにせず、堂々とその述べたいことを述べさせようという配慮があったのでしょう。

毎年二月、三月には卒業期の学生の見学申込みが殺到したもので、これを一覧表に纒めて御覧に入れると折角の見学者だからといって庶務主任に裁判所の概要の説明を命じ、自らも裁判

のあり方について話された上、裁判および裁判所に対する感想文を寄せてくれるようにと依頼されるのが常でした。

或る日先生から呼ばれ

「君、法廷の硝子窓を奇麗にする方法はないかね」

とのお尋ねをうけました。あまり突然でしたので、どういう訳でそのようなことをと先生の意図を伺ったところ

「これを見給え」

と前述の感想文の一通を示され

「一女学生ですらこういうことに気付くのに私はうかつだった」

とのお言葉でした。

その感想文中に、裁判所の尊さ、大切さはわかりました、しかし裁判所の窓硝子はよごれて建物は非常に暗く、特に玄関ホールに入ったときは恐ろしいところだとすら感じました（当時は霞が関にあった旧最高裁判所庁舎内に地方裁判所がありまして、旧庁舎は、晴天の日でも本当に薄暗い感じでした）と書かれているのを読んで、これは私達の役目だったのに、先生にまでいらぬ心配をおかけして申訳なかったと、早速小使さんに頼んで、掃除をしてもらいました。

法廷に出られてこの結果を御覧になられた先生は、私に

「御苦労、きれいになったね、傍聴席から見ると、窓外からの植木の緑と赤煉瓦とのコントラストが実に美しい」

と喜ばれ、これを小使さんに僕からといって上げてくれ、と金三円を私に託されました。三円という額は、当時書記の半期の昇給分にあたる多額のものでしたので驚いたものです。こんなところに先生が「国民に愛される裁判所」ということを常にお考えになっておられたことがうかがわれ、今思い出しても感激新たなものを感じます。

次に先生が受刑者についてどの様な考えをもっておられたかを知ることのできるエピソードをお知らせします。

先生は受刑者が拘禁されている小菅刑務所を、必ず週一回訪問されました。私もしばしば同行を命ぜられ、その面接の席にもたちあいました。先生が親身になって話を聞いておられる様子は、裁判官と罪人との対談とは思われないようにとの心をくばっておられる努力が私にも容易に感じとられたほどでした。帰途車中で、面接者カードに詳細に記入しておられ、数回の面会の結果をまとめて刑務所長に渡しておられました。受刑者が仮出所の恩典をうけると先生のお宅に参上し

「お蔭様で出所できました」

とお礼を述べる者も大勢あったようで、そんな時先生はその者に若干の金銭を与えておられた

場面にも接したことがあります。

私は、これでは奥様の台所の切回わしは容易でないと心密かによけいな心配をしていたものです。従って先生は御自分の外套の新調もできなかったのでしょう。時々外套の裏地のすそが切れてさがっていても平気でおられました。私は所長不在のときにそっとハサミで切り取っておいたこともありました。或る日、私は雇の身でありながら、色々お世話になった感謝の気持から、俸給日に粗品を持参してお宅に参上してお礼を述べたところ、先生のいわれたことは、

「君の気持ちは有難いが、僕に感謝する気持ちがあるならば、君が人を使う立場になったとき三宅がこういうことをして呉れたことがあったと思い出して君の部下をねぎろうことを忘れないで呉れれば、それで充分だよ、折角だが品物は持ち帰って欲しい、君の気持ちはうれしいが上司が下僚から物を貰うということは僕の気持が許さないんだから誤解しないようにね」

ということでした。

私は誠に尊い教訓と温かい先生の心持ちに、なんとなく晴々とした気持で持参した品物をぶらさげながら家路につきました。

札幌控訴院長時代

昭和一〇年五月一三日に先生は札幌控訴院長に栄転されたので、お祝に所長室に参ると

「君お祝を言って呉れるのは有難いが、本当にお目出度いと思うかね、僕はそうは思ってい

ないんだよ。

人間は他の人を追越して余り順調に運ぶときは一番心を引き締めて慎重な態度を採らなくてはならないんだよ」

と、しんみりした口調で話されながら

「君にはお世話になったね、本当に有難う」

と申されるので、遠路お体を大切にとお別れの御挨拶を申上げました。御赴任の当日は雇の身であるが故に留守番として一人残り上野駅頭でのお見送りはできませんでした。お見送りを終って帰えって来られた瀬戸川庶務主任（元簡易裁判所判事）から、駅頭で三宅さんが

「君が来てないね」

といっておられたよと聞かされ、発車まぎわの混雑のさなか私のような者にも心をくばってくださるのかとお志に感謝した次第です。

先生は着任早々管内出張をされたとき、そこの絵葉書にその風景をこまごまと記してお便りをくださいました。その後の管内出張のときもお便りをくださるので、いつまでも変らぬ先生の御思召に感謝申しあげていたところ、ある日、やっと落ち着いたので一筆参らせると前置きされて、巻紙に長文の御手紙をいただきました。

その文中に、人間は誠意が一番大切である。僕は君の誠意に対し非常に感謝し、ささやかな

がら記念品を贈るからと、思いがけない御恩寵に感謝し、幾度も幾度も読み直しておりました。やがて数日後、服部時計店から使の方が見えて

「三宅さんの使で参りました」と一包の品を手渡されました。

私は、はやる心を押えながら開包して見ると身に余る程の高価な懐中時計で、しかも時計の内側に「贈武沢静雄君昭和一〇年五月　三宅正太郎」と刻書してありました。

私はまことに有難い感激に無人の図書室に飛び込みその時計を抱きしめて感泣した思い出は未だに忘れられません。私はその後やはり先生のお力添えによって、戦時中に蒙古政府に派遣されたときも、この時計を持参いたしました。現地で終戦を迎え帰国することになったのですが、引揚者の大概の人々は時計を没収されるとのことでしたので私は、これだけはぜひ持ち帰りたいとの一念から、申訳ないことですが記念の時計を、肌身に着用していた越中ふんどしにしばりつけ無事に乗船し没収をを免れて内地へ持ち帰りました。このようにして一九年間も肌身離さず持っておったのですが偶々出張先の旅館で心なき人のため衣類ぐるみ、この時計も盗まれました。一夜して永久に先生の形見の時計とお別れする不幸な運命に慨嘆し、かつ先生に申訳ない気持で一杯です。

大審院部長時代

先生は昭和一二年一月札幌控訴院長から再び大審院部長に転ぜられたので、また身近かに接

する機会を得ました。或る朝、地方裁判所の庶務に来られ

「君は未だ庶務に居るのか、何時までも重宝がられていては君の先々のことが心配だから監督書記に裁判部に出して貰うよう僕が言ったとそういいなさい」

「そのような我侭を申し上げて監督書記に怒られませんか」

「そのときは僕が話してあげるよ」

と笑顔を残して三階の大審院へ長い階段を昇られるのを私は落涙の思いで見送りました。早速監督書記と庶務主任に裁判部転出を願い出たところ御納得いただき堀田主任（元簡易裁判所判事）と金田上席書記（元簡易裁判所判事）のもとで執務するという御配慮をいただき、恵まれた環境のもとで御指導を受けました。

私は先生から訓育された「如何にしたら事務改善を図れるか」を裁判部の仕事において試み、私の仕事が少しでも先輩の負担を軽くすることができるように、また裁判官に少しでも役立つことができるよう心掛けることに専念しておりました。その後先生は「嘘の行方」という名著書を刊行され、早速御恵贈をいただき自己反省に非常に役立ち感銘を覚えました。

昭和一三年に初めて裁判所書記登用試験が実施され、受験の結果その末席に採用させていただき、はからずも当時世間を騒がせた国鉄疑獄事件の立会を命ぜられることになりました。

先生は一四年五月に満州国と中華民国へ出張を命ぜられて旅立たれました。

長崎控訴院長時代

先生は帰国早々にして同年六月長崎控訴院長に補せられ又遠くお別れすることになりました。先生の御赴任後間もなく、偶々蒙古政府から同政府司法部職員を招へいすることになり私も若い情熱のほとばしりを海外に求める決意を固め、志望したところ年令が若いから日本軍華かな外地には不向きであることを洩れ聴き、断念することができず以上の次第を三宅院長に速達で希望を訴えました。

数日後、突然、先生から電話がかかって今、帝国ホテルに居るから直ぐロビーに来るようにとの御連絡をいただき、はやる思いで帝国ホテルに飛び込みました。初めて見るホテルの豪華さに驚きウロチョロしていると

「武沢君ここだよ」

と先生から声をかけられ

「君はあの、ひどい張家口に行くのか、僕はさきの出張のとき視察して来たがひどいところだよ、それでも行きたいのか」

と私の気持を打診されたので

「ひどい所なら尚更行って見たいです。後で絶対弱音は吐きません」

「よろしい、では早速興亜院に話してあげるから帰ってもよい」

「院長さんは公用で上京されたのですか」
とお尋ねしたところ
「君の手紙を見て来たんだよ」
「それは誠に恐縮です、本当に有難う御座いました。何卒よろしく御願いいたします」
と申し上げるのが精一杯の気持で、先生とお別れしました。
先生のご尽力のお蔭で同年九月渡航することができることに決定し私は西の空に向って先生に心から感謝の頭を垂れ先生にお礼状を差しあげましたところ
「希望が叶ってお目出度う、着任したら水に注意し生活環境が違うから早く体の調整につとめるよう云々」
と詳細に御丁寧な御教示を受け、それを守って生活したお蔭で終戦まで病気もせず幸いに帰国することが出来ました。これも先生の御教示の賜と今更ながらの御厚意に感謝して居ります。

司法次官時代

先生は翌一五年一月司法次官に任命されました。私は登庁着席した途端に蒙古政府司法部次長藤井五一郎さんから呼び出しを受けて次長室に入ると次長は書状を持って目頭に涙を浮かべていられるご様子で

「君、これを読んで御覧、三宅次官からの手紙だよ」
私は何事かと心中おだやかでない気持で拝読させて頂いたところ
「君は次長として良い部下を持った。武沢君を連れて行ったが同君は誠意に満ちた人間だから、よろしく使って呉れ云々」
との内容の御書面を拝見して身体中がほてるのをどうすることも出来ず、その感激を残すためにこの文面を複写して大切に保管して居りました。これ程お引立てを受けては安易な気持で公務に携さわる訳には行かない、そんな気持にさせられました。
私は一五年九月妻子を張家口に呼び寄せるために帰国したことがありましたが、早速東京駅から司法省に電話して御挨拶申上げたところ、
「直ぐ司法省に来られないか、現地の話も聴きたいから」
との御指示によって次官次室に参上したところ、すでに何人かの裁判官、検察官の面会申込者が居られたのでしたが先生はそれらの方々に、私が遠方から来た客だから先に会うと諒解を求められたうえ私に先に入室することをお許しになり暫時お話しして
「君時間の都合がつくなら一二時まで次室で待っていて呉れないか」
とのことでした。時間までお待ちしていると急いで出て来られた先生は
「君、銀座へ行こう。食事をしながら話を伺うよ」

私はこのお言葉に驚き先生の後に従って玄関に行って自動車の運転台に乗ろうとすると

「君はお客さんだよ。遠慮せずに僕と同席しなさいよ」

と同席を許されました。桜田門から右折して銀座に向う途中一年ぶりに見る皇居のお濠が懐しく格別の思いでした。銀座で特別高価な食事をいただきながら先生の、なるべく早く現地人の中にとけ込むように心掛け、現地人を理解することが大切であることの御高説を伺い、食事を終ると今度は日本橋の乾物問屋街に車を乗りつけ、海藻類、魚類、貝の干物など柳行李に一杯になる程買求めて私の現地の住所（張家口市）を店の主人に教えこの品を送るよう指示され

「武沢君、蒙古という辺境で、日本の香りの物はとり難いだろうから、これを皆さんに分けてあげなさいよ」

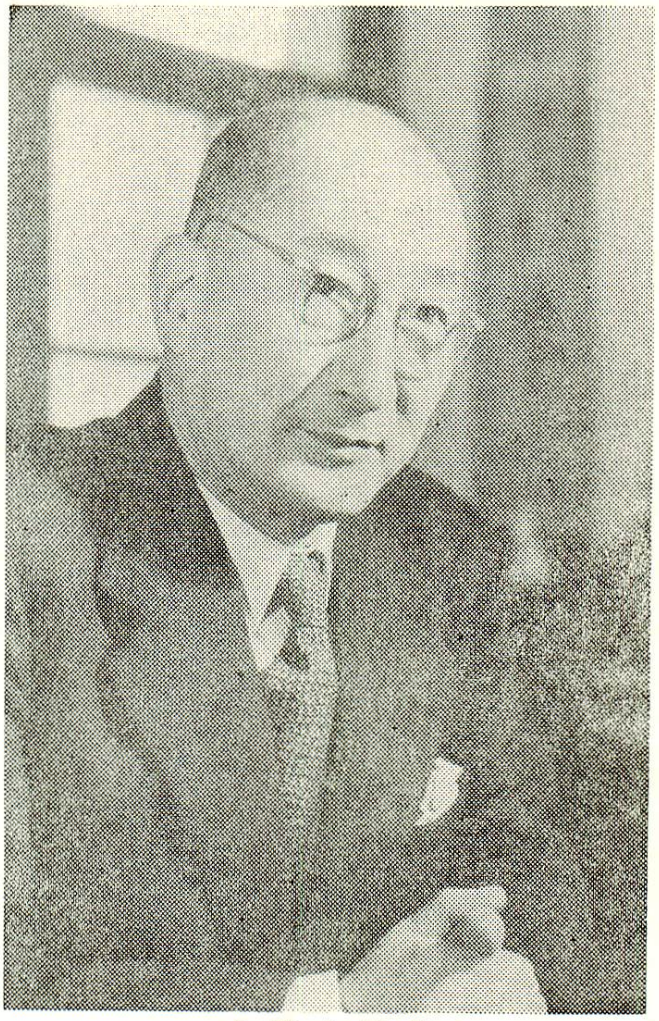
と全く思いがけないありがたいお言葉に恐縮のほかありませんでした。この先生の温かい心くばりに感謝しながら妻子の待つている田舎へ帰りました。

大審院部長時代

先生は一六年九月に又大審院部長に補せられその翌年の秋にかの有名な「裁判の書」を刊行されました。私も頂だいする光栄に浴し何回も反復して拝読しました。

私は一九年に私用で帰国しましたが、麻布のお宅に電話すると早速来いとのお言葉に甘え丁度夕食時にお宅に参上しました。応接室に通ると先客がありました。その客は刑余者であるら

しく先生から幾らかの金銭を貰って帰るところでした。
そのうちお嬢様が帰宅され、喜び顔を輝かせて
「お父様、今日いか一匹とリンゴ一ケをいただいてきました」
「そう、それは良い物を貰ったね。折角の物を申訳ないが、お母さんとも相談して父さんにくださらんかな」
の会話を私は不可解に思っていると
「娘は学徒動員で働いているんだよ」
と説明され先の会話の謎が解けました。
先生は私に外出しようと言われるので先生宅を辞しお伴し外出したところ外は灯火管制のため街灯は殆んど点灯してなく、各戸は皆暗幕を張って歩く道路は本当に田舎同然でありました。
先生は片手に買い物篭を持って居られるので不思議に思いお尋ねしたところ
「さっき娘の貰ってきた物資をそっくり貰ってきたから、これから君に御馳走するので虎の門まで歩いて呉れよ」
このお言葉に胸を締めつけられる感動を覚え奥様やお嬢様に対し申訳ないと胸をいためつつ、内地では本当にえがたい配給物資でありましたでしょうと考えながら歩いているうち虎の門のとある料理店につきました。



弁護士時代

〔愚直無私〕先生の直筆

その店も灯火管制で光は一切洩れないようにしてあり、先生が門をくぐるとそこのお女将さんが出て来ました。かねてからのおなじみのようでしたが、先生はそのお女将さんに向って

「お女将……材料を少し持って来たから、特別の料理を作って貰えないかね、この人は遥か蒙古からのお客さんだからお美味しいものを頼む」

と申され座敷に通され暫くすると内地によくもこんな美味な酒があるものだと感心しながら御馳走

をいただきました。先生とお女将の御厚情に感謝の礼を述べ私は法曹会館に宿をとり一人床についたのですが、先生のなんともいい表わせない厚い人間味に感動し目がさえてなかなか寝つかれませんでした。

弁護士時代

先生は二〇年一〇月大阪控訴院長に補せられましたが翌二一年二月退職されて弁護士になられ貴族院議員の要職にもつかれましたが、その七月に公職追放という不幸な運命に見舞われました。

私は蒙古から引揚げて二一年に、東京地方裁判所に復職できましたが、運悪く四か月間病床生活を送ることとなりました。その間、先生は度々激励に足を運んでくだされ、そのお姿が未だに瞼に浮かびます。

病気も治り歩行も自由になりましたが、病後の私にとって一人の東京生活は困難と思い退職して帰郷することの決心を御報告に伺いましたところ

「今辞めるのは惜しいね、どうしても辞めるなら僕の友人の貿易商社に勤務しないかね」

との御勧誘もありましたが東京を去ることの固い決心を申上げましたところ

「そう、田舎で生活するのも大変だろう、君に僕が自分で造って焼いた茶碗があるから記念に上げるよ」また「道中食べて行きなさい」

と法律事務所の女事務員に命じて立派なリンゴ一包をいただいて先生の事務所を辞しました。

帰郷後も、再三田舎生活は大丈夫なのかと温いお便りをいただいて居りました。田舎での療養の甲斐もあって体も快復したものですから昭和二四年二月に先輩各位の御取計らいで再び福島地方裁判所平支部に勤務することがきまりました。早速このことを先生に御報告すべきでしたのですが、なれない職務と雑事に追われ整理が済んだところで先生に再就職のご報告をいたしたのであります。

ところが先生は昭和二四年三月四日忽然とこの世から去られました。そのニュースに接し、私も突然の訃報に驚き落胆の極みでした。先生は果して私の再就職の便りをご覧になって、喜んでくださってから、この世を去られたのでありましょうか。未だに心残りがしております。

限りない追憶に先生を偲び御冥福をお祈りいたします。

（続）上司と下僚

裁判と三味線

三宅先生は、東京地方裁判所長時代に法廷で審理をなさる日は和服を召されて登庁しておられたことは、さきにも述べたが、また、時折、紅灯の巷にお出かけのときも和服姿でありました。そのお姿は、あまりにも容姿端麗でありましたので、一八歳の私の心に憧れの気持ちを誘うくらいでしたから、もちろん玄人の女性にも歓迎されたことでありましょう。

裁判所の所長である先生が芸者と遊ぶことに少なからず反発心を抱いていた私は、先生に、

「先生は、裁判官の社会探訪のために芸者遊びをなさるんですか」

と小癪な質問をすると、先生は鼻眼鏡の底から、やや暫く私を見つめておられた。

「君、僕は芸者遊びをしているわけでないよ、三味線の名人の弦を聞きたいのが目的だよ」

私は、すかさず

「三味線の弦が裁判に関係がございますか」

「君、三本の弦から素晴しい音を聞けるのは、その人の心が、三本の弦に精神が集中しているときなんだよ。そのときに僕の胸を打つものがある、名人が一心にひく三味線が生きて聞こえるよ、僕も裁判のときに精神を統一し、一心になるように努力したいと考えているから…」

先生は、常日ごろ何ごとにも一心になれと言われたが、裁判のために、かくも心を砕いておられることを知って驚くばかりでありました。

若輩の私に三味線の講義をしてくださっても、わかろうはずがないのに、あえてご教示くださったことに、あらためて感謝し、私も何ごとにも一心になれるように努めたいと思うようになりました。

先生と新聞記者

三宅先生が、東京地裁所長になられると、歴代の所長時代と異って新聞記者の訪問が多くなった。

新聞記者の諸氏も先生を師と仰ぐような訪問で、二、三人が一緒になって所長室に訪ねるのが習慣みたいになりました。

新聞記者の訪問を受けた先生は、必ず出前の紅茶かコーヒーを取り寄せて応待されておりました。

その当時、所長室で紅茶、コーヒーを出すのは地裁の部長会議のときに限られていました。

私は、

「所長は、ご自分の部下よりも新聞記者の方を大切にされているように見受けられますが、特別の意味がございますか」

先生は即座に答えてくだされた。

「僕は部下と新聞記者を区別はしていないよ。

新聞記者の使命は、勇気と誠実をもって真実を報道する責任をもっている。

裁判官も勇気と誠意をもって裁判をすることが使命である。この点では裁判官と新聞記者に相似通ったものがある。

新聞記者から、そのときどきの世情を聞けることも非常に貴重なんです」

先生の、裁判官という職務に対し、ご自分の誠を尽すことにつとめておられたご態度に深い感銘を覚え、まことに心強い裁判官であられるという当時の印象は未だに忘れることができません。

行先を教えたのは君か

先生の東京地裁所長時代には、裁判官のなかには大変な豪傑肌の裁判官と茶目っけの多い裁判官がおられた。

ある日、その茶目っけの裁判官が、私に小声で

「君、所長は今日どの方向に行ったか教えろよ」

と言う問いに、私はその意味がわからないので、うっかり

「下谷方面でしょう」

と答えると、その裁判官は

「しめ、しめ、ありがとう」

と、いかにも子供が親の行先を知ったような喜び方で、急いで立ち去る姿を妙な気持で見送ったことがありました。

翌日登庁された先生から

「昨日、僕の行先を教えたのは君かね」

「はい、お教えしました」

「そう、しかし愉快な連中だね、あの連中は僕の行っている家の隣りで遊んでいて、ころ合いを見計って僕の部屋に押しかけて、また呑み直すんだから合理的な遊び方をするよ」

裁判所の俸給日になると必ず所長の部屋に料亭の女将らしい人が訪ねて来たのは、おそらく多額のツケを取りに来ておったのでしょう。

先生に当時お世話になった多くの裁判官は目出度く大任を果されて、今日では静かな日日是好日の日を送っておられるでありましょう。

その先生は昭和二四年三月四日に亡くなられました。香華の供えられた仏壇の御位牌に「慈観院殿浩徳日正居士」の、金文字は、先生の御遺徳を永遠に顕彰するものと思います。

飲み屋の精算書

この稿は、その後ある地裁の所長をされた方の述懐であります。

先生の札幌控訴院長時代、当時若かったこの裁判官は本土の裁判所へ転勤の命令を受けまし

た。

しかし、その裁判官がなかなか赴任しないので不審に思われた先生は、その裁判官を院長室に呼ばれて、その理由を尋ねられました。すると、その裁判官は悪びれながら

「私のための送別会が幾日も続きましたので、その宴会の費用の額が多くなって支払えに困っているんです」

この率直な告白を聞いた先生は、その裁判官に

「飲み屋の精算書を持って来なさい」

と命じられたそうであります。

その裁判官は恐る恐る飲み屋の精算書を先生に差し出すと

「それは僕が処理するから早く赴任しなさい」

と申されて料理屋の借金を支払ってくださったということでありました。

裁判官は温かい先生の処置に感謝しながら無事任地に赴任することができたそうです。若気のいたりとはいゝ己れの無軌道を反省し裁判官としての品位をけがすこともなく勤めたお蔭で所長になれたのも三宅先生の厚情の賜と語る目に涙を浮べ、声をつまらせて先生を懐かしみ尊敬の念を表わしておられました。

私は、雪の夜の更けるのを忘れてこの裁判官の思い出話に聞きいっておりました。

三宅さんを偲ぶ会

（昭和四〇、三於法曹会、三宅正太郎先生の一七忌の際の故元最高裁判事藤田八郎氏の書）

横田正俊氏の談話

三宅先生は、接する人の心に忘れ難い印象と灯を点じて行かれた感じがあります。

人によっては、その灯がちらちらと又人によっては灯が燃えさかっているで御座いましょう。

先生は、非常に人間性に富んだお方でした。

私はかつて、今は故人なった当時非常に優秀な判事であった下林義雄君と正月のある日二人で料理屋で呑み程々に酔った時、下林君が三宅先生宅に行こうといい出したのであります。

二人共先生を日頃から尊敬して居りましたがなんとなくお宅へ伺いにくかったのでありますが、その酒の勢いで伺う相談をしていると、酒席に居た店の女性が三宅先生に私もぜひ会わせてとせがまれ、随分御迷惑と存じましたが三人で伺った次第です。

ところが先生は非常に喜んでお迎え下され歓談して下さいました。

ところが私達が連れて行った女性は、多少の文学趣味を持っていたため三宅先生を独占してしまいました。

私達はその話題を肴にして酒を御馳走にあずかりながら、横から先生を観察して居りましたが、先生は偉大なフミィニストと思っていたのですが、そういうことではなく、非常に人間的で、そのような見ず知らずの人にも愉快に話され、最後に、非常に美しい萩の花の模様で装禎した随筆集をその女性に与えられ、彼女も感激して帰ったのであります。

そういう現実を、この目で拝見し、想像して居りました三宅先生の人間を直接に見せられ、私達は、その実感を味い、あらためて感激を覚えたのであります。

三宅先生が我々にお残しになった心の灯が裁判所の中ばかりでなく、広く、あちこちで燃え続けていくことをお祈りする気持で一杯であります。先生の十七回忌に当り御冥福をお祈り致します。

小林直人氏の談話

三宅先生が亡くなられたのは月曜日（昭和二十四年三月四日）でした。金曜日ころからお身体の具合が悪く、お休みになってお客さんがお見えになっても起きあがることができない位で

した。

事務所（当時中央区銀座西二の一中島ビル三宅法律事務所）の先生の部屋には観音経の額が掛けてありました。その室に入る者はなく、誰もその額に手をふれないのに、その額が突然ガタンと音をたてて落下したのでした。私達は意味深重な感を抱き早速事務員一同で先生のお宅へ御容体を伺いに参上致したのですが、そのときのなんとなしの予感が、その侭現実となり、先生は、この世を去ってしまったのであります。私達の生がいの師匠である先生を失ったことは忘れ難い瞬間であり、まことに痛恨事であったのであります。先生は、中耳炎に罹られたが何分にも極東裁判等で御多忙なため治療も叶わず、山口地方裁判所へ出張され御帰宅後非常に疲労を感ずるといって床に伏せられたのであります。

先生は裁判のために全身全霊を捧げてその使命にまい進しながら、生命の灯が今消えるのも予想されずに突然最後の大切な瞬間を迎えられてしまったのであります。私達未熟な弟子は本当に途方にくれる想いを致し、その瞬間は現在でもまざまざと思い出されるのです。先生は観音経をやっておられ、私達弟子を月一回自宅に呼んで水入らずの会合を開いて人生観を語る等色々と話の場を作って下され、私達に意見をいわせたものです。今にして想えば、先生が亡くなられるころの御心境は仏教に帰依したお話が多く、先生は何宗というお方ではありませんでしたが、種々様々な人間の姿に接した体験と御自身の菩薩行を通じ、先生御自身に大きな仏力

が体現しているような感じでありました。

私達が求道上の質問をすると、それに対応した相当な響きのあるお話をして下さいました。先生とは十年も二十年も切磋琢磨して行きたいという念願で、月一回の会合を何より喜び楽しみにしておりましたのですが、あたかもその棲む枝を折られたかのように、星が落ちる如く、一瞬にして先生は亡くなられたのであります。

私達は、行先も方向も判らない未熟な弟子のみが残ってしまって、杖つきながら、とぼとぼと、今日まで、人の道をあゆんで来られたのも先生のお蔭と思います。

先生の御薫陶を受けた私共としては、先生が心に永く落されていたもの、生前に十分な表現にして社会に発表されてないものを、私達で発表したい気持ちもあったのですが、それも実行を果さず誠に才能とぼしい弟子と言わなければなりません。私は、不面目に思い恥じ入っている次第です。

先生は、人間性を法華経観世音菩薩品に中心をおかれて身読されておられました。私も法華経中観世音菩薩品の次に位する常不軽菩薩品に心ひかれ、人間性を礼拝する姿が出ている常不軽菩薩の修行には深い親近感を抱いておりましたので、私は、私の心に描いた先生晩年の人間観に対して共感共鳴の感情を禁じえませんでした。人生体験の深くない私が果してどの位まで先生の精神を掴みえたかは疑問です。従ってこの点は、自分の生がいの一の宿題になっている

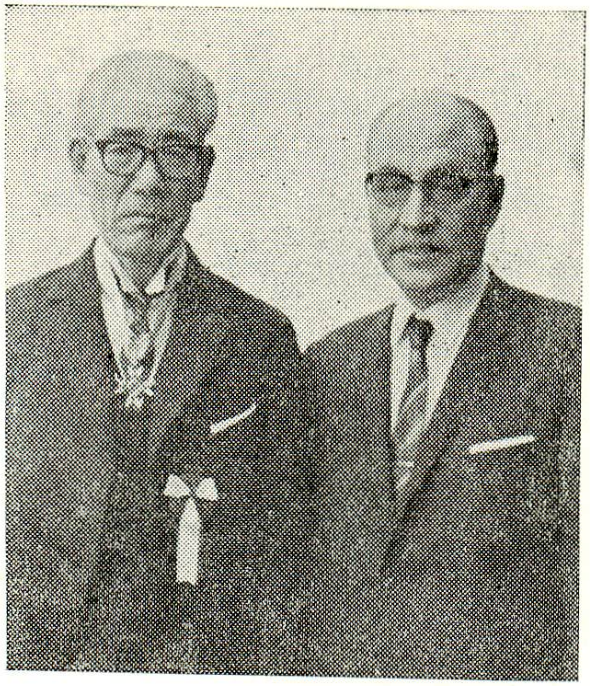
訳です。

私は、先生の御遺族の御幸福を祈ってきたのでありますが、本当に微力で、御遺族にお尽しすることができず、今日に至っても先生の御恩にお報いすることができず、自己反省を致している次第です。

最後に、先生の御遺族の御近況を申上げます。勿論奥様は御健在です。今日、先生の御遺族は本当にお幸せになっておられます。二男二女のお子さんは成人され、長男の洋君は学習院大学を卒業し、現在は東京銀行内幸町支店長代理です。すでに結婚され二人のお子さんも生れ、スポーツマンでもあり、年とともに故先生の面影が出てまいり、誠に嬉しい御成長ぶりで御座います。先生生前からの御自宅の庭に別棟を構えられ、将来性も豊かに生活されて居ります。又長女のナカ子様は、池田家に嫁ぎ、御主人は東京火災の課長になられ、お子様は三人となり、幸福そのものです。現在、奥様の隣りに住んでおられるので、奥様は都合五人のお孫さんにかこまれ、頼りになるお子さんを両隣に持って、お幸せと存じ上げております。先生が亡くなられたとき尋常四年生であった武君も慶応大学法学部を卒業され、就職先も決定済みで奥様も胸なでおろしておられることでしょう。武君のすぐのお姉さんマサ子様も婚期当来しまして お母様に家事見習旁々お手伝いして居られるような近況で御座います。先生が遺された麻布本村町四四番地のお邸にその侭つつましやかに一族うち揃ってお住いで本当に嬉しいことで御座

います。どうぞ、故先生を心のうちに想い出すごとに御遺族も幸福でありますことをお心にとめていただきたいと存じます。

(二)　――金田耕作先生の思い出――



金田先生と筆者

金田耕作（元簡易裁判所判事）さんが四三年一〇月に定年でご退官になった。

裁判所書記官、書研教官、簡裁判事へと一生涯をうちこんだ生活は、満ちたりた悔いのない人生であったことと拝察お喜びを申しあげます。

四〇年前の金田さんは、東京地裁刑事部主任書記として調書作成の優等生であった。

いがぐり頭で、東北弁の金田さんは、後輩の強い防波堤でもあったが、酒を友とし

て楽しみ、手拭を鉢巻にしてのタコ踊りは、かくし芸の一つ覚えでもあった。

私は、三八円で任官した。

当時は、女子職員と口をきいたり、手をふれても上司から大目玉を喰った時代ですから私は、ごく内密に結婚し、新婚旅行もなく六畳に間借りして、パタパタと七輪で炭火をおこす生活は気ぜわしく生活費も余裕あるものではなかった。

そのようなときに、私たちのところに、一俵の炭が届けられた。頑固な炭屋は、贈り主の名を言わず残り少なくなると、また、届けて行くといった具合であった。

私は、はからずも蒙古政府の招へい官吏に選ばれて荷造りを始めたときになって、もう日本にも帰えれないからと炭屋に事情を話して、無理に聞きただしたところ、炭を贈ってくれた方は、金田さんであることを告げられた。

同じ部屋で上司として、毎日顔を合せており、それらしき素振りも見せず、ただ、黙々と調書作成に精魂をそそいでおられる姿に非常な感銘と感激を覚えたのでした。

ご退官の送別の宴があるという朝、妻と「金田さんには大変お世話になったな……」と語りあって初老の私たちの胸があつくなった。

金田先生は昭和四九年八月八日永眠されました。謹んで先生のご冥福を祈り拙筆を捧げます。

水に祈る

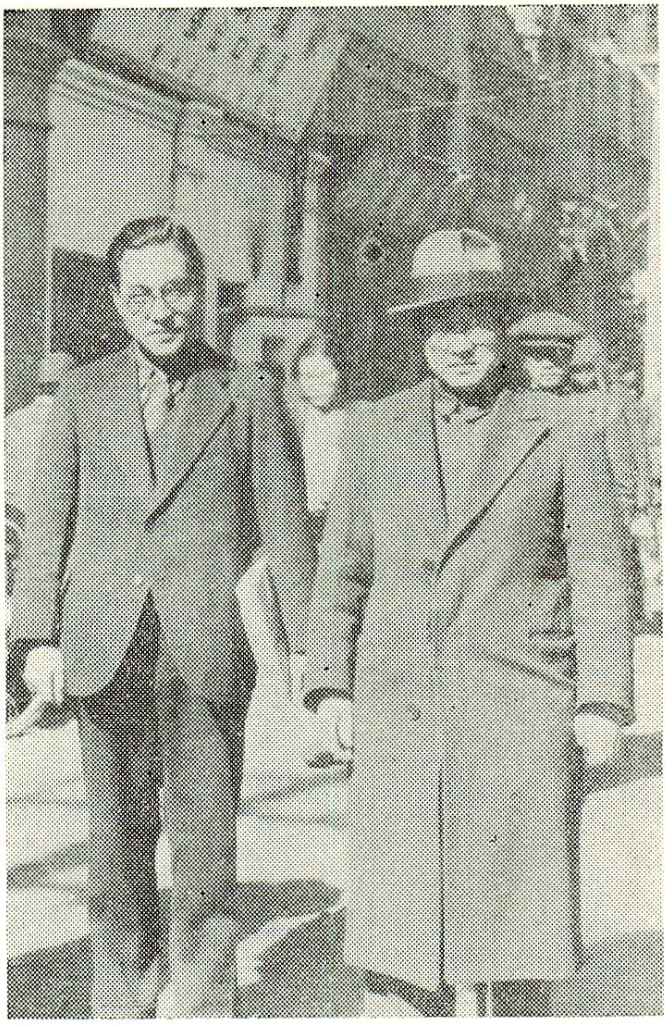
水に祈る

中国娘の語学教師

私は、昭和一四年徳王主席を首班とする蒙古政府に招聘されて、同年九月に政府の首都張家口市（現称中華人民共和国カルガン）に向った。山海関に到着し、秦の始皇帝が蕃戎の侵入防止に築いた万里の長城の雄大な規模を望見し堂々たる勇士の如き気迫を感じた。

北京駅に着き秋の色濃い中国北方の都から、また、列車を乗り替え八達嶺の谷底を無気味な気笛を耳にしながら北京から八時間で異国の首都張家口市に第一歩を印した。

そこは蒙古という印象とはほど遠く中国人が多くラクダ隊商の蒙古人は稀にしか見ることのできない首都であった。早速司法部に配属され泥縄式の中国語を話していると給仕の朋君が素



岸盛一氏（右側）と筆者（張家口市内にて）

直になじみ、標準北京語を早く覚えさせようと中国娘を紹介してくれた。そのひとは娘と言っても売春婦であったが日本人に対する劣等感もなく特殊の情感も表わさず淡々とした指導ぶりであった。私たちは、先生と生徒の交際で西瓜の種や、果実を喰べ中国語を勉強し、彼女は日本語を絶対使用させない厳格な教師であった。私より、ややおくれて妻子が到着した。妻子が着いてからまた先生を訪ねたが、その良き教師の姿はなかったので、店の主人と同僚にも聞いてみたが彼女の行方は知らぬという返答であった。

黄土の家の人々

私は、穴居生活者の家を見て中国人の実に合理的な生活に感嘆した。灼熱の夏は涼しく、零下四〇度の厳冬には暖い。資産のある人は、黄土で家を建築し、外敵の防壁も黄土である。

食生活は気候風土に合った油と火力を用いるから食中毒は殆んどなくニンニクと唐辛子は彼等の必需品になっていた。買う井戸水は塩分が強く鉄びんも損傷する程で、塩化加里を除去するため鉄びんに真綿を入れても、なお、日本茶の味は塩辛いものであった。

中国人は、金銀財宝を壁に、食糧・繊維は黄土に埋没貯蔵する特殊技術を持っていた。日本の大財閥が巨大な倉庫を建て利潤を追求する余り保管に耐え得ず売り出すのを中国商人は待っていて一せいに買い占めて黄土の倉庫に貯蔵し、品薄による値上り待って売捌く商法に日本の大商社は惨敗を喫していた。

当時の日本軍は旭日ののぼるが如き快進撃であったが中国人民は戦争には無関心を装っているようであった。政治家に対する不信感なのか、我々に解せない不思議な感情を示していた。日本軍到着の情報が入ると若い婦女は、忽ち姿をかくし、残った老人だけが日の丸の小旗をふる演出は小憎らしいほど鮮かであった。

苦力（クリー）（労務者）に土運びをさせるとスコップに二杯位入れて、ゆっくり作業するのを性急な日本人指揮者が快々的（カイカイデー）（早く）とせきたてても慢々的（マンマンデー）（ゆっくり）という態度である。日本人労務者は性急で作業は早くても喫煙、休憩時間が多いから苦力達の能率より劣り、兎と亀の譬

のとおりになってしまう状況であった。指揮者は怒ったら資格喪失視される。

怒一瞬、悔百日という中国の諺がある。また苦力達は、一年間働いて胴巻に貯えた金を一夜の賭博に楽しみ、惨敗して無一文になっても悔むどころか決して相手を憎悪しない達観した旺盛な精神力は教訓に似た価値があった。現在、中国が紅衛兵に一日五〇キロを徒歩で北京に集合させるのは、忍耐心と愛国心を培わせ祖国の広大なる国土を知見させるためだと言われているが現在の日本人青少年の資質、根性とは格段に異ったものが生れつつあるように思われる。

彼等の祖先は不干渉主義で、他人を中傷することを慎み、夫婦喧嘩は街頭で互に立会演説をして、いずれに欠点があるか聴衆に決めてもらうという風流な争い方は仲々ユーモアなものであった。また、老人たちは、柳の木蔭で鳥禽を鳴き合せ心魂を憩わせる光景は戦時下の激しい世相にも迷わず己れに打ち勝つ心が感じらる無気味さを感じさせた。一方、ひとたび信頼した者に対しては絶対の服従心が強固で、水火も辞さない心構えがあった。日本軍の憲兵隊が密偵を捕え白状させるために水ぜめ、火ぜめの言語に絶する拷問にも口を閉じ情報を与えず憲兵隊の日本刀が敗北する場面が多いということが言われていた。

私が勤務する最高法院に纏足しない洋装姿の小柄な少女の現地人タイピストが採用された。彼女は正確な北京語で我々の中国語に厳しく注意し、特に万八（ワンバー）（馬鹿）という言葉は相手に強い反抗心を起させることや、法院職員の心構えを機敏に注意する好意を示してくれた。私が書

内蒙古の砂丘にて（中央筆者）

記官（現地人）宅に招かれたとき、その妻君を紹介されなかったろうと現場を見ていたようなことをいうので、その書記官は、私を警戒したのかと尋ねると不明白（ブーミンバイ）（知らない）と理由を言わなかった。

後日、彼女の家に招かれたとき、彼女は優雅な中国服を纏って私をもてなし、両親からも大いに歓待され、つい飲み過ぎて帰宅しようと別れを告げると、彼女は不信（ブシン）（だめ）とたしなめた。街頭で酔態を見せるのは日本人だけで、現地人から侮蔑されていること、まして法院職員としてあるまじきことであると彼女は洋車（人力車）を傭い車夫に私を法院宿舎まで責任をもって送り届けるようにと命じた姿は厳しいものであった。

当時、中国人は、法院に対して畏敬の念と信頼心を強くもっていた。

無装備と収賄

砂漠地帯に殺人死体があるというので関係者と現場検証に同行したとき砂丘の窪地に珍らしい貯水池があった。強い塩分を含有し岸辺に黄白色の塩が自然にできており塩を貴重品扱いにしている現地人は喜んで採取した。この塩は中国料理に欠くことのできないものになっているということであった。

狼の群が出現するかもわからないといっている矢先、前方に動物の大群が、我々に向って来た。それはノロという動物で脚力は自動車と競争する力があり、暫くの間、自動車と走る競争をして抜きつ抜かれる愛嬌をサービスをして、また砂丘の彼方に帰って行った。

我々が部落に到着すると、そこの首長始め部落民は好奇の目で迎えた。その日は首長の家に宿泊することになったが、この部落は要注意のところで、私が拳銃を持っていることを予想し、拳銃が欲しいので私の命を狙っているらしいということを通訳が教えてくれた。私は就寝のとき衣類を脱ぎ非武装を示すと首長が入って来て出入口のところに番犬をと身長五尺余の黒い巨大な蒙古犬を連れて来た。この蒙古犬は人間を簡単に噛み殺す獰猛な犬であった。おそらく首長も私の非武装を知って態度を替えたのであろう。深夜、用便に立つて便所に行くと扉の

外で蒙古犬は忠実に私の見張役を果していた。

翌朝現場に行って見ると遺体は狼か野鳥に喰い荒され白骨化し、異様な情景を呈していた。

我々が帰途につくとき首長が篭を二個差し出した。その中味は鶏一五羽位と玉子一〇〇個位入っており、政府役人がこの辺境地へ来た御苦労に対する部落民の返礼だというのであった。

役人が部落の財産を貰うことは汚職になることの説明をしたが説得力不足で通訳に助力を求めた。彼は、日本人はすぐ収賄を云々し、相手の面子（メンツ）（顔、立場）を潰すからその非常識さに反感を買うのだ。面子を重んずることは現地人を信頼させる大切な要素である、と説くので致し方なく首長に好意を謝し、法院に持ち帰り職員の間で均等に分けるよう指示したものの、どうも後味が悪く釈然としなかった。

没法子（メイフワズ）（仕方ない）と露店食

私らの現地の食生活に安価で気節に適した物としては中国飯店と露店食は大変美味なものであった。厳冬の夜、飯店前で飢えと寒さのため落命寸前の中国人に出合った。私は憐憫の金を少々与え、店主に

「同胞に残飯と酒位与えるのが人情でないか」と詰問すると

「あなたは無駄なことをした。働かずに死ぬのは没法子（メイフワズ）（仕方ない）だ、死体はすぐ隣の店先

に転がすから心配無用」というのである。遺体を順次転がして鉄道線路の近くにおけば凍死者として、市役所が集めに来るというのである。

このような具合で、日本の街頭で見掛ける乞食の姿は遂に見なかった。彼等が執着とか、きりのない欲のしがらみを持ち合せていない証左なのかもわからない。

私が中国服を着て労働者たちが集る露店食街に行ったとき、先日僅かな金を与えた中国人が私に近寄って来て先のお礼の代りに、ここで一番美味のものを食べさせると、蝿が群がっている食品を求め試食をすすめた。それは豆腐汁に唐辛子をかけ生ニンニクも添え、まこと、美味であった。当時中国が四億の民になった源は、この食生活に遠因があったのかもわからない。

彼は大人（タイジン）（私への敬称）が法院の職員であることは、ここの人々に周知されているというのである。彼等の正確で素早い伝聞は文盲でも侮れぬものをもち護身術でもあったらしい。また、ここは密偵が互に火花を散らしているが日本人は如何に変装しようと肩が角張っているからすぐ露見することも語ってくれた。

日本帝国敗れたり

昭和二〇年四月に入ったとき現地人職員から日本は太平洋戦争に敗れていることを聞かされたが、大本営発表を信じていた私はその情報を容易に信用しなかった。

私のラジオはＪＯＡＫ（ＮＨＫ）しか聴取できないようにダイヤルをハンダーつけにさせられていた。現地職員は、そのハンダーを剥離してダイヤルを動かしてサイパン放送を聞けるようにしてくれたので、私は深夜になってから、ひそかにラジオのスイッチを入れ耳をあててサイパン放送を聞いた。サイパンからの日本語放送は日本軍の敗北を報じていた。

もし、ダイヤルのハンダーを剥離したことを日本憲兵隊に密告されたら私たちは日本軍刀の露と消えたであろうが、幸いに密告するものはいなかった。

日本国が太平洋戦争に敗れることを知りつつ我々日本人職員の指示に従っている現地職員の胸中に解くことのできない謎のようなものを感じた。

いよいよ日本軍の戦況が不利となって風雲急を告げる八月一三日に私に対する召集令状が届いた。

私が軍籍に身をおいたのは、この召集令状が初めてであった。

私は初めての召集に覚悟をきめて身辺を整理して急拠入営した。忘れもしない八月一五日、その正午近くに中隊長は兵隊全員を兵営の庭に整列させた。

中隊長の気を付けの号令と同時に営庭に設けられたラジオから天皇陛下の戦争終結の御詔勅が放送された。

この放送を拝聴しているうちに慟哭の声は営庭の隅々に津波のようにひろがった。

敗戦によって日本官民が退却する列車が編成され、その最終列車に私たち兵隊も同乗して北京へ向って発車した。

この年の八月は異状な降雨つづきで、篠つくような雨は一ヶ月も続いた。我々は食糧不足で栄養失調となり、ことに列車内の乳幼児は母乳不足で命脈を絶たれるものが続出した。そのたびに列車を止めて線路のかたわらに幼児の遺体を埋葬し名も知らぬ花一輪を供えた。別れの気笛は谷間にこだまして一層の哀れさを誘った。敗戦のショックからの落伍者は、列車の中で自から銃口をかみ自からの足指で引金を引き自殺するものが相次ぎ、列車内は焦躁感がつのるばかりであった。情報によると北京に通じる鉄橋は爆破されて、列車は太原へ向った。

我々は、爆破された鉄道を修復しつつ、列車は八月一五日の終戦の日から三〇数日かかって疲労困ぱいの末ようやく太原市に到着することができた。

太原市は閻錫山将軍の指揮下にあった。市内の城壁のいたるところに、将軍の名で

「日本人に危害を与えた者は厳罰に処す」

という壁新聞が貼ってあった。日本人は将軍の好意で小学校に収容され食物も配給されたとき……嗚呼……我々は生きて祖国に帰れるという希望と喜びが湧いた。将軍から

「三八式歩兵銃を持っているとトラブルが起きる心配がある、銃を国府軍に渡した方が日本人の身の安全保障ができると思うから、つらかろうが銃の御紋章を消滅して渡しなさい」

という温情ある命令がくだされた。

私たちは早速、銃の御紋章をヤスリで消滅にとりかかったが御紋章が涙にかすんでしまった。そして銃を渡した。将軍から衣食住も保障されたお蔭で天津の日本人収容所にも無事に辿りつくことができた。いよいよ母国に生きて帰れると思った。収容所では、毎日早朝から労役に従事し、日本軍の残した衣類を数える作業は単調であったが病気で寝ているよりは、はるかに幸せであった。

しかし、会話の中心は日本にいつ帰れるか、日本に帰ったら男子は炭鉱夫にされる、いや、婦女子、老人を除いた男子は中国に残留させられるとか、悲観的な情報が流れていた。

一二月初めに突然に帰国許可が出された。喜びの収容所内は、てんやわんやで騒然となった。手荷物の検査（リュック一ケ）も無事にすんでタンクー港へ移動してアメリカの輸送船に乗船し、奇しくも一二月八日（太平洋戦争開戦の日）に、懐しい母国の博多港に接岸した。母国の土を目の前にしての検疫の時間は殊更に長く感じた。いよいよ上陸である。日本の土だ！　真先に日本の水を飲んだ。このとき口にした水は砂糖水のように甘かった。この感じは今なお忘れ得ない。国敗れて水清き山河あり。日本の水よ！　永遠に甘く静かに流れ続けて欲しいと祈る次第である。

犬のまごころ

犬のまごころ

私は動物のまごころに感謝の気持で拙筆をとる次第である。私達一家は十人家族で鉄筋宿舎の四階に住み、子供たちは犬を飼う希望が強かった。妻は、さらに手数のかかることをおそれたが、生後五十日のスピッツの牝犬を飼い子供たちの多数意見で「メリー」と命名した。

妻にとっては、もう一人の子供ができたのと同じであった。多人数の生活に苦労の多い日が続いたときであるからメリーは妻の忍耐に救われたのである。

宿舎が四階で、しかも、鉄筋とあっては、メリーは犬として生活環境はがらりと変り、内心大変なところに住み込んだと嘆いていたかもわからない。早速、もう我慢ができないと思い余って座敷の隅に小便をやってしまった。

これを発見した妻は

「メリー駄目よ」
と雑巾で畳を拭き、メリーの顔を畳に押しつけ、駄目よ、駄目よ、と説教していた。
メリーはコンクリートの玄関や、ベランダに用便する習性はなかったのであろう。説教される方こそ迷惑な次第である。妻の言葉を、どのように受け取ったのか、彼女は両足をつき、妻の顔をのぞき本当に申訳ないと言っているかのようである。いかにも幼児が
「お母さん、ご免なさい」
と言っている表情と、少しも変りがないことに、私は幼犬といえども侮り難いものを感じた。女性には、こういう微妙な心理は即座に理解できるのか、妻は砂を小箱に入れ玄関におき、メリーに
「ここよ、ここよ」
と教えている。白い小柄な顔をかしげて目だけパッチリ開いてきき入っていたが
「何を言っているの！　私は知らない」
というような素振りで座敷に戻ってしまった。翌日、私の出勤のとき、一寸の間、メリーの姿が見えないので、次の部屋を見た妻が大声で飛び込んで行った。今度は大便をやってしまったから、妻もたまりかね
「又やったわね」

と荒々しい言葉で叱っている。その剣幕によほど驚いたのか、メリーは腹を上に向けて恐縮いたしました、と言いたげな表情をしている。

妻は今度やったら承知しない、と大便の跡始末をしてやった。人間の子供なら直ちに尻を二つ位叩かれるところであるが、メリーは犬であったために叩かれずにすんだのである。

ある日、私が役所に出向くため靴を履くと、メリーが盛んに吠えているので

「お父さんを送りたいの」

と妻は首輪に紐をつけて階段を降り始めると、転がり落ちるように私の後を追って来て、雑草のところに突走り、そこで用便をした。

妻に叱られるのを恐れて、我慢していたのであろう。用便が終ると

「ああ！　よかった」

と晴れ晴れとした表情であった。このことが動機で、外での用便がメリーの日課となってしまった。私は犬が相手に腹を見せるのは、その者に対し、最高の愛情を示すことを意味するのだと後に知ったが、してみると、メリーが最初の愛情を示した相手が妻であったわけである。

幼犬に、最初に信頼されたのは妻で、犬との心の交りが始まったのである。妻の言葉が、小犬に分るはずがないと考えた私は愚かであった。人間は初心が、如何に大切であるかを痛切に感じさせられた。

妻の言葉がよほど身にしみたのか用便では、手数をかけなくなったが、夜中妻の枕辺に来て一生懸命に髪の毛を引張っているので、妻は

「メリーなんなの」

と言うと、どうも襖を開けてくれということらしい。襖を開けてやると玄関に行って吠えている。つまり早く玄関を開けてということらしい。

真夜中のことだから幼犬は、階段を降りようとしても恐しいのか、妻の顔を見上げ降りようとしては、振り返り妻に「連れて行って」と幼児が親にせがんでいる姿と同じである。やはり用便に行ったのである。

一目散に馳け上って来て妻の夜具の側で身体を思い切り伸して安心して寝てしまった。妻とメリーは、少しずつ、お互いの意思がわかるように成長した。妻は、大世帯の朝食と数人の子供の弁当作りに一苦労していた。子供を起床させる仕事も相当の負担であった。

子供たちの起床をメリーにやらせてみた。まず、長女の名前を言って、起すことを命ずると、早速長女の部屋に行って、その夜具を鼻の先で、めくり上げ、長女の顔を長女が目覚めるまで舌でなめ廻している。長女もたまらず、

「私を起してくれたの」

と抱き上げ愛撫しながら起きて来た。この方法は、ほかの子供へも順次大成功をおさめた。

妻は次に「お父さんにハイ」と新聞を与えると、小さな口にくわえて、私の枕辺に運んで来て、尾を振りながら、

「早く取ってちょうだい」

と言わんばかりの態度である。私は

「有難う」

と頭をなでてやると、このときもメリーは腹を上に向けて喜んでいた。

小犬が私に対しても信頼の情を示してくれたことに嬉しくなり、その腹をなでてやると、起きあがってきて、私に戯れて来た。

私も童心に帰って夜具の上で互いに戯れた。そのとき妻は

「お父さんにハイ」

と煙草を出すと、素直に取りに行って私のところに持って来た。妻の言葉は乳呑子に対するような心の響きを、この幼犬に感じさせているのかもしれない。

私たちは、メリーの飼い方を日本犬同様に考えていたので、ご飯に味噌汁をかけて与えたが、不服なのだろうか、どうしても食べない。これには妻も困惑してしまった。毎日牛乳を与えるだけの余裕はない。

私が食堂でパン食をしていると急に吠え出した。私はバターをつけたパンを少し与えると一

呑みに食べた。なおも、催促するので、妻が小いすを持って来てメリーを坐らせた。
食卓にバターがあるのを見付け背伸びして眺めているので、パンにバターをつけて私が食べて見せると又せがむので与えると願いごとが叶ったというふうに食べている。主人が食べたものでないと食べないという用心深い気持もあるらしい。
それ以来、私は食べて見せてから食物を与える習慣をつけたので、如何なる大好物が、手の届くところにあっても盗み喰いはしないように成長していった。
子供たちが冷蔵庫をから勝手に物を取って、妻に詫びごとを言っている様子と見くらべ、子供たちの哀れな心に同情しながら、メリーを例にとって戒めてみたが、子供たちは、犬と人間を同様に考えては困るというように不満の表情をあらわしていた。人の目を盗むことは、人の物を盗むことと同じだとは、幼い子供たちには悟れなかったのだろう。
登校を急ぐ子供たちは食卓に坐るのに、間違ってメリーの小いすに坐り猛反撃を喰って苦笑しながら、ご免よ！　と言うと
「これは私のいすですよ」
と言わんばかりに早速いすに飛び上って占領している姿は完全に事物の判別を覚えた証拠である。私たちとメリーの心の交流も次第に進み子供たちとも互いに愛情が芽生え、メリーの送迎を期待するようになった。

メリーは朝食の仕度をしている妻の後姿を追いまわして妻が水道の栓を開くと水音を聴き、流し台に両足をかけて、何かを訴えるように水の流れを見ていた。妻が

「メリーお水が欲しいの」

と水を汲み与えると本当に美味しいと、喜びに溢れピチャ、ピチャと音をたてて呑んでいる。

「メリー美味しいか」と言うと口の廻りを舌で何回となくなめている。

そのとき以来「美味しいか」という言葉を知った。こんなことがあってメリーは家族に愛され人気の中心になり家庭に明るい灯をともしてくれたのである。

暫くすると、私の出勤と帰宅を意識するようになった。私が玄関に向う先に玄関に行って私たち夫婦を待っているのである。

私が靴を履くと玄関のハンドル目掛けて飛び付き、自分の足でハンドルを廻わそうとしている。妻が首輪に紐をつけるのを、もどかしそうにしている。

結局、妻は階段の往復を余儀なくされ、朝の日課として私を見送らされる結果となった。

この光景は近所の夫人たちの羨望のまとになったようでした。私は途中で

「もうお帰りよ」

と言うと主人を見送った安心感なのか甘えているのか、私が手を振り上げるまで振り返っている姿は、いじらしく非常に心温まる思いを味合わしてくれた。

ときには、帰宅をすすめても中々帰らず、妻の手を振り切って、なお追いすがる日がある。私の心に満足しないのか又私の身に変事でも起る予感を感じているのか薄気味の悪い日がある。

私は、その日はあらゆることに用心し殊に乗物には用心することにした。犬は人間に理解できない特別な霊感が閃くのではないかと思った。

私は職業柄帰宅時間が近所の人より遅く、妻や子供たちは夕食を済ませてテレビを見ているときが多い日々を送っていた。

私が階段を昇って行く二階の階段辺りの足音にメリーは私の帰宅を察知するのか姿勢を正すので家族は私の帰宅を知らされていた。私が帰ったときはテレビが入っていても必ず耳をピンとして挙動が変るということであった。私が玄関に立つて扉を開くとメリーは声をあげて部屋中を一巡して、喜びの感情を表わすのであった。

それは幼児が父親のもとに馳け足で走り寄るのと同じ情景である。走って来た勢いで飛びつき、その体を抱いてやると体のぬくもりが伝わり、また私の顔や手をなめるのである。

この幼犬の迎え方に、私は新婚時代のことを、あらためて想い浮べ苦笑しながらメリーを撫でてやると、その喜びようは、純真な気持を素直に表わしてくれた。

主人の帰宅を最大の武器である感覚と臭覚で察知し、率直に己れの心を表わせるのは動物の真心が、そうさせるのだと思った。

私とメリーの間柄を見た子供たちは

「私もメリーになりたい」

と不満気な口吻を洩したので、口で言葉を言えない動物の心を説いたが子供たちは率直に受取ったかどうか疑問に思った。メリーをこのように仕込んだのは妻である。

家庭になくてはならないものは、平和と妻の存在である。しかし戦後女性と靴下が一番強くなったと言われる。封建性から脱皮して強い女性になったのは好ましいが、豊かな知性と教養を身につけることが大切ではないだろうか。

最近、離婚が多いといわれるのは夫婦の心に和合と誠意の不足から起っていると思うのは私ばかりではないと考える。

男性は外に職業を持ち相当苦しい試練に会い、忍耐と見聞を広めることができるが、夫人たちは家事に追われ、教養の時間不足もあろうが、しかし妻は夫を自由に、楽しく働かせる役目を果してこそ、家庭の両輪となり得るのである。

子供たちが登校の際に、学費を貰うとき、妻が財布から金を出して手渡しすると、手を出している子供に対してメリーは何故か怒って吠えることが度々あった。特に集金人が来て金を支払うときは怒ったように吠え続けているのには閉口した。

試みに財布をメリーの前におくと前足で、しっかりおさえて用心深く見張っているのは八才

になっても続いている。メリーも妻の財布は大切な物と思い込んでいるらしい。
私の初孫が訪ねて来るとメリーは、このときも部屋中を馳けめぐって歓待の態度を示すので、幼ない孫と仲良しになった。
そして昼寝をしているとその間枕辺に坐って見守り、母親の入室すら拒むのである。それでいて孫が目覚めると母親に知らせに飛んで来る。
私が二週間程病床にあったときも、主人の病状を心配するのか、やはり枕元に坐って長時間見守っていた。時には私が寝ている夜具の上に身を伏せ耳で私の呼吸を聞きとっているような態度を示したこともあった。
ある日のこと、私のところに手乗り文鳥が迷い込み、メリーと仲良しになって帰ろうとせず、文鳥はメリーの背や頭に乗って互いに遊んでいた。まことにほほえましい光景であった。
この文鳥も食事時になると必ず私の肩にとまり、私の口許あたりまで降りて来て、食事をとっている私の口から米粒を喰べようとするので私もなすがままにしていたが、たまたま隣のいすにいたメリーが、どうしたことか文鳥に敵対行為を示して吠えた。そして文鳥の足に少し傷をつけた。文鳥に出血どめに赤チンキを塗ってやっている間、今度はメリーの方が心配気な顔をしている。私が帰宅した時メリーと私の目が一瞬ふれ合った。私はメリーのふだんの迎え方と違っていることを感じた。

私は洋服を着替えてメリーのところに行って見ると文鳥は落命していた。メリーがその文鳥を己れの腹に抱いて哀れみと後悔の情感を表わし、私に詫びごとを言っている表情が汲みとれたので私は何も言わず、その側に行って頭を静かになでてやった。

ある夏の午後のひととき、所轄署の刑事が空気銃の、いたずら小僧の聞き込みに訪ねて来た。私が在宅していたので家族は安心して玄関の内鍵をかけてなかった。その刑事は、呼び鈴を鳴らさず玄関の扉を開けたので、そこで午後の睡眠をとっていたメリーが突然の侵入者と考え咄嗟的に刑事の足に噛みついたことがあった。

私たちは冷汗を流しながら平身低頭して詫びた。刑事はお宅はこの犬がいるから安心ですねと言ってくれたので助かった。もし刑事が許してくれなかったらメリーは保健所行きとなり二度と私たちと暮らせなかったかもわからない。妻が狂犬病の予防注射をしていてくれたことがせめてもの救いであった。

メリーの用心深い番犬ぶりに押し売りなどはメリーの吠える声だけを聞いて帰ってしまうので、妻は押し売りの撃退の苦労を味合うことがなかった。階下の夫人らは相当な神経を使って押し売りを断っていた。

鉄筋アパートであるといって女は安心して留守番ができない。建物の構造上密室になっており隣家にも声が聞こえないようにできているから心悪い者が目的を果すことは容易である。殺

傷事件が起っても物盗りが入ってもわからない建物である。私の玄関に（犬）の表示があるだけで、犬がいるぞということで大変防犯に役立っているのである。

私は壮年時代は、いわゆる亭主関白で我侭者であった。そのうえ高血圧に悩まされ家族にかなり精神的な負担をかけていた時代があった。

ある日の朝食のとき妻が、些細なことを私に言ったとき、私は立腹して「何を！」と妻に乱暴しようと右の手を振り上げた瞬間、メリーは私の右手を噛んで離そうとしない。小犬とは思えないほど強い力の歯が手にくい込んで、鮮血が畳を染めた。私は飼い犬に噛まれて、やっと我に返った。

自分の愚かさを哀れに思ったとき、平静な心に戻り、メリーも、私の手を離した。私がメリーの目を見つめると、飼い主を噛んだことを後悔している様子があまりにもはっきりと感じられた。メリーは早速私の手の鮮血を自分の口に呑み、舌でなめながら申訳ないと言いたげな表情をしていた。家族も驚きの余りメリーの様子を見ていたが、俄かに薬を捜し始めた。私は敢えてそれを止めた。それはメリーの態度に自分が傷つけたものは、自分が直すという意気を感じたからである。なるほど数分と経たない時間で、止血してしまった。

私はメリーに怒りに対する戒めを受け、そして手当を受けた。世にいう夫婦喧嘩は犬も喰わないという諺を体験させられたのである。自惚れた心の愚かさをメリーに思い知らされたこと

を有難く思った。私は感謝ということを忘れていた。犬には信仰心に似た誠があるのではないかと心ひそかに考えた。

私が何かにつけて立腹するたびにメリーは「やめて！」と言うように吠える。なるほど立腹ほど体を悪くするものはない。身の機能を一時的にもストップするように思える。

人間は立腹のために前後の考えもなく取り返しのつかない事態をひき起すことがある。

子供たちが学校から帰宅すると、次々に、いたずらをやらかすのに業を煮やした妻が、ものさしや、ハタキをもって子供を追い廻すが子供の方が逃げ足は速い。この状況を見たメリーは妻の着物の裾をくわえ、軽い体を四つ這いになったり、必死になって妻の足に抱きつき妻をなだめている光景を見たとき私はメリーは争いがいやで子供たちを守ろうとしているのかと思った。妻も心の平静を失ったこと見抜かれず恥かしくなって子供を叱るのをやめ

「あんたお母さんを止めてくれたの」と抱きあげ愛撫している情景は、本当に心温るものを感じさせた。

犬でも我が身を考えず人の良くなることを希う誠の気持ちを表わせることを羨しく思った。

メリーは争いごとが嫌いらしい。テレビでプロレスをやっているのを見ても吠え続けている姿を見せられ、闘犬を業として人間生活に尽す犬もあるのに！　犬というものは元来は優しい動物なのかも判らない。

私たちが、ときどき戯れに夫婦喧嘩の真似をして、妻が悲鳴をあげて見せても

「私を騙そうとしても知っていますよ」

と馬耳ならぬ犬耳である。犬は三日飼われれば、その人の恩を忘れないというが、最近の人間関係にはうるおいが不足していないだろうか。私利私欲にかられ、人命の尊さも失われ、良識があれば不可解とも不思議とも思われたことをなんら考える余裕もない世相である。

少年たちは自分の遊びが正しいと思っても意外な落し穴があることに気付かない遊びをやっている場合もある。そして少年が過ちを犯すと大人たちは直ちに非行少年と批判するが、まず大人が先に襟を正した生活を営むことを、あらためて反省する時期に来ているのではないだろうか。

新聞、週刊誌やテレビも善行を報道をしないのみか偽善者の行為をあばき、兇悪犯罪を詳細に、活字を大きく、次の誘発を考えさせるような報道ぶりは果して正義の心と言い切れるであろうか。世相を明るくするのも又暗くするのも報道関係が如何に強力な影響力があるかということを、あらためて認識して貰いたい。テレビも又しかりである。善を愛し感謝の思想を含む心温まる出来事の報道に重点をおくようにしてはいかがと思う。

人間の幸せは人から得るものでなく自分の力で得るものと思う。自分を強く守り他に迷惑を及ぼさず万物に感謝の心を体得できる人は自然に幸福が生れると思う。だから不平不満を持た

ない人は容易に幸福を掴み長い一生の間に大きな相違が生れるのではないか。生活難や災難を蒙っても自分に与えられた試練と考えられる境地になれば己れ自身に打ち勝つことができるのである。天国も地獄も結局己れの心から招くもののように思える。誠に対して強い欲望心や嫉妬心は敵である。心配事や苦労することは結構であるが、心痛や取り越し苦労は避けることが大切である。善と感謝は表裏一体であるからいかなる苦難も乗り越えて、さらりと微笑で過せる人は幸せである。このようなことを考えるようになったのはメリーの真心のお蔭と感謝しながら私は彼女の頭を優しく撫でてやりました。

一〇余年間住みなれたところから新築の公務員宿舎の二階に移転をすすめられて、さきの宿舎より二七階段、昇降が少くなった。愛犬メリー(牝犬スピッツ種一一歳)も私たちと新居に移った。私たちは新居に移って昇降の労力が少くなったためか下半身が弱くなる現象が表われ始めた。メリーが一番先に老化現象をあらわし、僅かの階段の昇降に息をはずませるようになった。

メリーは、我が家の強力な奉仕者であった。妻が、操作する電気洗濯機や掃除機の騒音で、電話のベルが鳴っても、玄関の呼鈴を連打されても気付かずにいると「お母さん、電話よ!

電話よ！」と電話に向って吠えて教え、また「お客さんよ！」「お父さんのお帰りだよ」と吠えながら玄関に走って巧みな表現で通報することが得意であった。また、一人留守居の妻に対しては非常に協力的で、良き話し相手になれる位に妻の言葉を解して反応を示していた。

日曜日などは、ものぐさ者の私の欲望を十分に果してくれた。つまり、お茶が飲みたいとき、たばこがなくなったとき、新聞を見たいとき、そのことの用件を紙片に書き込み、メリーを呼んで「お母さんに持って行って」と口にくわえさせると直ちに妻のところに持って行って、お茶こそ運べないが、新聞やたばこは口にくわえて持って来てくれるので、頭をなでて労をねぎらってやると尾を振って目を細め喜びの表情をあらわし、私のそばにぺたりと座って役目を果したことを満足げに

「私も結構お役にたつでしょう！」と語っているようなしぐさをしていた。

私たちは、ピーコー（せきせいいんこ）という小鳥も飼っていた。このピーコーをメリーは非常に可愛がっていた。鳥かごから出たピーコーは部屋中をいばって歩きまわりメリーと二匹の動物は交友を温めていた。ピーコーが裁縫をしている妻のもとに、そっと忍びよって針箱の縫糸を目茶目茶に解き叱られている光景は珍妙で、メリーも首をかしげて見つめていた。

或る日の夕方、私が牛乳を飲んでいるときメリーも欲しがり小皿にわけてやると、そこにピーコーも仲間になって仲良く飲んでいたが、突然に甲高い吠え声に驚いて見るとピーコーはけ

いれんを起し間もなく落命してしまった。

私は、動物同志にも礼節のあることを忘れてメリーの心に乱れの因を与え、災の種を播いた張本人であるからメリーを叱責する気持ちになれなかった。軒下の庭の片隅にピーコーを埋葬するため小箱に入れて階段を降りるとメリーも浮かぬ表情でついて来た。小さな穴にピーコーの遺体を入れた小箱を埋めるとメリーは顔中泥まみれになって前足で掘り起そうと猛り狂って制止する私の声がわからないほど興奮していた。

埋葬が終っても、その場から離れず、うずくまってしまったのでひとりにしておいた。辺りが暗くなってから足取りも重く帰って来たので、家族が「お帰り！」と声をかけても私たちのそばを素通りして子供のベットの下にもぐりこんで、暫く姿を見せなかった。

数日後メリーの運命に容易ならぬ変異が起った。それは、宿舎を管理する財務局から家畜類は、速かに処分せよという通達の回覧が回って来たからである。

私たちは、家族の一員として互に信頼し一家の明るい灯のような存在であったメリーをいかに処分するか名案が浮ばないので困惑してしまった。保健所に連れて行けば、屠殺されることは間違いなく、動物愛護協会に連れて行っても老犬を引き取ってくれる篤志家もいないことは判然としていた。

あれ、これと心が迷い決断がつかず処分を延引していたために一番困ったことはメリーの用

便であった。一定の場所以外には用便しないように躾けをしていたから風雨にかかわらず同行しなければならなくなっていた。それで人目をはばかることの煩らわしさからのがれるために私の家の西洋便器で、用便させようと子供を抱くようにして西洋便器に向わせたが、この着想は見事に失敗した。犬の習性の片足をあげることができないから嫌うのも、もっともな訳である。ある日曜日に、電話で財務局職員だという人から犬を飼っていることのお叱りを受けた。日曜日なのにおかしいと思い姓名を尋ねたら電話は応答もなく切られてしまった。重ねて妻に、裁判所では宿舎で犬を飼ってもよいのかと、いよいよ具体的な非難の電話があった。

私たちは通達に副うべく日夜良き運命をさがしもとめていたが、主従の因縁の糸を断つことの苦しみに心が乱れていただけである。このようなことがあった数日後、私が帰宅し玄関を開けると、この日に限ってメリーの出迎えに喜びの情感はなく、いつもと異った空気に直感的に留守中に変ったことが起ったと感じた。妻は、その訳をすぐ語ってくれた。それは、宿舎管理人から「お宅だけに、なぜ特別扱いをして犬を飼わせておくのか」

という苦情が多くて、その応答に困るから早々に処分して貰いたいという電話があったということがわかった。

この話を、私のそばでジット聴いている老犬は、自分の宿命をどうすることもできず自分に都合のよい弁解もできず

「メリーをどこへもやらないで……」
とただ助命を哀願しているように受けとれた。
メリーは主人の用件を満たし、送迎も一番先で、留守番のときは絶対的な信頼があり、押売りも一しゅうし、盗み喰いもやらないし、用便も躾けとおりにやっており、妻のよき協力者であったのである。
管理人から電話があってからは、私に対する見送りは玄関でストップして、途中まで連れ出そうとしても、玄関から出ようとしなくなって、妻ともども散歩に行っても我が家から余り遠くへは行かずに引き返すことが多くなって、にわかに警戒心が強くなった。
嫁ぎ先の娘達から「メリーは元気か」などと電話で自分の名前がでるたびに、すごすごと卓子の下や押入れを開けて姿をかくすほど処分されるということに敏感になっていた。
わたしたちとメリーとの因縁は、メリーが生れたときから、結ばれる運命にあったのであるが、メリーにとっては極めて迷惑な因縁といわなければならなかったであろう。私たちもメリーも救われたいと願っても幸福という二字は逃げて悲しむ獣の運命は風前の灯であった。
そうこうしているうち、私と妻は茨城県鹿島町にある心身障害者福祉センターの藤原キミエ園長さんのお宅をお訪ねする機会に恵まれた。先生宅には三匹のワンちゃんたちがかけめぐっていた。私のそばにきたワンちゃんたちは私に牝犬メリーのにおいでもあったのであろうか安

心してすぐになついてくれた。園長先生にメリーの境遇と私たちの苦悩をお話しすると園長先生は

「可哀想に、メリーちゃんはわたしが預かります。連れていらっしゃい」

とまことにありがたいお言葉に私は飛びあがりたいほどの心地であった。

犬も歩けば棒にあたるという諺があるが私たちは愛情の巨木にめぐり会ってメリーは大変ありがたい幸運に恵まれたのである。

いざ鹿島の藤原先生のもとへ旅たつ日、メリーは子供たちから別れの挨拶をされて妙に沈んだ表情であった。

妻に最後の風呂あびをしてもらって体は真白く化粧されてから首輪に革紐をつけられた。私たちとならば、ふだんは喜んで表に出ようとするのに、この日に限って後ずさりし、がんとして表に出ようとせず妻をてこずらせていた。人間ならば

「わたしを連れて行かないでちょうだい」

とでも叫んでいるかのように……

それから四か月の月日が経ったいま、メリーは新しい主人の園長先生とよく睦み合って先輩のワンちゃんたちとも仲良しになり、新しい主人に感謝と報恩の心が芽生え白砂青松の地を楽しく飛び廻っているという。

時折、私たちが面会に行くと喜んで尾をちぎれんばかりに振りながら胸のあたりまでとびついては跳ね、跳ねては、とびついて大歓迎をしてくれる。

しかし、別れぎわには別に何も言わないでも、新しい主人の園長先生の足許に両足をきちんと揃えて坐り、そこから一歩も動かず私たちを静かにじーっと見送ってくれるほど心の余裕ができたことは、私のせめてもの慰めである。

国母皇后陛下

国母皇后陛下

私は、昭和二二年六月に農家の子弟とともに皇居の勤労奉仕をさせていただきたい旨宮内庁へご意向をたずねた。六月頃は農村の一番忙しいときで適当な時期でないから収獲が終った一一月ではいかがというご配慮をいただいて、許可書と一一月の奉仕日程表が届いた。

私が、どうして勤労奉仕を願い出たかというと、福島県の一寒村の農家の子弟たちは、敗戦による虚脱状態に陥っているときに都会の風潮であった放慢な生活に感染して勤労意欲を失ってしまっていたからである。

そして若い情熱を発散する余り身を誤る傾向がみられたので、私は彼等とその父兄たちに皇居の勤労奉仕の計画を話したところ、私の計画を素直にくんでくれたのであった。

もちろん皇居に対する好奇心もあったろうが意外に多くの賛同者が集った。

皇后陛下と青年たち（中央筆者）宮内庁撮影（昭和22年11月）

しかし、当時上京する旅費の工面も十分でないような生活状態だったので、窮余の一策をたて、各父兄に頼んで、リュックに入るだけの白米を貰って列車に乗ったのであったが、幸い検索にもあわず没収をまぬがれることができた。

その白米は上野駅附近で、ただちに金に換えることができたので、帰郷するときの旅費と小遣銭をつくった。

私たちが坂下門に辿りついたときは、日もとっぷり暮れ夜になっていた。やがて宮内庁職員に宿舎に案内され、奉仕に関する指示を受け皇居内の第一夜を明かした。一夜あけていよいよ勤労奉仕を始めることになった。

私達は皇居に立ち入るのは生れて初めて

であった。

その皇居の形容は、想像を越え戦災の爪痕は惨たんたるものであった。

鳳凰の間があったあたりは瓦礫が散乱しており、天皇陛下のお住いは、お文庫があてられており、まことに質素で、ご幼少の各宮様方のお住いの建物は、農家の上等の建物にも劣る簡素なものであったことは想像もしませんでした。

塀や柵なども倒壊寸前と思われるものも見受けられた。

我々は桑畑などの手入れや、その他の清掃にあたった。樹令数百年の巨大な樹木のなかから雉子や兎が親しく寄ってくる姿には、のどかな情感が湧いてくる状景であった。

奉仕の日程も終ってほっとしたその夜になって、明日は皇后陛下のご会釈がありますということを伺い体のひきしまるのを感じた。

当日、我々はお文庫の門の側に整列して皇后陛下のお出ましをお待ちしていました。

間もなく皇后陛下のお姿を拝した。最敬礼している私たちの方に玉砂利を踏む足音がだんだん近寄ってこられる。

この時間の長いこと。足音が消えたので頭をあげると私たちの目の前二メートル位へだてたところに皇后陛下が笑みをたたえて立っておられる姿に、びっくり仰天の極に達し、ひざ頭は、ぶるぶる、がたがたとふるえ全身緊張のため硬直しきってしまいました。

そのとき
皇后陛下は、こぼれ落ちるほどの慈愛に満ちた微笑と玉のように美しいお声で
「今年の稲作は、いかがでしたか」
私の心は皇后陛下のやさしいお姿に先程の緊張感が少し薄らいで
「はい、今年は天候に恵まれて収獲は割合多いので助かりました」
「それは何より結構でした。農家の方々は不自由なことが多いでしょうね」
「いいえ、農家は食べるものがあるだけ幸福であります」
皇后陛下の温かいご下問に私の胸は、ジンジン熱くなってご返答申しあげるのがやっとの思いでありました。
皇后陛下は
「養蚕もやっておられるのでしょう。忙しいでしょうが、若い方は頑張って下さい。このたびの奉仕をいただいて本当にご苦労様でした」
この優しいお言葉に私たちの魂も溶けるような感激を覚えた。私たちは、宮内庁から記念のたばこをいただいて帰郷し、それぞれの父兄にわけ与える喜びを味わったのでした。
若者たちは、皇后陛下に拝謁できた感激が日常生活の糧となって勤労意欲に目覚め、若者の心は、たくましくなり農村青年の範となりました。両親や老人たちも心から喜び青年の心意気

を見直してくれた。そして女子は良い夫に嫁ぎ、男子は良い妻を迎えることができた。
彼等青年の心には、皇后陛下のお心を子孫に伝える喜びが宿っていたのである。

そして一六年の歳月は流れた。昭和三七年五月に皇后陛下は薄幸の人々を慰め激励のお言葉を賜るため東京都立青鳥養護学校にご臨幸になられた。
私も、その席にはべることを許されて、お待ち申しあげた。国歌斉唱のうちに皇后陛下は壇上にたたれ慈愛に満ち、やさしいお言葉が講堂のすみずみまで響き渡った。
敗戦を背負った天皇陛下とともに長い苦しみに耐え、母親としてもご苦労が多かった皇后陛下であった。
そのお姿は国母陛下と表現するにぴったりのご容姿であった。
私は、万感胸にせまり涙がとめどなく頬をぬらした。
お言葉をいただく薄幸の人々の頬にも二筋の涙のあとが残っていた。皇后陛下の励しのお言葉は、やさしく温かく胸の中に伝わっていったためでありましょう。
終戦二〇有余年にして新宮殿のお庭に、あまたの星の光り輝くことを念じ、天皇、皇后両陛下のご健康を心をこめてお祈りする次第であります。

老優の覚悟

頼博書

老優の覚悟

昭和三九年九月のある日、東京家裁所長の内藤頼博さんから

「今晩、体があいていたら午後六時に新橋演舞場前に来るように」

とのお招きを受けた。内藤さんに案内されて客席に坐ると、新派の名女形花柳章太郎主演で「蛍」が上演された。刑務所から出獄したばかりの重一という男（大矢市次郎氏）と、人妻ときに扮した花柳先生が演ずる舞台であった。

重一は、ふだんはおとなしく、仕事もよくする物わかりのよい人間だが、酒を飲むと前後の見境いがなくなる性格で、酒が過ぎて妻ときの母を斬りつけた。彼は、自分は死刑か軽くて無期の刑になると思い、自分に愛想をつかしてむしろ死刑を願った。重一の親方と妻ときが刑務所に面会に来たとき

「可愛想なのはお前だ」
と言って重一は、ときを離婚し
「真面目な男と結婚させてくれ」
と親方に頼み、ときは栄吉という男と結婚することになった。
ときの母が一命をとりとめたので、重一の刑は八年に決まり、五年で仮出獄し、他の女と夫婦になって真面目に働いていたが、親方に死なれて弱い性格の重一の生活は乱れてしまった。ある日、重一は、酒の勢いをかりてときの家を訪ね、ときがひきとめるのを構わず上り込んでしまった。ときは殊更冷やかに重一の過去の不始末、親方の情などを説いて反省を促がし、本心にたちかえるよう心の在り方を説いたが重一は返事をしない。ときにさんざんいわせておいて彼は悲しく答えた。
「俺は弱い人間だ。生きて行くにはつっかい棒がいる、親方が俺にはつっかい棒だったんだ。その親方が死んで支えるものがなくなったんだ」
と自嘲的なせりふを残して、重一はときの家を去った。ときが、ぼんやりと沈み込んでいるとき
「ねえさん」
と近所の娘が窓の外から呼ぶ声にハッとして窓をあけると
「蛍を買って来ましたから」

と言いながら、娘はときに蛍かごをくれた。祭のはやしが遠く聞えて幕がおりるという内容で、今は人妻となった女とその先夫の出獄者との複雑な心情を純粋な愛情によって昇華した微妙な真心が、巧みに表現された芝居であった。

内藤さんから、この芝居は三宅正太郎裁判官の名著「法官余談」のうちの「或る素材」という随筆から、故久保田万太郎先生が作られたことと、いわゆる花柳十種のうちの一つで、一番キメの細かい名作であることを伺って一層感激を深くした。正木亮氏は、昭和四一年九月一八日付読売新聞紙上の「人間への信頼」の欄で、三宅正太郎氏は、出獄者への愛情の添木であったと評された。

内藤さんが

「君を花柳先生に紹介しよう」

と言って私を楽屋に案内されると、花柳先生ご夫妻は快く迎えてくださった。私は、花柳先生の化粧を落した容姿に接して驚嘆した。七〇歳の高齢で、なお、四〇女の役を演じられることを不思議に思い

「「蛍」を演ずるとき、後姿を幾度も客席に見せますが、非常に人妻の哀愁を感じました」

と私が感想を述べると、先生は

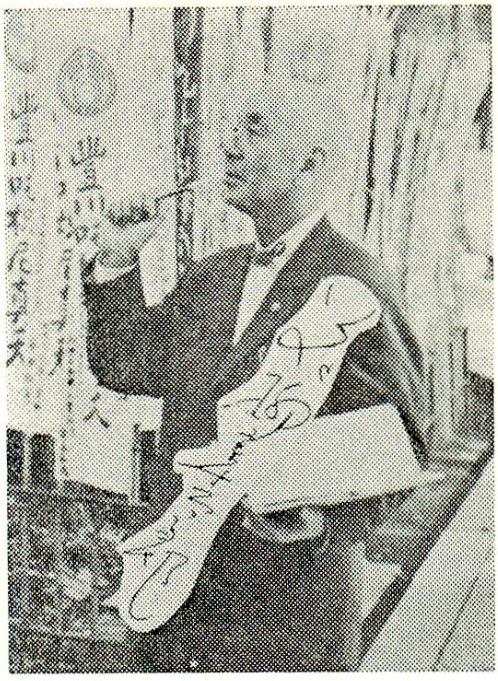
「女形の役者が後姿を見せられないうちは、一人前の役者と申せません。私は、いくつにな

っても満足にやれたという心境になりませんから、女形の心を常々備えております。」と言われた。一心に芸をみがくような先生の心構えは、強い教訓となって私の胸をついた。

花柳先生が風呂を浴びる間、茶菓の接待をしてくださる勝子夫人が、

「主人は、医師から舞台出演を禁じられていますが、舞台で往生するのが役者の本望だと言って、医師の注意も私の心配もききいれません。

三宅先生は、裁判のために精魂を打ちこみ、人様を救うために、ご苦労のすえ、大往生を遂げられたおかただから、自分も大いに見習うべき恩人だと申しております。私も俳優の妻として主人の覚悟と同じ気持です」



故　花柳章太郎先生

といいながらも勝子夫人のかたわらには、心電図をとる機械が持ちこまれ、一途に御主人の身を案じている夫人の温かい思いやりと、健気な姿に胸があつくなる感銘を覚えました。この勝子夫人の内助の功によって、花柳先生は、あらゆる試錬を乗り越え、名女形としての地位を築き、大きなみのりとして芸術院会員、文化功労者などの栄誉を受けられ、ほか

に、演劇界、文化界からも数多くの授賞に輝やき、芸道に不滅の功績を樹てられたのである。
「武沢君が、三宅先生について『想い出の手記』を活字にしたので持参しました」
と言って、内藤さんが、「法曹」第一六六号掲載の私が書いた「上司と下僚」の抜き刷り部分を花柳先生にお渡しすると
「ありがたく拝見します」
と受取ってくださった。内藤さんと花柳先生の親しみのあるお話を伺っているうちに、花柳先生が三宅先生と極めて深いご交際があったことがわかりました。花柳先生は
「そう、そう、来年は、三宅先生の一七回忌になりますね。内藤さん、もし、私が生きていたら何かお役に立ちたいですね。」
と言われたが、それから三ヶ月余り経った四〇年一月六日に、花柳先生は永眠された。
「もし、私が生きていたら」
という霊感的な予言の因縁浅からぬできごとに感慨無量でありました。

ひとなみの幸を　　検印省略

昭和51年11月　初版　第1刷発行　定価1,000円
（送料実費）

不許
復製

著　者　武　沢　静　雄
〒227　横浜市緑区長津田町3016—1.14棟1445号
電　話　045（981）7　8　6　1
印刷所　星野精版印刷株式会社
〒101　東京都千代田区内神田2—14—11号
郵便はがきでご連絡ください